

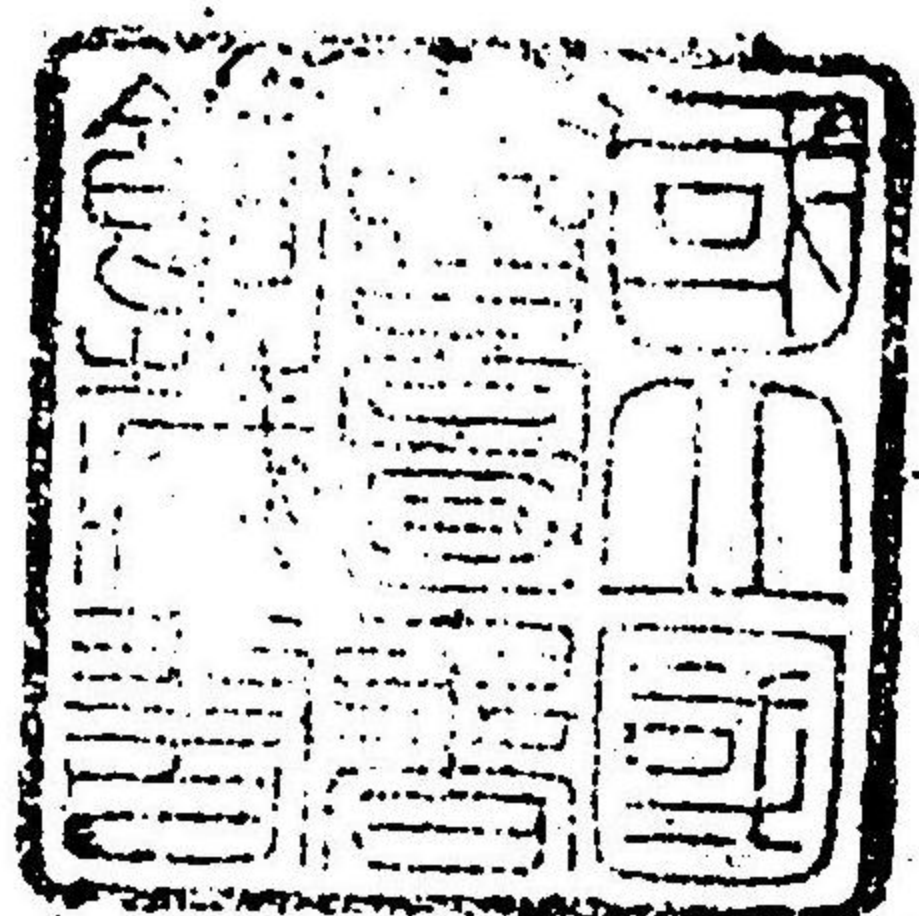
富田景周編輯

三州志

韃藥餘考

自卷之十
至卷之十七

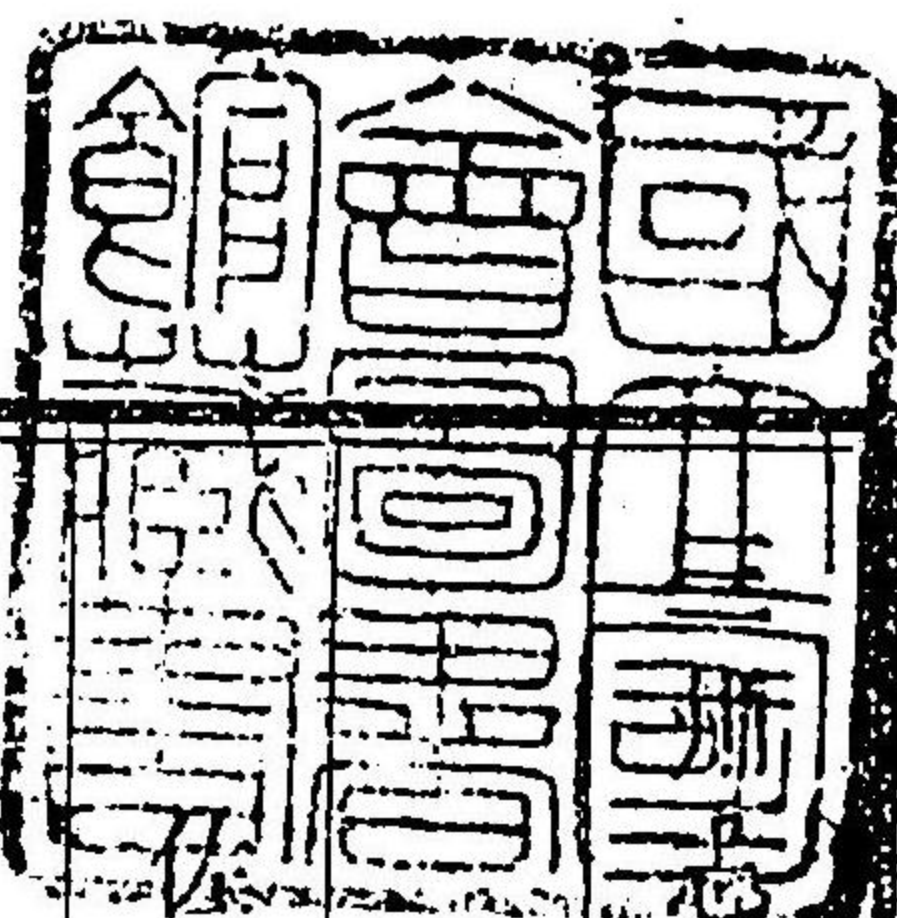
益智館印行



214.3
T0991A



261895



韃藥餘考卷之十

加賀州 金澤 富田景周大賚編輯

佐成政姦謀且攻旭山寨 國祖援之

天正十二年甲申夏四月秀吉公ト織田信雄卿ト尾州長湫ニテ

湫ハ康熙字典ニ北人池水ヲ湫トストアリ本邦尾濃ノ俗池水ニ草生スル者ヲ湫ト云尾張ノ長湫東美濃ノ細湫大湫是也和訓クテ也故ニ久手ト書ケル記モ

アリ對軍 長氏家傳ニ 國祖ヨリ加勢トシテ長連龍ヲ秀吉公ノ陣營ヘ遣サル連龍兵一千ヲ率テ尾州ヘ出張シ秀吉公濃州竹鼻ノ不破源六ノ守城

ヲ攻ラル、時連龍其手ニ屬シ戰功アリト云云 神君師ヲ帥テ信雄卿ヲ輔ケ秀吉公利ナ

クシテ 秀吉公池田勝入森長一ヲシテ 神君ノ封國參河ヲ襲ハシ 交綏スム 神君班軍シテ逆擊ス因テ西軍敗績シ池田森等戰死ス

此釁ヲ覲ヒ佐々成政密ニ以爲ラク我レ信雄卿ヲ佐ケ北國ヨ

リ出軍シ秀吉ノ後ニ出信雄卿ト腹背ヨリ秀吉ヲ挾撃セント

進者崎ノ字ハ
中昔ヨリ誤リ
來ルナラン天
正十一年八月
井日佐佐成政
ヨリ立山室堂
本願ヘノ米依
寄進書狀ニ岩
倉トアリ慶長
七年十二月九

日 國祝ヨリ
立山中宮寺衆
徒社人ハ賜ハ
ル寄附書狀及
ヒ二十年十二
月廿日 微妙
公ヨリ桂堂中
宮寺ヘノ寄附
狀ニ盛倉トア
リコレニテ知
ルヘシ又按ス
ルニ立山ノ別
山ヲ越ユレハ
其下ニ内藏助
谷ト云谷アリ
然レハ成政立
山ヲ越ヘ内藏
助谷ノ間ヲ過
キ黒部ノ河上
ノ河端ノ小徑
ヲツタヒ針ノ
水谷北又下進
ミ針本峠ヲ過
ヘ信州ノ野口
村ヘ出シナル
地名ハ今立山
ノ此方ニアリ
沙羅沙羅越ノ
道カ

乃遠州時ニ神尾州 信雄卿 君在遠州 在尾州ニ行キ面アタリニ其軍議ヲ定メント
欲ス然レトモ此時北國街道ハ加賀ニ我公アリ南越ニ丹羽
氏アリ並ヒニ秀吉公ト睦シ越後路ヘ出ントスルモ亦上杉景
勝アツテ秀吉公ト通ス飛驒ノ淫道ヘ出ントスルモ敵アリ金
氏未タ入國ナキ 信州松本ヘ出ル道ニ沙羅沙羅越ト云所アリ險
甚シ成政秋七月此道ヨリ有澤永貞云若キ時越中ニ居住シ立山禪定シ
テ其道ヲ鄉導ニ問コノ山絶嶮ニ道只一筋
ナリ新宮ヲ岩倉ト云爰マテハ平地也爰ヨリ三里許險路ヲ行テ中宮ヲ蘆崎ト
云按スルニ崎字ク
書ニナシ和字カ爰マテハ馬モ通フ也此ヨリ立山御前マテ九里餘也其道激水
ヲ涉リ險阻ヲ傳ヘ岩ヲ踏ミ峯ニ上ル亦難所ノ比スヘキナシ至險五里許上リ
テ不動堂ト云ニ至リ爰ヨリ立山ヘハ北ノ方左ヘツク沙羅沙羅越ハ右ヘツク
其末ハ知ラス人ノ常ニ通フ道ニアラス深谷大キニキレテ下テ又上ル風雨ニ
逢トキハ進退度ヲ失フ夜宿セントスルニ民屋モナク洞穴ニ息フノ由ナリ信
州野口村ト云山家ヘ出ルナリ蘆崎ヨリ十一里許アリト云傳フ爰ヨリ松本ヘ
出人馬ヲヤトヒテ木曾路カ伊奈通リヲ行キテ遠州カ尾州ヘ出タルナルヘシ

ホテ大開記ニ十一月下旬ニ越中ヲ立テ十二月ニ歸城トアルハ不審シ蘆崎ノ
者ニ問フニ冬日立山ニ登ルコトハ絶テナキコトナリ禪定ハ六七月ノ雨月ニ
極マル年ニヨリテ寒氣遅ケレハ暮秋ニハ不動堂マテハ上ルコトアリト云十
一二月ノ比人ノ通フコトナシ其上年加州ノ 前田公ト戰フ起リハ七月ノ
末ヨリシテ九月ニ至テ能州末森ノ城攻後卷等ノコトアリ沙羅々々越コシテ
ノ後加州ノ計策ニ及ヒタルコトナレハ六月七月ノ間ニコソ尾州遠州ヘモ行
ツラメ其上今年十月ニ至テ秀吉公ト信雄卿トノ和平相スムナレハ霜月臘月
深雪ヲ踏分ケテ行クヘキ理ナシト云云景周按スルニ三盡記ニ十一月二十三
日成政サラセテ越ヲコヘ十二月四日遠州濱松ニ至リ 神君ニ謁ストシ七國
志武徳大成記等ニモ十二月成政遠州ニ至ルトス並ニ引証スヘカラス是ハ十
一月ト七月ト字體似クルヲ誤寫セルコト疑ヘカラス諸書ノ誤リ皆大開記ヲ
因襲シテ之ニ及ト見ユ又三州水經ニ立山湯谷川此谷南ニ温泉アリ成政十一
月四日信州ヘ越ルノトキ此温泉ニ入湯シ日和ヲ待テ同月二十八日 神君ヘ
内應ノコトアリ此温泉道ニ松尾ト云大難所アリ上リ下リ三里是ヲ沙羅々々
越ト云成政入湯ノ時ノ湯舟今猶アリ厚サ一尺許此湯舟ハ今ノ湯ツホヨリ一
段上ニ在ト云又賀邦錄ニ横目足輕野村次右衛門越中三日市邊ナル上野ト云
所ヨリ信州松本ヘノ道ヲ過ルニ高山ヨリ水流出テ越後ノ方ヘ流ルハ姫川ノ
源ニテ其所ニ橋アリ沙羅々々有テ美濃ヘモ出成政ノ沙羅々々越ヲコユルト
云ハ此路ノ山上人云傳フ真ノ沙羅々々越ハ高山ヨリ東海道ノ方ヘ流出ル河
アリ其所至險ニテ六七月モ容易ニ踏カタキ地勢ト云トアリ又信濃地名考ニ

信州大町ノ西ニ高瀬川アリ此川五六嶽ニ出ツ又北ノ方ノ野口入ノ水ニ會フ此邊ヲサテサラ越ト云天正中越中ノ佐々成政此ニ至ルユヘ佐々越トモ云フ

可參稽 東美濃へ出テ 神君及ヒ信雄卿ニ謁シ此時節成政モ

北國ヨリ發旗シ輔車ノ援ヲナスヘシ立功ノ後ハ加賀能登越

前ノ三州 一説若狹越前越後 佐渡ノ四州トアリ ヲ賜ハルヘシト内約シ又沙羅沙羅越

ヨリ歸リ先ツ我 國祖ヲ賣弄セント密ニ村井長賴へ油屋小

金ヲ 小金一作古今京都ノ賈人也村井佐々ノ兩家へ恒ニ親シク出入スルモノ也 以テ 公ノ次息又若君 利政君是

也混目集作又六ノ異 也 女二人アリ妹ハ秀吉公へ質タリ今 說アリ今棄テ不取之 又若君ヲ迎へテ姉ノ婿トセント也

婿トシソノ後ヲ讓ラン旨ヲ言送ル長賴即チ 公へ其旨達シ

ケレハ胥議アツテ 林道春ノ秀吉譜十一日秀吉任關白而參内信雄秀長秀次浮田秀家前田利家徳川秀康等扈從トアリ然レハ

國祖ノ此商議ハ七月十一日扈從ノ上京ノ前ニアルカ若クハ扈從終リ飯國ノ上ニ在ルカ可考何レニモ甚タ日數逼迫ナル者也 隣國ナレハ

然ルヘキトテ聽允ノ答ヘアリ時ニ秋七月二十七日 諸本二十三 日トアリ今

村井家記ニ 成政ノ將佐々平左衛門 先是ニモ村井方マテ來リ 公ノ 納

采ノ儀物ヲ齎シ來ル依テ綺膳ヲ賜ヒ又若君散樂ノ舞ヲナシ

テ見セシメ且勞使ノ儀物種々ヲ賜ハツテ歸サセラレ八月上

旬長賴ヲ以テ謝儀ノ使ヲ爲シメントス 一説ニ此時我 公長賴へ 此儀ノ使ヲ勤ムヘキノ命

アルヲ成政之ヲ聞キ八月ハ配偶月ニ非サレハ延日シ玉ヘト云來ルト也又一

説ニ此時成政長賴ニ逢ヒ 公ノ速ヤカニ許諾アルヲ悦ヒ近日又若君ヲ迎フ

ヘキコトナレトモ此月配偶月ニ非ス來月良辰ヲ選フヘシト是等ノ言ノ 然ル

ニ本月十七日長賴ノ騎吏小林彌六左衛門方へ 今村井大夫家 臣四郎兵衛祖 成

政ノ同朋正林 正林モトハ越中正法寺養雲 或作養顯 云一向坊主也成政ノ 家臣前野小兵衛ニ好ニ有ユヘ同朋トナル然ルニ其昔正林

小林カ爲ニ死命ヲ救ハルコトアル 密ニ來リ告ケテ曰ク乃者成政

老臣ヲ城ノ南樓ニ聚メ 正林時ニ此樓戸開閉ノ役也 前田公ノ不虞ヲ擣テ加

州併吞ノ内計アリト 時ニ正林へ黄金二枚ヲ賜テ歸へス一作金二百兩非ナリ 是ニ因テ 公長頼

暨ヒ岡島喜三郎 岡島家譜ヲ按スルニ此時采知三千九百五十石也末森ノ戰功ニ因テ二千石加恩アツテ五千九百五十石トナル世

本此時一万四千七百石トナスハ非也此子孫本貫ハ享保九年圓 片山内膳 後

次郎ニテ斷絶也今ノ市郎兵衛家ハ嫡家トイヘトモ配分知ナリ 伊賀ト號ス慶長四年閏三月十日 一作十 石川左源太松田四郎左衛門 瑞龍 公ノ命ヲ承テ大坂ニ於テ伊賀ヲ殺ス是 神君答ノコトアルニ因ルト云 不破

彦三 傳天正十一年ニ記ス實名直光 等ト商議有リテ先ツ賀越ノ界

ナル朝日山ニ寨ヲ 河北郡朝日村ノ東山今化生村領ノ芝山ニシテ一乘寺堡迹ノ向也涅槃猶存ス 築カシメシ

ト廿二日ニ長頼ヲ首將トシ高畠九藏 石見弟也村井長明筆記ニハ九藏ヲ平左衛門ニ作ル

田又右衛門 今ノ又右衛門祖 ヲ裨將トシ其餘銃將四員併セテ一千五百

ノ兵卒ヲ遣シ二三日ニシテ外柵ヲ作りテ之レヲ圍列ス二十

八日成政モ朝日山ヲ屠ラント佐々平左衛門前野小兵衛ヲ首

將トシテ銃甲五千ヲ二隊トナシ松根ト 松根ハ賀越ノ界道小原越ノ間ニアリ今モ遺跡存ス

此時松根ノ守將シレヌ此以後末森問答ニ 横根 今南横根村領山ノ方ヨリ

來リ加賀軍ヲ見テ愕然タリ而シテ塹堞未タ全タカラス守兵

モ寡ナシ乃 守兵七八百ト云 兵ヲ前メテ急攻ス長頼直ニ江見藤十郎阿

波賀五郎八 村井家記作藤八長明筆記ニハ五郎右衛門ニ作ル江見阿波賀ノ二士馬回トアリ二士ノ末孫今不詳又天正十三年二月二十八日

瑞龍公ヨリ村井へ賜ル書中ニ其方寄騎吉川平太江見藤十郎トアレハ江見此

比ハ村井ノ與力也サレハ阿波賀モ同事ナラン又村井家傳ニ江見馬回ノ處末

森ノ時分長頼ノ ヲシテ 金澤へ此事ヲ報セシム 江見阿波賀此時修堡ノ勞ヲ謝セン爲ニ金

澤ヨリ村井カ方へ使ヒセシメ玉フ者也然ルニ村井此コトヲ金澤へ歸リ告ン

コトヲ囑ス因テ二子答テ曰ク此危急ノ場ニ來リ會フハ幸也共ニ此所ニ在テ

防禦センコトヲ望ミ固クソノ使ヲ辭ス村井屈ス忽チ一智計ヲ按シ出シテ曰

ク此往々カ銳兵ノ起ルヲ聞カハ金澤へノ道路ニ賊徒ヒテ起ルヘシ今足下使

チ辭スルハ賊徒ノ路ヲ塞カンコトヲ怯ル、ニ非スヤト二子此言ニ激セラレ
奮然トシテ金澤ヘノ使ヲ爲ント云ヘハ長賴喜ラ曰ク我防死セハ我屍壘外ニ
在ント此旨併セ告ケヨト言ケ
レハ二子乃旭山ヲ發スト云
公之ヲ聞玉ヒ後距トシテ金府ヲ出

馬シ玉ヘハ不破片山岡鳥種村三郎四郎
種村或作田名村多野村此
士後ニ本藩ヲ退キ慶長中

京都ニ住シ 瑞龍公 東照公ノ疑ヲ蒙ラセラル、トキ我 公ノ爲ニ馳走ス
ト云一書ニ種村肖推寺ハ柴田勝家ノ臣也勝家滅後 國祖二万石ヲ以テ招キ

玉ヘトモ不起嵯峨ニ隱遁シ琵琶ヲ彈シテ志ヲ願フ因テ 國祖曾テ信長公ニ
リ玉泉院殿ヘ進セラル白雲ト云琵琶ノ名物アリ之ヲ贈リ肖推寺ノ孫三郎四

郎ヲ小將ニ招キ五千石ヲ賜フ後ニ三郎四郎ノ若黨途中ニテ横山山城ヘ刀ヲ
以テ斬カクルコトニ因テ骸ヲ乞本藩ヲ去ルト云或云此後淺野家ヘ招カレ仕

ナリ 原彦次郎 傳記天正十一年坊本作隱岐守非也叙符セルハ是ヨリ後ノコ
ト同心シテ泉セラレ 武部助十郎 傳未 以下銳士五六十騎進ミキ

ホヒ小原口 河北郡百ク坂ノ下ヨリ 指テソ急キケル 按ルニ旭堡ヘ
東ヘ入ル是亦越中道也 二日市ヨリ行

ク木道アレハ 公ソナクヘ向ヒ玉ヒ不破以下ハ敵ノ後ヲ遮ラント小原口ヨ
リ進ムノ義カ其文義分明ナラストイヘトモ私ニ改竄ノコト卒爾ナレハ姑ク

舊文ニ因テ 此時佐々前野ハ朝日山ヲ攻ルニ俄然トシテ黑雲起
本文ヲ立

リ沛然トシテ凍雨來リ風沙面ヲ撲テ雷霆魄ヲ號ヘハ越兵奮
攻スルコト能ハス遠卷ニセシカ 公後距シ玉フト聞キ富山

ヘ綏ソク 公長賴ノ勇敢ヲ賞シ而シテ諸寨ニ戍兵ノ將ヲ置

キ 能州七尾城本丸ニハ前田五郎兵衛安勝君其子孫左衛門長繼高島織部定吉
中川清六光重等其兵三千同國德丸城ニハ長九郎左衛門連龍ノ一黨同國末

森城ニハ奥村助右衛門永福千秋主殿助土肥伊豫瀧澤金右衛門ヲ守將トシテ
千五百人加州津幡城ニハ前田右近將監秀繼君其子又次郎利秀ヲ守將トシテ

其兵二千同國鳥越城ニハ目賀多又右衛門丹羽源十郎古澤嘉兵衛ヲ守將トシ
テ其兵五百ヲ置ク一書ニ越中界旭山堡ニハ村井又兵衛高島九藏其外足輕頭

四人充番手持也松根堡ニハ村井又兵衛青山與三原田又右衛門其外足輕番手
持也加州指江ノ後口鉢伏ニハ湯原八佑能州羽咋郡ノ城ニハ高島織部ヲ置ク

又一書ニ七尾ト津幡ト道程隔リグレハ繫キノ城ノ爲メ能越加三國界ニ末森
ト云古城アレハ 此堡ハ土肥但馬ノ居城跡ニテ破損修理アツテ城代ヲ
是ヲ修ク本丸ニ

奥村二丸ニ千秋三丸ニ土肥ヲ 尾山ニ班軍シ秀吉公ヘ使札ヲ馳テ此
世普請ヲ急カセラハトナリ

曲折ヲ告ケ玉フ 秀吉公使者ニ見ヘテ感嘆シ即チ使者ニ黄金三十兩ヲ賜
ナルヲ知ルユヘ其鎮ヘトシテ前田ヲ加州ニ置キシナリ我ノ人ヲ知ノ明瞭豈
タカハンヤ前田佐々勇烈智略ノ優劣既ニ先知セリト即チ使者ニ返答アツテ
歸サセラルト云按スルニ秀吉公ヘ進セラル書ハ九月四日也秀吉公ノ返書ハ
同月八日也 瑞龍公ヨリモ呈書アリシト見ヘテ秀吉公ノ返書ノ寫ニ通年譜
ニ載テ詳也並ニ九月八日ノ月日ナリ

○前田長繼君等攻勝山

九月上旬 一作八月二十四日 成政前月旭山ノ役ニ酬ント諸老將ヲ集メテ

守寨ノ將ヲ定ム 俱利加羅ニ新寨ヲ構ヘ佐々平左衛門野野村主水ヲ守將

トス其兵二千同國阿尾城ハ菊池右衛門入道其子伊豆守ヲシテ手兵千餘ヲ以
テ守ラセ同州森山城ハ神保氏春其子清十郎ヲシテ手兵四千ヲ以テ守ラシム
又能越ノ界ニ新寨ヲカマヘ丹羽權平 伊太郎祖也成政ニ屬シニガ依テ食ミ越中境ノ城魚津
等ノ兵ヲシテ是ヲ守リテ能州七尾城ヲ鎮セシム 按ルニ是下文ノ勝山

カ然ラハ袋井隼人等守ル也丹羽モ其中ノ一人ナラシ一書ニ泊城ニハ丹羽權
平トアリ可追考此外此時同國城ケ端ニ河地才右衛門 河地才右衛門ハ今ノ松之助

越中ナル荒木松原所ノ城ヲ預リ天正十五年成政肥後替ノ時浪人シテ越前ニ於テ病死ス文祿元年
高徳公名古屋ノ陣所ニ於テ同田長右衛門取次ニテ才右衛門子ヲ被召出才右衛門ト名付ラレ四百石被
下ト家譜ニアリテ城ケ松根ノ砦ニ杉山主計 藩臣又チオキ各輪兵ヲ以テ増山ノ砦ヲ
端城ナキルコト見ヘス

守ラシム ト云云 此時長連龍ハ能州德丸城 鹿島郡德丸村ノ山ニ在テ越中

森山城 森一作守在射水郡ヨリ神保氏春ノ襲ハンコトヲ察シ手將

鈴木因幡 傳既在天正六年 ナシテ窪田館 鹿島郡東馬場ニ在シト云 ナ守ラシム因幡

頓智ヲ以テ館外ノ田間ヘ河水ヲ激入シテ要害トス氏春果シ

テ越兵三千ヲ率井テ荒山邊 鹿島郡 ニ出張シ德善河原ノ岷屋 按

ニ是今ノ 燒却ス因テ因幡ハ疑旌ヲ樹テ德丸ヨリ後援有ルヘ

キ形勢ヲ見スレハ神保モ狐疑シテ軍ヲ却ツケ 此トキ神保ヨリ

報トシテ觀セケルニ因幡ニシテ飯坂源右衛門ヲ斥候トシテ出シケリ畑ト飯
坂ト中途ニ行キアヒシカ兄弟ナレハ擊ニ忍ヒス山リテ飯坂畑ヲ欺キテ氏春
此地ニ滞留アラハ賀州ノ諸將四面ヨリ環擊セントノ計策アリト
イフ畑歸テ氏春ニ告ク氏春驚キ軍ヲ舉テ却ツト七國志ニアリ 勝山 在鹿島郡註天

正十年 二要害ヲ搆ヘ袋井隼人ヲ寘テ森山城へ還ヘル前田安勝

君 號五郎兵衛 國祖貴兄也 之ヲ聞テ急ニ勝山ヲ拔ント前田良繼

君 號孫左衛門 景周按譜安勝君男利好孫左衛門トアリ七尾ニ居シ後一万三千七百七十石ヲ領ス良繼ハ初名也 高畠定吉 號織部 後一万

七千石ヲ賜ヒ石見守ヲ 號清六郎後二万三千石ヲ賜ハリ 中川光重 武藏守ヲ拜ス今ノ清六郎ノ祖 ヲ首將

トシテ介士ヲ發シ勝山ニ薄ツテ鳥銃ヲ連放ス堡主袋井能ク

防キ能ク戰ヒ箭羽銃丸雨霰ノ若シ良繼君定吉等甲卒ヲ驕マ

シ寸步モ却ソカス既ニ城門ニ蟻結ス守兵禦防ニ堪ヘス城門

ヲ開テ突出奮闘ス城將師源七 時ニ十 八歳 笠間義兵衛 既見天 正十年ト 接鎗血

戰ス笠間右眼ヲ破ヲレ既ニ殺サルヘキヲ田邊將監 藩臣五郎 左衛門祖 鎗

ヲ捫シテ援ケ來リ源七ノ右眼ヲ刺ス源七茫乎トシテ進退ヲ

宗女後仕 國祖

失ヒシカ又林三丞來リテ源七ヲ援ケ將監ト苦撃シ交搏シテ

殺サル源七其郤ヲ得テ城ニ引去ル斯クテ越兵死力ヲ盡シテ

距捍ス而シテ攻軍猛鋒當ル可カラズ宗兵若干討レテ堡中ニ

引入ル是ヨリ堡兵遁道多ク僅ニ袋井師暨ヒ山崎喜左衛門石

黒采女以下十三人敢死ノ義節ヲ守リ一以テ千ニ當リ愈防撃

ヲ力メ木石ヲ連投シテ止マサリキ良繼君星ヲ見ルニ及ヒテ

圍ヲ解キテ七尾へ旋旆ス

○成政攻末森、奥村、永福等固守、二公急援得捷

八日 世本十日トシ或ハ十一日トス並ニ非也寛永十八年官へ上ラル、由緒ニ九日佐々俄ニ卒一萬人ニテ城ヲ攻ムルコト一日一夜トアリ然レハ

九日ハ攻城ノ日ナルヘシ左レハ富山發旗ノ日ハ八日ニシテ富山ヨリ能州マテ里數モアレハ其夜ハ坪井山ニ下營シ翌九日晝夜城ヲ攻ム而シテ十日 國

景周曰古者
項羽下之
敗至陽陵迷
失道問一田
父則父給曰
左則陷大
澤中以故漢
追及之今佐
成政亦爲

一曰父被欺
陷於險難蓋
助仁者惡不
仁者雖人情
之常若此二
田父不亦偉
哉

祖後援トシテ金澤ヲ發シテ
十一日ノ曉末森へ至ルナリ 成政能賀ノ通堡末森 又作末守在羽咋郡吉
田村領今猶本二三丸
後郭等ノチ攻メ能賀ヲ間斷セント 去夏ヨリ末森ニ 公ヨリ勇將及ヒ
遺跡存ス 兵五百許ヲ置ト云置與村永福既詳

天正九年大問記爲天正 富山ヲ發旗シ能州與郡へ出軍ノ形勢ヲナ
十一年五月七日不是

末森問答ニハ俱利加羅マテ人數ヲ押出ス體ニシテ一萬五千ノ軍兵ヲ率ユ
トアリ然レトモ當月十九日秀吉公ヨリ 國祖へノ書中ニ内藏介野心ヲ企
テ多勢ヲ催シ能州與郡へ可向休ニ饗シ不意ニ末守ニ 一萬五千 藤田安勝覺
押寄トアルヲ以テ証トシテ景周此本文ヲ立ルナリ 書ニハ此時
人數二万ト 微妙公曰フトアリ小瀬 ノ甲兵ヲ率井夜ニ入り 此夜小雨
甫菴ノ大問記其它皆一万五千トアリ

メル 行軍ヲ進メテ礪波郡ノ宮島ヨリ 宮島谷道ノコ 澤河ニ至リ 澤
能越二州ニアリ佐々ノ 農夫田畑兵衛ト云者ヲ鄉導トシテ牛首 昨
至ルハ越中ノ澤河ナリ

郡ニ出テ是ヨリ西方菴ヲ導引トシテ險路ヲ經 一説寶達山後ノ
出軍シ村々ヲ放火ストアリ又一書ニ此時成政加州ノ鳥越堡ヲ攻ント富山ヲ
發シ澤河ヨリ下河井ノ地ニツキ小川鯨之助ヲシテ鄉導ノタメ田畑兵衛ヲ求

メテ行軍ヲ押ケルニ兵衛我 公ニ傾心アリケレハ却テ險難ノ腋道へ成政ヲ
導キ行ホトニ越兵困苦時刻ヲ費ヤシ漸ク十一日吾妻野ニ着ヌ成政此所ニテ
軍議シ末森ヲ板ント壺井山ニ下營スト云斯クテ 公利軍ノ後兵衛へ是マテ
能州口郡先領主ノ三宅彈正家秀ヨリ與へ置キシ所ノ羽咋郡志雄保南山ノ内
蛇崩十八尾並泉原三ヶ所ヲ天正十二年十一月六日此恩賞トシテ 公判書ヲ
以テ永代之ニ玉フテ被扶持也自夫代代印書ヲ賜ハリ今ノ兵衛ニ至ルマテ無
別義其御書今猶家藏ス但シ慶長十年一統
ノ内開田ヲ草高十一石三斗ノ扶持高ニ打渡サル
今ニ至ルマテ然リ尤賜山ノ分ハ故ノコトシ 森一里十町餘 天神林

今猶有 陣ヲ取レハ本陣ハ坪井山麓ニ據テ下營ス 坪井又作壺井
天神社 末森ヨリ一里

半強アリト云一説ニハ二里脇トアリ年譜ニハ四里トアリ可參考高澤忠順云
成政ノ坪山陣跡ハ末森ヨリ南一里餘山止ニ其延三十間計ニ衰七八十間許ノ
地アリ今其山麓ニ農家アリテ之ヲ坪山村ト云○景周末森古圖ヲ按スルニ成
政坪井山本陣ヨリ能州寶達山通リ峰ヲカキリテ越中ノ地界マテ道程五里或
ハ四里或ハ險シキヲ厭ハサレハ三里有奇ノ捷路アリ越中ハ元ヨリ皆成政
ノ領分ナリ左レハ敵地へ此度三四里踏入ル也坪井山今ハ皆畑トナレリ 此
ニ軍配ノツテ 一書ニハ吾妻野ニテ軍配ストアリ末森問答ニ云其備へ配
矢部五郎右衛門之ニ向フ搦手ノ長坂通へハ野々村主水本庄市兵衛齋藤平右
衛門櫻搦助堀田次郎右衛門攻寄セ東ノ方ナル若宮丸ト三丸ノ後虎口へハ野

入平右衛門寺島甚助同牛之助山ニ沿テ押寄ル旗本ノ前備ハ佐々平左衛門山下甚八等也又相賀ノ神保安藝守其男清十郎ハ三千餘ノ人数ニテ金澤衆ノ後援ヲ押ヘトシテ河尻ト高松トノ間砂山ノ松原ニ陣ス 神保父子ハ兵四千ニテ北川尻 羽昨へ出

張シ陰陽二隊ヲ設ケ尾山ヨリノ援ヲ防カンカ爲メ河流ヲ陣

前ニ當ツ 神保ハ河尻ト高松ノ間 斯テ九日成政ノ前軍野々村主水

按スルニ我舊臣ノ二百二十石トリシ野々村勘左衛門ト云者寛文九年丹後ニテ斷絶ス又貞享四年千石大小姓野々村忠左衛門ト云フモノ故アリテ追放セ

ラル是等皆此主水 久世但馬 按スルニ慶長十七年越前少將忠直ノ家老久世ノ後孫ナルヘシ 但馬ヲ成敗スルコトアリ然レハ此但馬ノ子孫

越前ニ仕ヘルカ今本藩 菊池右衛門其子伊豆 藩臣大 堀與八郎 藩臣今ノ久世ノ祖ニハ非ス 學ノ祖

郎ノ 山下甚八郎本庄市兵衛 我舊臣ニ千八百石本庄主馬アリ浪花ノ役後骸骨ヲ乞テ京へ去ル若クハ此市兵衛ノ

後ニ非ラ サルカ 佐々與左衛門 與一 齋藤半右衛門 半一 櫻勘介 櫻一作櫻

櫻モ成政没後本藩ニ來仕ス然ルニ或日伏見邸ノ書院ニ畫 堀田次郎右衛 寢スルヲ 瑞龍公怒リテ北村八兵衛ニ命シ斬殺スト云

門等 堀田ハ今富山ノ 其兵八千麥生ヨリ駒ケ嶽黒谷 以上三所ニ上 臣平右衛門ノ祖 在羽昨郡

ホリコレヨリ末森城下へ鼓譟雲聚シ燔焼セントス 末森問答ニ云明發ノ比

北村平五郎ヲ初メ物見ノ武者大手近ク乘回シ弓鐵炮ヲ烈ク放テ竹生野ノ町口マテ猛攻シ町口ヲ放火セントス因テ奥村父子三千餘騎ニ足輕少シシ從へ

籠城戸ヨリ出戦ス而シテ敵ノ猛攻當リ難ク家士野瀬次郎右衛門三輪勘左衛門同彌十郎馬印持新四郎等二三度返シ合セ助右衛門ヲ小丸へ引取ラシム其

時城門隱シ櫓上ケ簀戸ヲ御サシテ引取リシユへ敵尾撃シ來ルヲ助右衛門ノ家臣野崎孫助同與右衛門槍ヲ入レ押崩シ助右衛門ハ人数ヲ引取リ上ケ簀

戸ヲ御シ城ニ入ルト云云以上永福ノ家士 又野入平右衛門等寺島甚助 六人ノ末孫今奥村ノ家臣ニハ一人モナシ

同牛助 甚助牛助ハ兄弟ニテ其後共ニ本藩ニ仕フ甚助ハ西野隼人ノ子也 瑞龍公二千石ヲ賜フ 初仕神保氏春氏命メ苗今ノ次郎太夫ノ祖也牛助ハ

姓ヲ改メヌシテ千五百 山ニ沿テ若宮丸 末森城中三丸 ト外羅城トノ 石ヲ賜フ今ノ藏人ノ祖

後口突門ヲ攻ムソノ勢ヒ甚タ猛ケシ外羅城ノ守將土肥伊豫

國祖ノ先鋒ノ將土肥但馬去年柳ヶ瀬ニテ戰死ス其子四郎左衛門此時三歳也 但馬末森ニ在リシコト既ニ天文十九年ニ注ス伊豫ハ但馬ノ甥ナレハ四郎左

衛門ノ後見トシテ此時末森ニアリト也伊豫屋敷末森大手ノ下
田子村邊ニ在シ由方人今ニ口碑ス但馬ハ今ノ四郎左衛門ノ祖
之ヲ追拂ン

ト兵二百ヲ率井テ 長明筆記ニハ三十人許ヲ從ヘ伊豫 擊テ出テ 末森
半里許アルチリコト云所マテ出ル 吉田口荅ケ丸ノ 若ケ丸不詳若クハ
ト也チリコハ今吉田村垣地ノ名 若宮丸ノコトカ 門

際ニテ戰死ス敵士堀虎福 享年 首ヲ得伊豫カ從兵七八十人鑿

トナル 景周按スルニ此若宮丸ト三丸ノ後虎口トハ坪井山ヨリ上田河原吉
田ノ山路ヲ經テ三ノ丸若宮丸ヘ向フ虎口ナリ此虎口ハ今ノ圖ニ不

詳シテ古圖ニアリ此邊二百年許ノ間 越兵愈銳氣凜然トシテ挫ク可
遺蹟崩缺シテ道脈古今ノ變シルヘシ

カラステニ寺島等奮進シ成政モ此吉田口ヨリ來進シ自カラ

指揮シテ兵氣ヲ勵マス城中ニハ奥村永福 傳在天正九年後拜 其子
榮明 初号助十郎後拜河内守後 同姓采女 五千石即源左衛門ノ祖此時十五

歲也世本爲因幡然レトモ因幡ノ 碑文ニハ 千秋主殿助範昌 次郎吉ノ祖コノ 瀧澤金右衛門 一書ニ瀧澤
見ニス 時二九ヲ守ル 後ニ大西ト

景周曰 國祖 置與村永福於 末森者以詳於 荒子守其節也 嗟乎誠心之感 人鮮一旦遇厄 難天何掩其美 子蓋與夫泰西 巴同一般也

追考與村助右 衛門家傳ノ寫 二此時防戰武 功ノ臣名ハ三 輪勘左衛門野 崎孫助前波三 四郎野瀬次郎 右衛門勘科權 丞原内記下田 新五郎岩田作 内野崎新六小 泉勘右衛門古 田與左衛門三 輪助左衛門野 崎與左衛門崎 汐仁右衛門中 村小左衛門前 川與五左衛門 原八左衛門此

改ム大西金右衛門初メ信長公ニ仕ヘ公生害ノ後 國祖召シテ 等死力ヲ盡
千石ヲ賜フ實子ナキヲ以テ家絶ユト葛卷昌興ノ筆記ニ見ユ

シテ防守スレトモ越兵累進シ生兵ヲ代テ急攻ス羅城ノ守將

範昌禦ク能ハス 此時城埤僅ニ一重ニナリ 兵ノ爲メニ死スルモノ

百許僵屍葬ノ如シ 攻防ノ間ハ己刻ヨリ申刻ニ至ルト云此時堀半右衛門
及ヒ其弟左太郎モ戰死スト云然レトモ下注ニ又見ユ

可併 因テ範昌剩兵ヲ引テ牙城ニ保ム 本庄清七矢部五郎右衛

門 藩臣七左衛門 等愈銳氣ニ乘シ外羅城ノ門ヲ破ラントス永福

及ヒ其弟加兵衛其餘藁科新助三輪勘左衛門同彌十郎野崎新

六同孫助高崎次兵衛前波三四郎 今存ル前波 白井四郎右衛門高

野瀬左近 藁科以下九人ノ末孫及ヒ山來傳シレヌ但シ藁科ハ浪華ノ役ニ藁
科助五郎ト云者見コ是此新助ノ子ナルカ今ハ藩臣ニ此姓ナシ

瀧澤金右衛門等之ヲ強防シ敵首ヲ斬リ或ハ重創ヲ被セテ引

外藤崎某トアリ按スルニ此内藤村權丞ハ將助ト同人カ蓋此家傳ニ從フハ本注ノ高崎次郎兵衛白井四郎右衛門高野權左近ハ奥村家臣ニハ非スト見ユ蓋澤ハ尤公臣也他日ノ撰撰ヲ依ツ

トル時ニ霧雨冥濛山路泥滑往來不便ナレハ成政モ一旦坪井

山本營へ退ク

世本ニ此時既ニ本丸埤一重ニナレハ成政安堵ノ思ヲナシ今夜ハ諸士ノ軍勞ヲ休メ明曉一時ニ攻メ取ルヘシト軍糧

ヲ調ヘ甲ヲ脱シテ休ストアリ是軍事ヲ知ラサル者ノ臆説ニテ取ルニクラス己ニシテ城中ニ軍儲モ乏シ

ク末森ノ卯辰ノ山鹿ニ人馬ノ糧營五所アリ佐々平左衛門兵ヲ引テ之ヲ奪ヒ取ルニヨリテ儲峙ニ困シムト也波路モ斷レ

公廣岡ノ水ヲ持セ來ツテ與ヘ玉窘蹙コ、ニ窮マリ一書ニ此時城士永福

等ヲ焚ステ死ヲ決スト云也又此時永福ノ妻手自カラ粥ヲ炊キテ守兵諸人ノ勞ヲ勵マストナリ奥村氏碑誌ニハ永福内子加藤氏持長刀率侍女巡城拊循士

皆感激勇氣百倍トアリ○一説範昌ハ東ノ丸ヲ守ル時ニ成政ノ方ヨリ河村平四郎ヲ以テ

與ヘント云範昌此旨ヲ永福ニ告ケシカハ永福範昌ノ節義ヲ感シ奥村加兵衛

永福ヘモ反心ヲ勸ム因テ永福守口ヲ餘人ニ代トアリ此説妄誕也若シ此時此

反心アラハ子孫豈今日マテ存スルモノアラシヤ其上此時公ヨリ永福ト同

文ノ感書ニテ當月十六日千俵ヲ賜フ也其書文ハ舊記ニ載ス見ルヘシ千秋家

傳ニハ北國大平記選述ノ時作者ヨリ屢範昌ノ傳ヲ需ントモ與ヘス因テ之ヲ

憤リ陳壽貶臥龍ノ狡ニ傲フト云云十日ニ羽書ヲ飛ハシテ急ヲ告ク其書公ノ由

告急於利家所居加州金澤城トアレハ是正説也問答ニハ十日己時金澤へ到

來ト云非也此羽書ノ使ハ永福ノ家人山田仁左衛門トモ亦野崎孫介トモ飯倉

孫兵衛トモアリ午後ニ尾山ニ届ル公緘ヲ披キ即下ニ令ヲ下シテ出

軍申刻ト云一説未時トスルハ非也按スルニ未時告急申時出軍トスルモアマ

ナルヘシ藤田安勝覺書云佐々人敷ヲ出シ先手ヲ以テ攻ル旨金澤へ晝八時過ニ聞ユトアリ河北門ヨリ馬ニ鞭ヲ加

ヘ玉フ此時公ノ兜ハトツハイノ烏帽子形ニテ長三尺鍬共總金也甲ハ金

上帶定十死一生之心率三千人兼日夜進發十一日黎明至末森云一説公若甲

ノ時上帶及ヒ鉢巻及兜ノ忌緒ノ先キ切捨玉ヒ鎧ノ目釘ヲ抜キ鐵釘ヲ打コミ

其先ヲ打返シ決死ノ態ヲ示シ玉フトアリ然レトモ按ルニ是只上帶ノ端ヲ絶

テ決死ノ態ヲ示シ玉フナルヘシ兜ハ着ルニ節アリ匹夫トイヘトモ戰ハサル

トキハ高紐ニ留メルノ議アリ況ヤ大將ヲヤ如此ノ急事ニハ騎馬ノ隨兵ニ持

サルヘシ是古ニ所謂替ノ武士也然ルチ鎧ノ目釘ニ及フト云ハ軍事ヲ知サ

ル者ノ説也高松ニテ袴甲ノコト下文ノ本文ニアリ是ニテ知ルヘシ即チ藤田

安勝覺書ニモ公草鞋ノ緒ヲカナ結ヒニシ其餘分チ小刀ニテ切り再ヒハキ

追人ハモ
ト信長公ノ臣
也天正八年四
月勝家ノ加賀
森陣中へ安土
ヨリ木下助右
衛門下此集人
ト阿使下サ
レ勝家能登加
賀ヲ能ク仕付
タル休ヲ安土
へ歸リテ言上
ス公祝若ノ上
此阿使ヲ賞シ
御服ニ帷子ヲ
副へ賜ハルト
太田日記ニ見
ユ然レハ公生
守後 國祖ノ
臣トナルト見
ユ

カベシト獨言シ玉フトナリ世ニ之ヲ胃ノ忍緒ヲカナ結ニナシ其先チ小刀ニ
テ切り玉フト云ハ誤リノ由 微妙公御意アリトナリ君夫人 公ニ鎧ヲ着セ
玉フトキ祝盤ヲトアルニ 公ノ乳母アハテ、黒米ヲ三方ニ載出スチ君夫人
是ニ鯉ヲ添へ勝米ノ内ヲ上ルト出軍ヲ賀セラルト也時ニ取テ諸士君夫人ノ
願智ヲ嘉 尾山城ニハ前田利久君 号藏人 國 暨ヒ魚住隼人 接ルニ
ストナリ

三年九月十一日秀吉公ヨリ 國祖へ賜ハル書中ニ貴殿舎兄前田藏人入道扱
ハ魚住隼人此者共昔ヨリ存ル仁ニ候此兩人末森遠間ノ時金澤城代被置候處
ニ心妙ノ休聞及候老テノ武邊ト感シ申トアリ此魚住後胤イカ、ナリシニヤ
今藩臣ニ此子孫ナシ元和ノ士籍ニ二百石魚住與右衛門又軍兵衛見ユ是等此
族ナ 篠原彌助 勘六一考ノ父也年 留守タラシメ不破彦三村井長
ルカ 傳在上文後拜豐後 先驅トス 問答ニハ一ノ先驅ハ村井不破、二ノ先ハ
守賜一万四千石餘

岡島近藤、旗本ノ前備ハ 瑞龍公也旗本ニハ徳山五兵衛等召具スト
定メラレ 國祖同日申時出軍自カラ駿馬ヲ驅テ急カセラルト云 乃檄ヲ
飛シテ松任 瑞龍公 七尾 安勝君父 徳丸 長連龍ノ居城 へ急テ告ケ成
ノ下、刻ニ津幡城 景周按スルニ世ニ金澤ヨリ津幡マテ大概四里アリト云
然レトモ密ニ之ヲ論スレハ河北門ヨリ河北郡山上村ノ

一里埃マテ十七町五十間此一里埃ヨリ津幡マテ二里三十三町十二間也之ヲ
合セテ三里七町二間也然ルニ申時ヨリ發シ成ノ下刻到着ナレハ三時ノ間ナ
リサレハ一時ニ一里二町二十間四尺ノ積リニ當リ急接ニハ寛行 ニ到ラセ
ナレトモ是ハ此間ニ騎歩諸兵ノ追從ヲ待調へアル故ナルヘシ

ラル 城主前田秀繼君 号右近將監 街頭ニ出迎ス 此時追々金澤ヨリ
コノトキ先手ノ輕卒將ハ既 初更ニ及テ 世子介士ヲ從ヘテ 一本ニ
ニ指江狩鹿野ニ進ムト云

ニテ馳付玉 津幡 自松任 來リ玉ヘハ相與ニ軍議アリ 此時 公曰フ
フトアリ 七里 成政トハ弱冠

ヨリ戰場ニ同ク出テ弓矢ヲ比ラツルコト數々ナリ然レトモ彼ニ後ル、コト
一度モナシ况ヤ又夜中ノ後距ナレハ假令我ハ小兵敵ハ多兵タリトモ一戦セ
ハ利ヲ得ンコト反掌ニリモ易シ只我令ニ負クコト勿レ 時ニ秀繼君暨ヒ
ト大音ニ曰玉ヘハ諸兵百踊英氣揚揚トシテ勇ムト云

寺西宗與 号治兵衛後賜五千 以爲ク今末森ニ到ルハ肉ヲ抱テ饑虎

ノ谿ニ赴ムク也ト即チ私ニ謀テ曰ク末森ハ既ニ陷ルノミナ
ラス神保父子帶甲四千ニテ出張ノ外議アリ 公末森ニ向ハ

奇謀也二說
未識孰是也
若爲奇謀則
公軍應深遠
也然則安勝
君奇西宗與
之說 公者
卜者之言利
者先軍之歸
津掃者皆一
戰場中之能
優于也

美濃國明細記
二但馬兄吉左
衛門ハ土岐ノ
幕下也但馬ハ
美濃ノ若林ニ
住シテ信長ニ
屬ス氏家ト全
妹嫁也後 前
田利家ニ屬ス
トアリ

近き關原記大
全ニ山崎長門
ハ元ト山城國
山崎ノ油賣ニ
シテ家紋モ油
筒ノ形ヲ用ユ
ト云ヒ夫ニ種
々ノ評論ヲ載
ス東邊基業ニ
モ追テ之ヲ實
ニス其戰國ノ
野語亡論者也

澤ヨリ來ル軍兵ヲ待ツケラル是レ 公絶妙ノ奇計トアリ而シテ其夜亥ノ時ニ
至リ急ニ後援ノヲ命シ直チニ出馬シ玉フツ云云景周按スルニ此說鑿セル
ニ似タリ然レモ後註ノ反問ノ說ニ依ルトキハ妙計トモ言ヘシ又一書ニ秀繼
君末森ノ後拒メ止メ玉フヤウニ頻ニ諫メラルト衆兵傳ヘ聞皆心意タリ坊
店ニ入テ休息シケルカ俄ニ 公出馬ユヘ 瑞龍公ノ馬印ヲ津幡ノ街尾マテ
横山長知持シ出ツ大盤大海ト云者弓ヲ空張シテ從フトアリ空張ハ雲張ノ傳
ナルヘシ 國祖黑印ニテ天正十一年八月十五日與力分ト書ノ二十三人へ各
恩賜アル一紙寫ノ中ニ二百六十俵大盤大海介ト有テ隨一ノ大賜也然レモ末
森役ハ十二年九月ナレハ此恩賞ニハ非ス寛永二年大盤
傳左衛門罪アリテ公事場ニテ責殺サル若クハ此後カ 不破村井前田利
秀 号又次郎 前田利益 号慶次利久君ノ養子 原片山種村武部岡島青
山 号與三後賜一萬七千石今ノ將監ノ祖 近藤善右衛門長廣 後賜一萬千石号大
公ノ司兵ハ宮川但馬 按スルニ但馬ハ越前刀根山ノ役ニ氏家左京ノ臣
セラルトアリ然レハ朝倉氏亡國ノ後但馬 國祖ヘ仕フト見ユ長明筆記ニ宮
川與左衛門アリ是ハ伏見ニテ石川右馬助ト刃傷立退クト三壺記ニ見ユ又宮
川七兵衛元祿六年追放アリ是ハ 世子ノ司兵ハ山崎長鏡也 号庄兵
今ノ繁藏ノ族ニテ別苗字ナリ

開齊モト朝倉氏ノ臣也義景滅亡ノ後明智光秀ニ仕ヘ七百石ヲ領ス光秀 亡慮
亡後柳ヶ瀬陣ノ比我 公ニ仕ヘ後一萬七千石ヲ賜フ庄兵衛ノ祖ナリ
銳甲一千爭ヒ進ム 此時篠原勘六ハ 公ノ内臣クリシカ乃者横彦發シ起
ニ留守タラシノ目 公曰ク出戰ノ習ヒ寡人若シ尸ヲ中野ニ暴サハ此城ノ堪
ユハキ限ハ固守シ堪ヘカタクキニ至ラハ城ヲ自燒シ死スヘシトアレハ勘六反
命ニモ及ハス是非ニ扈從セント云シカ果シテ從騎二十許ト 公ヨリ殿シ置
キシ官健一火ヲ引率シ橋ニテ川尻近ク來リ此所ニテ甲冑ヲ蒙リ勘六辛年
是マテ來レト名 是ヨリ先キ神保ハ川尻ヘ出張シ探士ヲ出シ加
賀ノ援軍ヲ量リ見セシム探士歸ヘリテ援兵津幡マテハ發旌
ノ由ナレトモ急ニ此地ヘ來ラサル形勢ナリト告ク神保佐々
此言ヲ聞テ心惰タリケリ 公鴨毛河ヲ 狩鹿野ト外高松ノ 涉ル時
高松村民一人來リ成政カ軍狀ヲ具サニ報進ス 公聞玉ヒ先
此者ヲ縛メテ鴨毛河濱ニ人ヲ副ヘテ置キ 但シ此時ハ此者ヲ疑ヒ
縛シテ置クトイヘトモ

戰後其食言ナラサルヲ以テ七窪ヨリ今濱マテ續キタル松林悉ク伐シメラル、トキ是木ヲ此者ニ賜ハルト也其民ノ名シレス

公ヨリ

塘二塘ヲ出シテ敵軍ヲ見量セシムルニ各歸リ告テ曰ク敵既

ニ陣ヲ張り堂々トシテ 公ノ來ルヲ蹙ツト 公又富田六左

衛門後拜越後守賜一万ヲ斥候將トシテ踏勘セシムルニ富田歸リ

張陣ニ非ス水柵也ト告ス 公問ワ爾々何ヲ以テカ之ヲ知ル

富田對テ曰ク兵陣タラハ左右前後ノ法アルヘキニ長短モナ

ク一齊ニ羅列セリ由リテ臣深ク進ミテ之ヲ觀シニ水柵也ト

公曰ク善シ敵既ニ我術中ニ在リトテ高松ニテ

狩鹿野マテ十町四十八間狩鹿野ヨリ外高松マテ一津幡ヨリ指江マ環甲アリ

本年譜ニ見ユ按スルニ夜中トイヒ急行ノコトナレハ津幡城ニテ被甲アルヘ

キコト也又按ルニ中古誤リテ甲ヲカブト、訓スレハ津幡ニテ鎧ヲ着シ此所

ニテ兜ヲ着セルナラン然レトモ年 馬舌ヲ卷シメテ竊ニ海濱ヲ單騎

ニテ馳セ一本ニ七窪ノ沙山ヲ土子越河尻川ヲ坪井山本陣ヨ

涉リ今濱羽昨ニ到ラセ玉ヘハ從軍モ續キテ河尻川ヲ涉リ五

更ニ今濱ニ抵ル圖ヲ按スルニ此間ニ河尻川米出川寶達川今濱川ト四川

川ノ彼方ノ沙山也蓋外高松ヨリ大海川尻マテ一里 氏春等之ヲ知ラス

公ノ後軍五六百騎ハ猶一里所後レテ河尻川ニ到ルニ及ヒテ

長明筆記ニ川尻ニテ 公顧ミ玉フニ兵子二千五百許從ヘリ然レトモ此兵皆

敢死ノヒナレハ敵兵ノ三萬ニハ當ルヘクサレハ早ク交从ノコトヲ思シメス

トア 氏春等始テ之ヲ知リ驚破加賀ノ援ヨト云マ、ニ諸卒噪

キ擾レ 佐々ノ臣北村平次郎後ニ 陽廣公ノ時召サレテ我臣トナルトキ

マテ兵ヲ出ストイヘトモ此夜大雨ナレハ後拒アルヘカラスト思ヒ其備ヘテ

設ケサルニ 公濱通ノ後拒アリケレハ氏春案ニ違ヒ破膽スト云ヒシコト景

今枝直方云今ノ高松驛ハ中古ト列所ナレ氏世人其トチ知ラス天正十二年ノ取合ノトニ不審ヲ起スユヘ之ヲ記ス依々成政末守政ノ本陣ヲ坪井山ニ居エテ神保安達父子ヲ金澤ヨリ後詰ノ兵ノ押ヘトシ河田川尻村ノ沙山ニ備ヘサセシム然ルニ夜中海濱ヲ追々金澤兵ノ過ルヲシラテ末守ヘ通シヤリケルヲ今不審スルハ今ノ高松邊カノ沙山ヨリ海ニ二三四町ノ内外ナルニアマリナル油斷ノヤリニ思フユヘナリ按スルニ今ノ高

松驛ハ三度目ノ轉地ナリ天正後海濱ツキヨセ末守攻ノ時ノ驛ニテ居住ナリ難ク山ノ手ヘ居所ヲ移シテ數十年ヲ經ルニ又海濱ツキヨセ其驛モ地ヘカタリ又山際ヘ數十間或又其後百餘間立退キタル也サレハ今ノ驛ハ末守攻ノ時ノ驛トハ轉地三度目北大正ノ高松驛ノ川水ノ井筒海濱ヨリ三四丁餘沖ニアリ海底ニ入り見レハ顯然タリト云然レハ此井筒ノ所ヨリ海濱ヘ又幾程アリシモシテス並ルニ海濱打際マテハ七

八町ニアルヘキヤ然ラハ濱打際ヲ夜中ニ忍ヒ過ルヲ聞ツケサルヲ其理リナキニアラス北海ハ近ヨリ南海ハ地廣クナルヲ人皆知ル所ナリ

周維錄中ニ於テ見タリキ景周又一書ヲ按スルニ氏春之ヲ知サルワケハ神保方ヘ公ヨリ姦細ヲ入レ中通道内高松通進シ玉ツト敵方ヘ聞ユルヤウニ上テ外議サセ又成政方ヨリ末森既ニ陷城ノヤウニ姦細ヲ以テ來リテ風聞サスルニ依リ其間ニ就テ津幡ヨリ金澤ヘ引返シ玉ツト反問ヲナサシムルユヘ神保ハ中道内高松通ト張軍シテ待ノミナラス其心モ惰クルナリ然ルニ公ノ後軍ノ過ルヲ聞キ公ノ旗本ト思ヒ急ニ之ヲ拒ヘ放銃スト也是說ノ所見甚委シ然レトモ餘リニ穿鑿ニ墮テ其實ヲ失スル也平次郎カ云處是の實ナルヘシ凡ソ軍事ハ勢ヒヲ得ル者ハ勝勢ヲ得サル者ハ謀ラルハ是レ定理ナリ

鳥銃ヲ累放シテ拒ム既ニシテ今濱ノ左ナル沙山ニ今濱ヨリ五六町北ト云

公ノ旌旗搖々トシテ喊聲ヲ發ス 此マテイカナル故アリシカ坪井山ニ篝火モ見エス金鼓

ノ音モセ 是十一日ノ曉天也 公ノ山緒ニ十一日黎明至末森城擊内藏介陣トアリ世本十二日トス非也此時末森城中

ノ上原勘兵衛一作藤五郎今濱ニ樹タル鐘馗ノ馬幟ヲ遠望シ之ヲ城兵ニ告レハ皆蘇生ノ思ヒヲナシ喜躍スト也年譜ニ此時我兵三千五百本陣ノ前後ニ備フトアリ

リ愚按スルニ金城ヨリ津幡ニ至リ并ニ津幡ヨリ外高松ニ至ル道算ハ既ニ上注ニ辨ス此ニ又自外高松至加能境松二十三町三十間或云八自境松至川尻二十

二町三十間自川尻至今濱二里一町三十間此分合テ六里八町四十二間ニシテ是三時ノ間也之ヲ割配セハ一時二里二町五十四間ニシテ自金城至津幡路程

トハ其步算倍數也蓋自金城至今濱總計ハ九里十有五町四十四間也七時ノ間也但シ此内一時ハ津幡城ニテノ軍議時間ナレハ行中ハ六時也如斯辨折スレハ此救援ノ道算急迫ナラサルヤウナレトモ夜軍潛行ト云ヒ神保モ川尻ヘ出張スルナレハ敵方ヘ援勢ノ密略ヲ洩サ、ル等彼是遲々モ有ヘキコト也必シモ方今昇平ノ机下ニシテ戰國ノコト一概ニ論定スヘカラス○此時氏春ハ由斷失策事ニナクシタルヲ恥チ且成政ノ憤リヲ憚ルトイヘトモ是非ナク坪井山ノ營ヘ兵ヲ引取ルトナリ 是ニ於テ佐々モ大兵ヲ進メテ喊聲ヲ合セ急ニ又城ヲ圍攻ス其勢強猛也 按ルニ此時城兵防クニ堪ヘス千秋範昌ノ臣粉堞ヲ焚キタルハ火勢敵ニ靡ク是ニテ攻衆暫ク進ミ得スト云 此時村井不破青山種村ハ今濱ヨリ直チニ坪井山ノ本陣ヲ進攻セントス 公之ヲ許シ玉ハス末森ノ正門ノ籠城戸ヘ 按スルニ惣テ取出附城ノ類篠虎落ヲ結タル城戸書ニツ、ラ城戸トアルハ非也是ハツ、ラ折ノ坂下ノ城戸ナレハ強テ名附ルナルヘシ 向進セシメ玉ヘハ村井ノ

臣間野新佑 佑一作丞末 孫今ナシ 小林彌六左衛門 己三木十内 即今ノ十屋後

太右衛門

問答ニハ之ニ吉川平太江見藤十郎大窪小五郎ヲ加フ屋後ハ村井家記屋後野ニ作ル由但シ今未孫ナシ又村井家傳ニ瀧波喜兵衛ト

云者末森後卷ノトキ首ニツ取ルトアリ按スルニ此時ノコトナルヘシ此末孫ハ清八トテ今猶アリ

等敵首十一級不破ノ

臣不破十右衛門

右一

同四郎右衛門

右一

平野齋宮

按スルニ十右衛門ハ今不破

彦三ノ與力不破十右衛門ノ祖カ四郎左衛門ハ今ノ御細工人不破四郎右衛門ノ祖カ齋宮ハ美濃ノ浪士平野甚右衛門ノ子也齋宮彦三直光ニ仕ヘテ後ニ不破齋宮ト號ス其子ハ不破大學トテ瑞龍公ニ仕ヘ二千俵ヲ賜ハル末孫權左衛門ニ至テ絶炊也其詳ハ天正八年及十八年ニ解ス

等敵首八

級各提挈シ沙山ノ本陣ニ來テ

公ノ効首ニ備フ

公之ヲ視

テ欣然タリ

此時公馬上ニテ此獻馘ヲ見玉ヒテ一番首ニハ見ヤウアリトノ曰フトナリ按スルニ見ヤウトハ右眼左眼天眼地眼中眼

トテ五眼ノ見ヤウ軍配ノ習ヒニアルコト也混目抄ニ末森ノ後結ニ一番首取り來ルハ種村ノ手兵杉立九郎兵衛トアリ可追考

又村井ハ鎗

ヲ交ヘ佐佐與左衛門

成政先鋒ノ將也混目抄ニ與左衛門宗能ハ本姓良峯氏也成政姉子ニテ甥也武功アル者ナルユヘ佐

々ヲ名ノラ

ヲ擲殺シ其部下ノ士三十人許之ニ死ス又我

二公

神兵ヲ驅テ城背ヘ

景周按ルニ是即チ長坂口也此坂本丸ノ脇曲輪ニ通スル道也本丸ヨリ坂下ノ池畔マテ坂ノ間四五町アリト

云路幅古ヘ二間許アリシト云道條ハ本宿ト云ヨリ通ス一説ニ公此トキ末森城東ノ山ノ平ニ陣スト地圖ニモアリ但シ此說非也東ハ幽谷ニシテ通路ノ

地ニアラス敵ハ專ラ南ヨリ來攻ス

蟻附シタル越將野々村主水佐々

新左衛門カ軍ヘ進攻シ玉フニ

公ノ由緒ニ利家易道率旗本之兵急馳トアリ

富田六左衛

門最先ニ鎗ヲ入レテ敵將小川總之助ヲ擲殺ス北村市右衛門

末森記ニハ北村作内ニ作ル或ハ三右衛門ニ作ル書モアリ然レトモ茲ニ市右衛門トナスハ公ノ褒書ニ從フ也今ノ北村三郎左衛門ノ祖ト見ユレトモ此

家ノ祖ニ此

篠原勘六彌助ノ子一孝是也後ニ一

半田半兵衛

後賜八千石此本家ハ天

明六年子孫半兵衛ニテ

山崎彦右衛門

後賜八千石

村井又六

長賴野村

傳兵衛

賜千石伊

井口茂兵衛

賜千石勇

小泉彌一郎

權之助祖

與野彌市郎

後賜五千五百

三十石左膳祖 阿波賀藤八郎江見藤十郎吉川平太岡本七助富田

政春古兵談ニ成政ノ旗本ハ坪井山ナリ種村其旗本ヘ先ツカ、ラント云ヒシニ公開入レ玉ハス右ノ方ヨリ不破村井也左ノ方ヨリ 公上リ玉フ路ニ堀切アリテ舉條戸ハ敵ニ取ラレ野々村以下愛ナ野ト防ク富田一先ニ進ミ太刀ナカザシ堀切ヲ踏ス時ニ野々木鎗ガチ程後ヨリ進ム又山崎其後ヨリ進ミヒクナ續ケト呼ハレハ各陸續ト進ミ野々村

討死ス夫ヨリ
敵敗北ストア

源七木村久三郎等五十騎續テ進ム

此數人ノ内此時無比類働トテ明
年乙酉九月二十七日奥野へ八百

俵山崎へ千五百俵北村へ百六十

俵ヲ賜ハル感書ノ文年譜ニ載ス 特ニ半田鎗ヲ捫テ先進シ櫻勘介カ

放テタル銃子ニ左肩ヲ破ラレテ倒ル因テ 二公衆ヲ勵マシ

銃道ニ脚躓セハ銃瘡ノ者多カラント認旗ヲ採テ指揮シ進メ

ト曰へハ富田篠原野村山崎北村等競ヒテ進撃シ烟塵ヲ起シ

テ酣戦ス 北國大平記ニ城ノ搦手野々村等ノ隊へ擊テカ、ルニ富田一番鎗

タルヲ遺憾ニ思ヒ各激シテ進メハ越將佐々新左衛門本庄清七野々村主水小

川鯨之助本庄市兵衛野入半右衛門立田菊丸齋藤半右衛門堀田次郎右衛門矢

田五郎右衛門防戦勇ヲ振フ此時城兵モ城門ヲ開キ出夾撃スレハ鯨之助ハ富

田ニ討レ越軍崩レタツヲ篠原等進テ戰フトアリ又一書ニハ半田一先ニ進ミ

山崎野村一番鎗ヲ合セ篠原北村富田鎗下ノ高名トアリ然レトモ富田一番鎗

ノ高名ニヨリ加恩俸賜アルコト景周家譜ニ明了也又一書ニ後日山崎ト野村

ト合鎗ノ前後ヲ争フ 公穿鑿ノ上同ク合鎗トイヘトモ野村ハ諸人ノ眼前ニ

テ合セタル鎗ナレハ一番鎗トノ褒書ヲ賜リ二人共ニ加俸千石ヲ賜フ半田ハ

褒書ナケレハ心ニ服セストイヘトモ同加俸ニ母衣十五人アツケ玉フヲ以テ

服ストアリ又一書ニ我先鋒ノ一番鎗ハ野村傳兵衛城中ニテノ一番鎗ハ奥村

助十郎榮明トアリ此時合鎗ノ次第諸記 時ニ城將永福等城門ヲ開テ

一ニ歸セス然レトモ其爽ヒ僅々ノミ 出越軍ヲ挾撃ス越將野野村本庄齋藤堀田櫻等奮闘スレトモ

前後ノ敵ヲ禦キカ子之ニ死ス其它宗兵身腰處ヲ異ニスル者

七十餘騎我軍膽氣益ス豪壯ニシテ累進シ 北國大平記ニ此時前波

野崎孫介弟與左衛門三輪勘左衛門同助右衛門可兒才藏本多三彌左衛門勇擊

ノコト暨ヒ敵士立田菊丸林野源内加々田大八等奮勇ノコトヲ載ス按ルニ此

内可兒才藏ハ加州ノ士也末森役後諸國武者修行ヲナシ福島家ニ仕フ其後

神祖赤坂ヲ立玉ヒ野上關ヶ原ノ間ニテ首實檢シ玉フ時才藏九月朔日ヨリ十

四日マテニ首十七級ヲ得皆其鼻耳ノ中へ篠葉ヲ入置クリ 神祖之ヲ感シテ

是ヨリ篠ノ才藏ト呼セラルト云景周又西遊雜記ヲ見シニ安藝ノ海田市ト廣

御批判也サ
ラ城戸搦切ノ
所ニテノコナ
リトアリ
政春古兵談ニ
末森ニテ一番
槍ハ富田六左
衛門ニ番ハ野
村傳兵衛三番
ハ山崎彦右衛
門也此三人同
事ト 利家公

此役成政方戦
死ノ士ハ野々
村主水本庄清
七舍弟市兵衛
佐佐新右衛門
齋藤半右衛門
堀田次郎右衛門
野又平右衛門
矢部五郎右衛門
門澤勘助都合
九人ト云

ノ敗走スルヲ尾撃シテ首ヲ斬ルコト七百五十級 一作七
百三級 隊長ノ

首十二級ヲ獲 秀吉公ヨリ 國祖へ當月十九日ノ返書ニ佐々人數 公乃

シ此背門ヨリ入城ス 衛門野村傳兵衛半田半兵衛富田越後守北村三郎

左衛門爲先登或合總得首級凡取物頭首十二其餘猶多敵乃開扉解圍故利家利

長得入城トアリ又一説ニ末森城大手口ハ田子ト敷波トノ間ニアリ道スナハ

初度ノ合戦ニ先鋒此所へ攻メ入シカトモ敵軍ノ備へ厚ク敗リ難ケレハ敷波

ト子浦トノ間ニモ道アレハ國シ備へノヤウニシテ子浦ヲ越へ能登口ヘカ、

リ搦手ユリ城へ乗リヨミ玉ヲトアリ但シ是ハ臆説後詰ノ勢ヲ知ラスト云へ

シ先鋒ハ敵ヲ擊テ大手口へ至リ旗本ハ敵ヲ破テ搦手ユリ城へ乗リヨミ玉ヲナ

ルハ 城中雀躍拵舞シテ萬歳ヲ唱フ 此時 公永福へ此日用ヒ玉ヲ鐘

大小ノ寶刀三鞘黃金七兩米一千俵ニ感書ヲ副へテ但シ千俵ト云感狀ハ九賜ヒ梅輪

内ノ紋ヲモ賜ヒ後返上ストアリ 世子ヨリモ無比類ノ由ノ感書アリ又秀吉公

ヨリ 公へ當月十九日書ヲ以テ與村父子粉骨ヲ盡シタルヲ賞ス其文面皆舊

記ニ載テ詳也斯ヲ永福一時士林ノ面目ヲ開キ其馬幟腰章甲冑室刀ハ即チ永

福傳へテ家什トシテ珍襲ス永福晚年此甲冑ヲ以テ次子因幡易英ニ傳與シ易

英ヨリ壹岐庸禮之ヲ傳へ來レリ某年 微妙公へ之ヲ告ケ 相公閣下入封ノ

始メ周ノ嘉例ヲ以テ之ヲ獻スト云是ヨリ再ヒ官庫ニ藏ム鐘馗ノ馬幟以下ハ

嫡孫伊豫傳へ來ルト云○寛文辛丑閏八月今枝近義ニ命スル甲匣記併記ス

景周曰、聖
君賢臣、風雲
之會、踏我守
信而不相疑、
其間不容一
髮、殆比劉備
與諸葛亮、於
高水濱、
戲其節義、山

愚得醫平二大
間記ヲ引キ鐘
尼ヲ將基ニ作
ルハ大ナル誤
リナリ

亞和利家公天正十一年築堡於能州羽昨郡末森鄉令與村伊豫守永福爲留後翌
年秋九月佐々内藏助成正自越國率大軍圍末森城告急於加賀府 利家公及
利長公即日發駕挫成正之兵振武威於國 利家公褒賞永福守戰之忠功其日
所揚旗鐘馗馬幟金切裂腰指所着鎧兜鎗太刀童刀悉以賜永福永福退老之後以
鎧兜鑿讓與次男因幡守易英至曾孫因幡和豐傳來爲家藏和豐預經 黃門利常
公之高聽待 新君綱利公之入國初奉獻之收納 公庫代周之赤刀者也于時寛
文辛丑歲閏八月吉辰應 新君之鈞命今枝氏戶部近義謹記焉○景周按ルニ與
村河内家傳ニハ此外ニ與力士三十人ヲ屬ス且馬幟大刀腰刀ハ河内家ニ傳藏
シ來ルノ處右二刀ハ寛永八年金澤大災ニ燒失ス馬幟ハ今河内守爲質ノ家ニ
存ス馬幟乳ヲ除キ大サ堅一丈二尺許橫五尺三寸許鐘馗ハ古書筆カ甚勁逸但
畫者不知二刀ハ金裝也甲冑ハ即チ因幡家藏シ來ルノ處寛文元年進獻也感狀
腰指ハ與村主水隆振ノ代マテ傳來ノ處寶曆九年ノ災ニ罹リテ今ハナシ可惜
ヲ也前田創業記ニ此鐘馗ノ馬幟ハ本武田信玄ノ旗ナルヲ信玄之ヲ上原隨應
軒ニ附與ス而シテ上原藤五郎ニ至テ之ヲ 公ニ獻ストアリ接ルニ上原隨應
軒ノ時ハカンハヲト訓ス上原藤五郎ハ即チ清兵衛ニテ今ノ民五郎家也今ハ
ウエハヲト訓ス其訓ノ更ル子細シレヌ信玄ノ旗ノコト軍鑑ニアレトモ鐘馗
ノ馬幟ノコトハ見ヘス尤軍鑑ノミニモ非ス其外ニモミヘス可恠有澤貞幹モ
此ニ有疑ト云上原民五郎家譜ヲ見ルニ十一世ノ祖上原隨應軒武田信玄ニ仕
へ武者奉行ヲ勤メ信州ニテ軍功ノ感狀二通今猶家藏ス其子能登モ信州佐久
郡ニテ銚下ノ首取リ其時ノ感狀一通今猶家藏ス其子清兵衛武田勝頼滅亡後

加州へ來リ天正十二年七月 國祖ニ仕へ三十石ヲ賜ハリ小性アリ末森役永福ニ屬シ城ニ保ムトキ十二月未明濱手ヨリ 公ノ鐘馗ノ馬驗見ユルヲ清兵衛見覺アルユヘ 公ノ後卷ノ由永福ニ告ク因テ城兵鏡ヒ進ニ勝利トナル公歸陣ノ後六十石加俸アリ元和六年清兵衛及老年病死ト云云因ニ記ス

國祖着領ノ鐵甲高家衆織田主計頭信由家ニ傳來アルヲ以テ享和二年壬戌五月三日 當公へ指上ラル其作様前洞三枚後洞四枚堅作紙綴也前洞正中ニ天滿宮ノ三字左ニ松右ニ梅ノ圖右ノ下ニ前田又左衛門ノ六字アリ皆彫上ケ也前洞ノ左右ニ銃丸ヲ抱ヘタル痕アリト云此甲傳來ノ委曲ナシトイヘトモ尊名顯然クハ尤真正不可疑二百年ノ春秋ヲ歷テ再ヒ 公ノ武庫ニ收マルコト是徧ニ武德ノ盛ナルニユル者也○年譜ニ 公此時末森城水乏キコトヲカテテ推知シ玉ヒ出軍ノ節廣岡ノ水ヲ竹筒ニ入テ持セ永福等ニ與ヘ玉ヘハ城兵千万金ヲ賜シヨリ百倍ノ思ヒヲナセシトアリ按ルニ水ヲ持セラルコトハ有マシキコトモ非ス然レトモ廣岡ト云コト甚タ迂遠也但シ廣岡ハ源平盛衰記ニ所謂平岡野ニテ其比ハ小立野ニアリシヲ後ニ今ノ廣岡ノ地ヘ轉スト云好事家ノ説アリ此事既ニ壽永二年平岡野ノ注ニ記ス若此説是ナラハ只金城邊小立野ノ水ヲ汲セ持セラルト云コトカ然レトモ此説何レニモ駢拇蛇足不足信コトナリ○景周又一書記ヲ見ルニ此後我 公聚樂ノ邸ニテ諸族會盟ノトキ上杉景勝ニ謂テ曰ク君向ニ越中魚津城ノ後距トシテ險難ヲ歷テ天神山マテ出軍ノコト世以テ奇稱シ人口ニ膾炙スル所也然レトモ寡人能州末森ノ後距ニ佐々成政ノ巨軍敗績セシハ君カ後距ニ比スレハ十倍ノ顯功クル

ヘシト曰マハ景勝及ヒ滿座ノ諸族默然クリト云○小瀬浦菴道喜大開記ニ評シテ曰ク 前田公末森後攻敵一萬五千味方三四千ヲ以テ戰ヒ違本意事古今稀ナル後卷也長篠ノ後攻ハ武田勢三萬餘騎 成政大ニ驚キ佐々平左衛門ヲ先鋒ノ將トシテ騎歩八千ヲ 微妙公夜話録ニハ佐 進メテ來ル 此時神保河尻ニ在リ成政方ヨリノ急告ニ驚ロキ之ヲ援ハント馳來リヌレハ河尻ニテ神保ニ拒ヘラレシ 公ノ後軍ノ後ヲ尾メ末森へ來リ 公ノ入數既ニ八千ニ及フトナリ 公爲ニ軍ヲ五隊ニ作り 一番ハ村井二番ハ奥村種村 五番ハ 高 且先鋒隊中へ行テ村井ト俱ニ敵軍ヲ見量シ玉フニ 德公トアリ 佐々敢テ進撃スルコト能ハス亦來路へ退クコトヲ得ス加賀路へ沿テ緩ク 此ニ兩説アリ一説ハ佐々進ンテ益ナキヲ察シ加賀路へ沿路へ退クコト能ハス加賀路ヨリ退クトナリ後説 本多三彌正重 三彌此時是トスヘシ由緒ノ文ハ下注ニ載ス照見スヘシ 公 山緒ニアル如ク佐々敗軍シ來トシテ 公ノ隊中ニ在リト云藩翰譜ニ正重ハ佐渡守正信ノ弟也初メ三彌一號シ後ニ三彌左衛門ト號セシヲ言ヨキマ、ニ世人三彌トノミ云ト也天正十

二年九月三日加賀國前田筑前守利家カ足輕大將トシテ末森ノ後卷シ佐々内藏助成政ノ勢ト戦フトアリ今ノ駿州田中ノ翌後守正意ノ先祖也景周按スルニ此兄彌八郎正信ハ天正八年ヨリ十年マテ三ヶ年末森山中雨堡ニ在テ十年壬午 神君召ニヨリ加州ヲ去ル此三彌ハ天正八年ヨリ今年マテ五ヶ年加州ニアリ

公ヲ勸メテ之ヲ撃ツヘシト云 公越軍ノ列伍嚴重

ナルヲ以テ堅ク制シテ兵ヲ出サシメス

相傳フ此時成政ノ本陣ノ兵子皆金色ノ鬘斗ノ指物

成政ハ何事ニモ物數奇スクレタリ此指物ノミニ非スト云有澤武貞云御當家江戸往來長柄持ヘ御ソタシノ番刀多クアル内三分一許ハ鞘ノ探リノ所ニ大ナル三圍子チ青貝ニテ附ルアリ御細工所ニ於テ修撰ノ同ナリ是ハ富山城ニ在シ者ニテ利長公分捕ニトセラレトモノナリト云三圍子ノ附

也 公遙ニ望ミ其軍粧ノ富麗ナルヲ賞シ寡人成政ヲ伐亡セハ我本陣馬回ノ士ノ指物はヲ用ント曰フ果シテ後ニ用非サセラルト也又末森問答ニ成政黃羅紗ノ羽織ヲ着シ馬ヲ千鳥ニ馳ケ金ノ分銅ノ馬轅ヲ揚ケ引取ル際ニ成テ黒キ羽織ヲ着シ將卒ヲ指麾シケルニ兜ノ立物東西ニ閃メキ其莊麗我諸軍見テ賞ストナリ又混目錄ト云書ヲ見ルニ此戰後 國祖 世子ニ語ラセラルハハ三彌カ諫ヲ用ヒサリシハ思量ノ有リシコト也惣テ武者修行人ハ己カ功ヲ賣ルヲ主トシテ誠ナシ己カ一言ヲ以テ敵ヲ追ヒ大利ヲ得タリト他家ニ譽レテ舉ンタメ也若シ追テ不利ヲ取テモ三彌カ負ケニハナラス其上成政一昨日末森ノ城ヲ圍ミタルニ今曉後援ニ向ヒタレハ飛脚道ノ往來ニテ考ヘテモ我兵三四千ニ過キササルチハカラサルハ成政ノ未熟也若シ成政後援ノ人數ノ寡キヲ先知セハ我レ追ハストモ返スヘシ况ヤ之ヲ急撃セハ總返シニ返サレテ必定我兵ノ敗ヲ取ルヘシ是ヲ以テ部伍ヲ固メ追サルト曰フトナリ 是ヨ

ケヤウ中々物數奇ナルモノナリ

リ先キ十日ニ 公能州へ羽書ヲ飛シ各急ヤカニ末森へ發向アルヘシトイヒオクラセラル因テ安勝君諸將ヲ七尾城ニ聚メテ出軍ノ當否ヲ議ス高畠定吉等前ンテ曰ク越兵巨大ニシテ驍勇也 公之ヲ援クルモ利アルマシ今能登州中ノ兵ヲ擧テ向ハンモ僅ニ三千ニ過クヘカラス重テ羽檄ノ來ルヲ蹊テ可否ヲ決シ出軍センニ敢テ晚シト云可カラスト諸將此義ニ一定ス長連龍獨此議ニ從ハス直チニ手兵千許ヲ提テ行クニ

白子濱 羽昨 郡ニ到ル比ホセ既ニ 公大捷ヲ得テ入城スル所也

一書ニ連竜同日ノ曉七尾ヲ發シ己時ニ萩野屋ノ南ニ着陣スト云 公遙ニ一彪ノ軍馬其旗ヲ海風ニ

翻ヘシ來ルヲ望ミ脇田善左衛門 帶刀 弟 野村傳兵衛 世本之ヲ七兵衛ニ作ル即チ

七兵衛傳兵ヲシテ斥候タラシムルニ即連龍ナレハ 公其節ヲ

失セス速カニ來ルヲ勞ラヒ即々末森へ迎へ此時連龍七尾ノ疑議ニ依テ發行遲滯 公

ノ援軍ニ同セサルヲ悔ヒテ自警ヲ斷ツト云 姑ク談話アツテ連龍ヲ拔擢シテ七尾口へ

モ其備へ嚴重アルヘシト命シテ歸サセラル 公又以爲ク津

幡城守兵寡シ越兵恐クハ襲ハント乃シ奥村ヲ末森ニ置キ村

井不破ヲ先鋒トシ海濱ヨリ此時加州ノ兵退々ニ加ハリ一万人許ト云 十二日朝津幡

城ニ班軍ナリ 公ノ由緒ニ利家利長入末森城内藏介敗不能認來路自加

同十二日朝到津幡内藏介無所爲遂退越中トアリ○問答ニハ 公班軍ノ時成

政ノ引取ル殿軍ヨリ一里許後レテ津幡マテ附ケ歸リニシ玉ヲトアリ按スル

ニ敵我地近ク來ルニ擊サルハ無勇也シカシ其間ニ瀉ニテモアルヤ景周思フ

ニ是ハ附歸ニハアラサレトモ後ニ其休ヲ考レハ附飯ニテモアリシニヤトノ

察言ナルヘシ又一説ニ此時山陰ニ敵兵一陣見ヘクリ我旗本ノ壯士之ヲ擊ン

ト争フ 公之ヲ制シ是ハ齋藤甚介寺島牛介兄弟末森ノ敗レヨ憤リ死戰セシ

ト此ニ備ヘタル者也士力ヲ費サス只管引キ取レト濱通リヨリ粟ヶ崎へ押サ

シメ玉ヲニ二士之ヲ喰留ント追ヒ來ルヲ我後軍ノ徳山源七郎堀喜市郎今宿

印齋等はヲ斬拂ヒ敵首十餘級ヲ得テ綏ヲ収ムト云然レトモ問答ニ末森大手

ノ戰ニ徳山源七郎堀喜市郎今宿印齋討死トアリ参考スヘシ又一書ニ而田諫

訪ノ森ニ小島寺島弓銃ヲ設ケ埋伏ス然レトモ 公之ヲ不擊シテ過キ玉ヘハ

兩士靜ニ引取ルトアリ又北國大平記ヲ按スルニ此戰中ニテ今宿徳山我兵ヲ

激マスニヨリ越軍ノ諸隊崩レ走ル由リテ急ニ之ヲ追テ多ク討取ル然ルニ越

將齋藤甚介寺島牛介ノニ圓陣ヲ作シテ動カス我衆此鼓爾タル圓陣一跳シテ

盛サント旗ヲ進ムルヲ 公之ヲ制シ此一軍ヲ擊テ我兵ヲ苦シマシムルコト

勿レ此死地ニ備フルハ其故アルヘシトテ軍ヲ進メサセ玉ハサルニ成敗果シ

テ七千餘騎ニテ進來ル因テ今宿徳山堀兄弟秋山矢之次郎等十騎許 公ノ下

知ヲモ用ヒス進ンテ是ニ當リ却テ皆之カ爲ニ死ス越兵之ニ氣ヲ得テ來ル

公之ヲ切所ニ引キ悉ク擊ント士卒ヲマトメテ引取リ玉ヲ成政モ其機ヲ察シ

此ニ堀兄弟ト云ハ實市郎左太郎北喜市郎ハ均チ上江末末森戰ニ際テ死ト云ヘル事右衛門下向人ニテ今ノ平島ノ親也然レハ今澤死ノ説ニ從ヘル末々孰カ是ナルヲ致ハス

○成政取鳥越

成政果シテ津幡城ヲ襲ハント内高松ノ池畔ヨリ横山ヘカ、
 リ來リシカ津幡ノ方ニ旌旗多ク繼ヘリ巨兵群備ノ形勢ナレ
 ハ乃津幡ヘ向ハス 大間記ニ此時成政負腹ヲ立テ此上ハ加州ヘ亂入シ在
 々所々ニ放火セント發向シ津幡町ヲ押破ルヘキ旨先
 備ノ人々ヘ令スル處ニ津幡町ヲ抱エントセル加賀勢在所ノ茂リヲ便リトシ
 備ヘシカハ越中勢イカ、思ヒケン引返シ吉倉山ヘ兵ヲ引上ケテ陣ストアリ
 又津幡邑老甚丞傳記ヲ見ルニ此時甚丞末森陷城ノ風聞ヲキ、以爲ラシ成政
 此勢ニ乘シ必金澤ヘ横カ、リコ打チ入ルヘシト察シ實家ノ中條村半右衛門
 ト談シ土民四百ヲ聚メ木ヲ伐テ竿トシ紙ヲ接シテ旌トシ多ク山王山ノ松
 ニ結付ケ金鼓ヲ鳴シ多兵ノ形勢ヲ見ス成政此疑旌ヲ恠シメルニヤ津幡ヘハ
 向ハスシテ去ルトアリ舊記ヲ按ルニ天正十二年澤河村田畑兵衛ヘ是マテ持
 傳ヘル山々ヲ永代恩賞アルトキ加賀郡津幡村庄右衛門ヘモ三反六町ヲ永代
 賜ハルトアリ是即此恩賞ナラン 但シ元祖甚丞傳記ニハ此地三反賜
 傳記ニハ 公末森後卷トシテ出軍シ中條ニ至リ玉フ時半右衛門ニ命シ明曉
 此邊ノ峯々ヘ疑旌ヲ立テ多兵ノ形勢ヲ見スヘシトノ曰ヒ津幡ヘ急カセラル
 依テ形ノ如クナスヲヨリテ成政津幡ヲ避ケ去ル 公金澤凱旋ノ後半右衛門

此社ハ即チ延喜式ノ加賀郡加茂神社ニシテ縁起ニ延喜帝ヨリ三百六十町ノ神田ヲ寄附シ玉ヒ其比十三坊アリ社人モ多ク神事不擱ト云然ルニ今成政社林ヲ尽ク燒拂ヒシヨリ今ハ小社トナリテ名ノミ殘レリ

政春古兵談ニ日賀田丹羽古澤三人ノ内日賀田丹羽二人實田丹羽二人城ヲ明ケ退ク古澤ハ其頃創ヲ被ルテ有テ能ハシテ湯治シテ留守也古澤家ノ留

へ中條村ヨリ見ヘワクル山々ノ分チ賜ハルトアリ當時ノ半左衛門ハ此半右衛門ヨリ七代目也當時ノ甚丞半左衛門俱ニ 瑞龍 微妙二公ノ御書ヲ傳藏シテ榮 加茂社ヲ燒拂ハセ 相傳古ヘハ大社ナリシカ此時社林等悉ク燒失スト云且成政之ヲ焚クワケハ此社林大ナレハ伏兵ヲ置キテ前後挾撃センカト疑ヒ 四五騎ヲ先ヘ遣ハシテ放火セシムトナリ 山間ノ路ヲ押テ吉倉山 此山城ノ南西ノニ至リ陣ヲスエ 景周此道條ヲ按スルニ今横山邊ヨリ吉倉山交ニアリ 二至リ陣ヲスエ 景周此道條ヲ按スルニ今横山邊ヨリ吉倉山アルヲ求メテ至ルナラン末森古圖ヲ按スルニ此戰後木津高松川尻今濱マテ沙山ノ上ナル松林ヲ殘ラス伐捨サセラル高松今濱ナトノ村屋轉地アツテ道條ヲモ替サセラトルノハ強テ今ノ見ヲ以テ論スヘカシス 猶下文ニ 公ノ津幡ニ飯ヘリ玉フ處ノ注文ト照シ見ルヘシ 鳥越城 河北郡領ノ山峯ニ今三百歩許ノ平地アリ土人ノ鳥越城ノ遺跡ト 云津幡城跡ヨリ三十三町アリ城山ノ高サ坂ノ間三町ト云 へ使ヲ立ルニ 寥然トシテ空城也 鳥越堡守目賀田又右衛門丹羽源十郎末森城陷チ 公退クトアリ大間記ニハ日賀田丹羽及ヒ古澤又右衛門トアリ然レトモ古澤家譜ニ尾州ニテ仕ヘ稻生合戰ヲ初メ從軍ニ不洩トマテ有テ鳥越ノコトナシ有澤武貞筆記ニ成政退クトキ津幡山入ノ道ヲ通り偽ツテ末森一戰勝利ヲ得ルノ間鳥越城ヲアケ渡スヘキ旨使ヲ越セシユヘ丹羽等恐レテ城ヲアケ渡スト

守居ノ者目賀
四丹羽ノ城ヲ
明ケ退クテ口
滑ク思フテ跡
ニ殘リ討死テ
ナス因テ兩人
ハ追放セラレ
古澤ハ今以テ
勤仕スト古澤
勤六詰ルトア
政春古兵談ニ
ハ成政ヨリ小
島甚介寺島牛
介久世又兵衛
ヲ置トアリ

ア 成政亡矢遺鏃ノ費ナクシテ城ヲ得是ヲ天ノ賜モノト喜ヒ
其將久世但馬ヲ置テ之ヲ守ラシメ俱利伽羅ノ壘俱利伽羅古隸
礪波郡今隸河
北郡此堡迹ハ今ノ長樂寺ニハ佐々平左衛門ヲ置キ是ヲ勝利トシ
境內甲申堂ノアル地ト云
テ越中へ引キ歸ヘル按スルニ當月十六日秀吉公ヨリ 國祖へノ書文ニ
モ内藏助栗柄山ヨリ北ケ候由承ハルトアルナリ
時ニ 二公末森ニ在テ以爲ク成政今日敗ヲ取り一旦退クト
イヘトモ必之ヲ憤リテ津幡城ヲ攻ンコト案ノ内也然レハ津
幡ノ寡兵ニテ之ヲ防ンコト難カルヘシト即チ末森ヲ發旗シ
西濱通りヨリ津幡へ着陣アリ此ニ 公ノ津幡へ着陣ト云者上文ノ
末森ヨリ津幡へ飯ルト云ト別事ニ非
ス一書ニ末森ヨリ加州へ來ルニ大湖アリテ其東西ニ道二條アリ 公ハ西ノ
濱ナル道ヨリ飯リ成政ハ東ノ山ナル道ヨリ過ル也トアリ又一書ニ寺島兄弟
及ヒ久世又兵衛兵千五百ヲ鳥越ニ置テ成政ハ夜中ニ木舟マテ引キ取ルトア
リ景周此註文ヲ考ルニ 公ハ西ノ濱道ヨリ飯ヘルトハ外高松宇野毛狩鹿野

指江津幡ト飯ヘリ玉ヒ成政ハ東ノ山道トアルハ末森城ノ堅守侵スヘガテサ
ルヲ以テ却テ津幡ヲ攻ント内高松横山ト來ルトイヘトモ疑旌ノアルヲ以テ
取カ、ラス問道ヲ求メテ吉倉山ニ至リ鳥越ヲ攻ントシタルニ鳥越幸空城ナ
レハ之ヲ取り夫ヨリ竹橋森俱利伽羅ト夜中ニ木舟マテ引取タルナルヘシ景
周又按スルニ成政才將ナレハ末森ノ戰ニ後レヲトリ其儘越中ニ歸ヘルトキ
ハ兵ヲ費シテ益ナク外ニハ耻辱ヲトリ内ニハ諸士ニ侮トラル因テ鳥越七窪
へ細姦ヲ遣シ末森陷城大將不殘討ル、由言フラシ且西北ノ山々ニ敵ノ旗先
見ユルニヨリ目賀田丹羽大ニ恐レ城ヲアケ退ソクナリ蓋末森ニ不利ヲ取ト
イヘトモ勇氣屈セス却テ敵地へ踏ミ入り一城ヲ取テ飯ルヲ内外諸士
へノ解言トシテ後日世人ニ見ヲトサレサルヲ專トシタルナルヘシ 而シ
テ鳥越陷城ノコト知り玉ハス末森ノ捷ヲ諸堡ノ守將へ告ン
ト使者ヲ馳ヲルノ處小林喜左衛門鳥越へノ使者也今ノ藩臣
小林ノ祖ニ此名見ヘス 馳歸
ヘリ鳥越ハ陷城シタルト見へ越旗旣ニ城上ニ懸ヘリテアリ
キト告シケレハ 公目賀田又右衛門等ノ節義ヲ守ラサルヲ
怒ラセ此後數年目賀田流浪セシヲ天正十六年我 公邸へ同盟ノ諸侯饗會
ノ時蒲生氏郷淺野長政等徳山五兵衛齋藤刑部ヲ以テ目賀田免許シ

茶岡口如目
賀田等千古
武門之大罪

臣也、然蒲生氏等再薦之、何哉、公對之、言不帝、宛仁、亦是士病之、誠疑、

本國へ召返シ玉ハルへキ由ヲ 公ニ乞ハル、ニ 公對へテ曰ク彼ハ源氏ノ裔ユへ姓名ヲ耻テモ城ヲ固守スへキ者ト守城セサスル處武道ニ闕タル大膽病ノ士也然レトモ彼カ命ハ各へ進スルトテ事スムト也按ルニ目賀田先祖彈正忠信良ハ佐々木六角判官氏頼ノ家人ニテ藤井寺合戦ニ安保肥前守忠實ヲ進撃シテ和田柿ノ陣ヲ破リ

シ無雙ノ剛ノ者ナリト云 是ヨリ速ヤカニ鳥越ヲ一舉ニ攻メ屠ルヘシトアルヲ村井不破徳山片山言チ一ニシテ諫テ曰ク

公ノ神武英威既ニ今朝ノ大捷ニテ諸人目ヲ驚カセリ今此最

爾タル一堡ニ兵力ヲ費シ玉ハンユト益ナシ他日生兵發旗シ

テ陵城アラシニ何ノ晚キユトノアラシヤト 公之ニ從ヒ

公一先金城ニ飯ラセラレ十三日 公金城ヲ出軍森下栗崎ニ備チ立サセラレ

鳥越ヲ一時ニ攻取レトノ玉ヲ其時村井不破是ヲ強テ諫止シ奉ルニヨリ又歸

城アルト云ヒテ又同書同月十四日 公鳥越ヲ攻ント出馬シ玉フトアリ此コト重複ニテ誤レリ按スルニ十二日ニハ直ニ金澤へ還城アツテ十月十四日再

ヒ 公發旌アルヲ疑ナシ大岡記ニモ 公末森城ニ在シカ佐々加州へ亂入スト聞ト等シシ濱邊ヨリ金城へ丑刻ニ歸リ寅刻又打出森下栗崎へ至ル佐々ノ

物見ノ騎兵五六人馳來ルカ是ヲ見歸リテ斯ト佐々ニ告レハ上方勢着タルニヤトテ木舟へ引入トアリ此說尤非ナリ 十二日ノ始夕

見聞集ニハ 尾山城ニ凱旋シ玉へハ士農商賈盡トク街尾ニ出簞

食壺漿喜躍シテ迎へ奉ル 公即チ秀吉公へ聘使ヲ以テ末森

ノ捷ヲ告ケ玉フ 秀吉公聘使ニ見へ 公ノ忠戰ヲ嘆賞アリ且秀吉公明年

へテ使者ヲ飯へシ玉フト也是ヨリ秀吉公成政ノ不義薄行ノ狀ヲ憎ミ向ニ成政カ質トシ出シ置ク處ノ女並ニ乳母ヲ粟田口ニ於テ磔ニスト云

○七尾諸將再圍勝山

同月 諸書日ヲ記サス景周按スルニ末森ノ役ノ後トアレハ十三日カ秀吉公

取ルトアレハ十三日ニ非レハ合ハス但シ首數多ク討取ルトアル書文ハ 嚮ニ

當月上旬安勝君等コノ堡ヲ攻メシ時ノコトヲ結ヒ書シ玉フナルヘシ 嚮ニ

七尾ノ諸將勝山堡ヲ攻ルニ袋井隼人等固守シテ陷チズ此度

七尾ノ良繼君等末森ノ役ニ怠リシ恥辱ヲ雪カント議スル所

へ内應セシ石動山ノ僧ヨリ勝山ノ守兵守山へ強半歸へり堡
 中兵寡ナキ旨七尾へ來リテ告ク是ニ於テ安勝君及ヒ中川光
 重高畠定吉等兵子ヲ率テ再ヒ勝山ヲ攻ム果シテ堡守袋井以
 下已ニ引取リテ殘卒僅カニ留リテ之ヲ守ル乃一舉シテ之ヲ
 取ル 景周按スルニ是ヨリ勝山ハ七尾ヨリ兼守スルカ古傳ニ堡守ノコト見
 へズ又前田創業記等ニ秀吉公ヨリ我公へノ書文ヲ載ス其文ニ溝口
 金右衛門村上次郎右衛門ヨリノ書牒十六日到リ末森ノ捷及ヒ荒山勝山ヲ攻
 破等ノ戰功ヲ賞ス然レハ上文註言ニ載スル公ヨリノ聘使未到ノ前ニ溝口
 等ヨリ秀吉公へ此ヲ
 告ルト見ヘタリ

○土肥政繁攻境城

冬十月中旬 日不詳若クハ二十三日カ 上杉景勝 此時屬秀吉公 成政ヲ討ント越中ニ出

張シ 是今年九月成政秀吉公ニ反スルユヘナリ 土肥美作守政繁ヲ先鋒ノ將トシテ 政繁此時

屬景勝 境城 在新川郡佐々ノ將丹羽權平守之 攻ム此時土肥ノ手將有澤采女 今我藩臣ノ有

澤數馬 枋屋半右衛門 子孫在越前福井號五太夫ト云 各敵首ヲ取ル此時成政ノ將

眞杉中務 眞杉或作益木藩臣增木仲平ノ系譜ニ不見 堀與八郎援ヒ來リ一方ノ攻衆ヲ破

リ辛フメ城ニ入り 藩臣與八郎系譜ヲ按ルニ父ハ堀江源左衛門勝定ト云與八郎ニ至テ越中ニ行テ成政ニ仕テ成政景勝ト追合

ノ時境ノ城ノ加勢トシテ増木中務及ヒ堀與八郎ソノ弟三郎兵衛同覺左衛門ト馳迎ヒ境ノ城ヲ固守シ主從二十八騎ニ至ルマテ四五日防戰ストイヘトモ後援ナキユヘ外郭ヲアケ退クトアリ但シ此本文ニ所謂ル戰ノ時ナルヘシ其後國祖へ仕へ五百石ヲ賜リ八王寺城ニテ戰死ト云 力ヲ盡シ

テ防禦スレトモ政繁矢石ヲ避ケズ猛攻シテ止マス遂ニ外城

ヲ破リ牙城僅ニ存ス是ニ於テ守兵三百一夜ニ散シ義兵二十

七人ノミ殘テ守防スルコト五日而シテ成政ノ援兵踵テ到ラ

ス支持叶ハス竟ニ城中ヨリ人質ヲ出シテ和ヲ乞ヒ城ヲ去リ

テ黒部川ノ中島マテ退ソクト也

此事見土肥家記景周藩翰譜ヲ讀ニ
天正十二年景勝八千人ニテ十月二

十三日越後ヲ出軍シ越中宮崎城ヲ攻トリ滑川邊ニ放火シテ飯國ストアリ又
北國大平記ニ今年九月二十六日景勝越中へ發旌シ佐々ノ幕下益木中務丞ノ
宮崎城ヲ攻ム時ニ益木ハ城ヲ守リ三輪權平出門奮擊シ河田攝津ニ討タル然
レトモ固守シテ城陷ナズ藤田能登守ノ上杉將益木ノ女婿タルヲ以テ景勝即チ藤
田ヲシテ益木ヲ諭シ城ヲ退去セシメ景勝近郷ニ放火シ越後へ歸旗ストアリ
今之ヲ併考スルニ土肥家記藩翰譜北國大平記三書ノ載スル者月日及ヒ其它
小異アリトイヘトモ三事皆一事ナラン宮崎城境城ハ景周曾テ其遺跡ヲ訪尋
スルニ一城ノ異名也泊城ト云モ亦同城也是ヲ以テ愈ヨ此事各條別段ニアラ
サルヲテ
シル也

○國祖燒鳥越城下

十四日 公尾山ヲ發旗シ鳥越城ヲ巡察シ玉ヒ城下ニ火ヲ放

タシムレトモ城守久世但馬等出戰ハス乃城下ノ人家ヲ盡ト

ク燔カシメテ班軍アリ 世本ニハ 公尾山ヲ出馬シ森下粟崎邊ニ陣シ
鳥越ヲ攻メトヲ議スルノ處村井不破 公ニ

謂テ成政トノ要戰未タ遂ケサルニ此小堡ニ兵力ヲ費シ玉ハンコト不可ナリ
ト諫ムルニ因テ 公鳥越城ヲ攻ルコトヲ止メ城下ノ人家ヲ焚テ尾山へ飯城
トアリ景周按ルニ此說前月十二日 公末森ヨリノ歸路ニテ日賀田等鳥越ヲ
亡ケ成政ニ此城ヲ取ラル、ヲ憤ラセ一舉ニ屠ラントアルヲ村井不破諫メテ
事止ム因テ此度發旗ノコト左モ有ヘシ然ルニ此度 公出陣ノ上ニテ村井不
破又前言ノ如ク諫メテ 公其言ニ從フコト不審也諫テ止ナラハ發旗セサル
前ニ在ルヘシ此所ヲ考ルニ此度村井不破諫メテ 公止ト云ハ前月十二日飯
路ノ節ノ言ト混雜シテ書誤リタル成ヘシ又鳥越ヲ攻ルニ森下粟崎ニ陣スル
コト程遠シ津幡城ト鳥越トハ其間三十三町アリテヨキ向城也然ルニ津幡ニ
至ラス森下粟崎ニ陣シテ議シ玉フト云ハ不審也其上森下ヨリ粟崎マテノ下
營モ其程遠シ且自國ニテ野陣スルモ不審也他日精選
ノ記ヲ得テ正スヘシ同志ノ者忽カセニスヘカラス

○秀繼君與佐々平左衛門會戰俱利迦羅籠峯

同月 諸記不記日一說爲十三年二月八 嚮ニ 在前月 成政鳥越城ヲ獲ルト
日非也創業記篠島譜等皆爲此年 十一日

キ俱利迦羅ノ壘ニ佐々平左衛門 平一作與非也與左衛門ハ末森ニテ
村井カ爲ニ討死ス平左衛門ハ成政

生害ノ後加藤清正肥後ヲ領スルトキ清正ニ仕ルト見ヘテ清正ノ大將中ニ其
名アリ即チ清正記ニ見ユ平左衛門越中ニテノ第跡ト云所新川郡今富山領ノ

太郎丸村邊ニアリト云ヲ置テ守ラセケルカ津幡城ノ秀繼君父子兵甲ヲ率

テ俱利迦羅へ出張シ龍ヶ峯河北郡上藤又村領ノ山峯ニ百步許ノ平地アリ土人此處ヲ龍峯ノ堡迹ト云但シ

此時ノ追合場所此小平ニテ平左衛門ト會撃數タヒ篠島織部今ノ典膳

祖此時ノコト詳家譜河内山半左衛門仲太夫祖家譜ニ秀繼君ニ仕ヘ二百

秀繼君父子ノ傳將加羅ニテ得首トアリ關東役ノトキモ篠島等ト進ミ松枝城ニ先登ス今馬回頭

ノ河内山久太夫祖モ半左衛門ト號スレ是ハ元祿以來ノ臣ニテ是ト別苗ナ

リ矢島兵左衛門今ノ直江及ヒ判左衛門祖ニ見ヘス奮撃シテ敵首ヲ獲

景周曰今茲九月以後ノ交撃諸記錯亂且臆度重複亦多クシ

テ歸宿スル所ナシ今諸記ヲ照揭シ本藩世臣ノ家譜ニ徴シ

段落ヲ分テ其實說ニ近キヲ取テ文義ヲ拆ツ讀者思ヲ留メ

テ覽ルヘシ近コロ聞ク東都ノ醫師塙保己一群書類從ヲ印

行スト云其書日中ヲ見ルニ富樫記小松記荒山記末森記ア

リ皆紕謬失証多シ憾ヲクハ改竄ヲ歴ズ刊行シテ紕謬ヲ海

内ニ布ク而已ナラス亦之ヲ來世千百歳ニ遺スコトヤ但末

森記ハ長見右衛門尉ヨリ屢使者ヲ以テ越前ノ岡本慶雲へ

需メタル所ノモノニテ即慶雲カ日記ナリ且慶雲ハ元成政

馬廻ノ士也末森役ヨリ少シ以前本藩ニ來リ仕ヘ馬回トナ

レリ厥後伏見ニ造館アリシ頃老病ヲ以テ骸ヲ乞ヒ越前ノ

織田邊ニ幽居ス其書慶雲戰擾中編集スル故ニヤ其過聽寡

ナカラス見者斟酌用舎ナクンハ有ヘカラス

三州志鞆藥餘考卷之十終

三州志鞆藥餘考卷之十一

加賀州 金澤 富田景周大資編輯

○國祖燬蓮沼城邊

天正十三年乙酉二月十八日越山ノ臘雪稍消エテ東風日々暖
 ナ扇ク是ニ於テ我 國祖村井長賴ニ曰フ客冬不虞ニ鳥越ヲ
 敵ニ奪ハル、フ遺憾萬萬我弓箭ノ辱門也此怨報ニ越中ヲ侵
 掠セハ如何ト命ヲ降メ村井ニ議セシム村井命ニ應シテ退出
 シ歷練ノ老兵ヲ聚メテ獻可ヲ論ス時ニ小林大膳 今村井ノ臣ニ
子孫ナシ一本
 作彌六 左衛門 屋後太右衛門ハ原越人ニテ其地勢ノ險夷可否ニ通ス
 レハ前ンテ曰ク蓮沼ハ 礪波郡蓮沼村領也一作蓮間黒坂荒町ノ東
今石動ヨリ三十町許アリ今猶壘跡存ス 安居

一作 安江 ト今石動トノ間ニ夾マリ老樹陰森トノ越中中ノ勝地也

此處ニ礪波郡暨ヒ中郡ノ人民五穀ヲ蓄フ先ツ是ヲ焚燬セハ

城中ノ守兵子ヲ易テ食ヒ骸ヲ折テ爨クヘシト村井是奇策也

必ス奇捷アルヘシトオモヒ即チ此策ヲ 公ニ獻シ臣ニ先驅

ヲ賜ルヘシト乞フ 公許諾シ即チ編伍方畧ヲ定メ五隊ヲ作

ル其一ハ村井將タリ其二ハ松任衆近藤長廣 善右衛門 山崎長鏡ヲ

將トシ甲兵八百及ヒ青山吉次手兵ヲ率テ從フ其三ハ岡島一

吉片山内膳種村三郎四郎甲兵八百ニ將タリ其四ハ不破直光

武藤助十郎及ヒ前田利秀將タリ其五ハ中堅也殿軍ハ 世子

之ヲ兼ヌ村井ハ手兵千許ニ四井主馬 探細ノ達者後ニ富山淡路君ノ從臣トナル ヲ從ヘ

武藤ハ武部ノ
誤ニ非サルカ
前年ノ役ニ武
部助十郎見ユ

小林屋後ヲ鄉導トシ二十四日發旌シ其夜ノ初更ニ四里許越

中へ踏入リ 此所ニテ四井曰ク暗夜後先ノ路ヲ失スレハ行軍シ難シ是ヨリ班軍シテ可ナルヘシト也村井怒テ曰ク我何ソ暗夜ニ泥マ

ン今若シ班軍セハ敗走ト何ソ異ナラン汝等暇心アラハ我ヲ舍テ去レ ト罵リケレハ四井其失言ヲ悔ニ其他ノ兵子モ是カ爲ニ激進スト云 味爽

ニ及フ頃蓮沼ニイタル明レハ二十五日蓮沼ノ岨屋並ニ鬱林

ヲ一炬ニ盡セハ鄉民落膽シ資財ヲ舍テ鼠竄ス 一説此時蓮沼ノ寺院ヲ燒キ僧俗

ヲ殺戮スル者 時ニ木舟 或作貴布禰礪波郡ニアル平城也此時佐佐平左 井

波 又作稻見古名礪波城即礪波郡也今猶松島村領有遺迹或云蓮沼在小矢部川西井波在川東南木舟在東此時前野小兵衛守之 城端 在礪波

河地才右衛門守之方今 松根 河北郡松根村領而城地在礪波山中遺迹今猶存此時杉山主計守之 等ノ城將出

旗シテ之ヲ禦ク因テ村井手自鎗ヲ合ス 此戰功ニ付 二公ヨリ村井へ賜ル書中ニモ其方自

身鎗ヲ突 越軍鼓譟シテ我宗士七八人ヲ斃ス 姓名ハ舊記 村井怒テ

トアリ 見ヘス

政春古兵談ニ
ハ蓮沼放火ノ
時佐々方禰岡
與四郎即收次
郎兵衛飯野權
兵衛栗田傳兵
衛老江左門八
田甚兵衛鈴木
孫左衛門相小
一郎ノ八人進
ミテ先登スト
アリ

吉川平太後ニ
福島正則ニ仕
ヘ武功ヲ以テ
家老ニ至リ福
島ノ姓ヲ賜ハ
リ福島丹波ト
改ム公藤臣ノ
福島數馬ノ元
祖ナリ慶長五
年正則安藝備
後ノ二國ヲ
神君ヨリ賜ル
丹波モ、神
君ヘ謁見ス丹
波ナハ恒ニ備
後ノ寒鍋ノ城
ニ置カル元和
五年六月正則
家没落ノ後其
子彌右衛門再
ヒ本藩ニ來ル
微妙公丹波ノ
子ナルヲ以テ
三千石ヲ賜ハ
リ人持組ニ列
ス即寛永十六
年ノ士籍ノ人
持分ニ彌右衛
門三千石ト見
ユ又彌右衛門

長明筆記ニ村井豐後ノ大將ニ
ナト先鋒ヲナシ高窪加州小原越道自金澤五里許
折シキ指麾スレハ崩兵守返シ河村平野鎗ヲ掩押返シ敵首ヲ取リシ勝利ノ
公後年ニモ度々尊話トアリ按ルニ平野河村長田皆今ノ藩臣ノ先祖ニ見ヘス
援ヒ來リ百銃ヲ浪放セシメ敵兵百餘人ヲ斃セハ越兵駭動ス
我兵之ニ氣ヲ吐テ健闘スレハ越軍崩潰シ走り各己レカ城ヘ
保ミ富山森山ヘ急援ヲ乞フ我軍森然トシ綏ソク 二公ハ先
隊ノ告ヲ疎玉フニ村井來テ斬馘八十七級ヲ獻シ其捷狀ヲ以
聞ス 二公懌然トシ今年ノ軍魁ヨシトノ玉ヒ 此時村井ノ軍甲
蓄ノ如ク銃丸刀室ヲ洞ス 世子 尾山城ヘ凱旋也 公還城二月廿八日村
之ヲ犒ラヒ置甲副刀ヲ賜フト云 井ヘ四千俵加俸且村井
ノ臣ノ成功ヲ賞シ吉川江見屋後小林ニ黃金二十兩絮袍一襲ヲ賜ヒ其外十二
人各不 各ヘ黃金十兩ヲ賜フ也平野河村長田ヘハ各百石ノ加秩ニ絮袍外袍ヲ
賜フト也又此運沼戰功ニ依テ村井ヘ感狀ノ書同廿八日 公ヨリ同月
廿九日 世子ヨリ同三月二日秀吉公ヨリ賜ハル其文即十年譜ニ載之

指揮スレハ村井カ從騎吉川平太江見藤十郎阿波賀藤八郎大
窪小五郎屋後小林其餘壯士二十人許進テ交鎗シ敵首ヲ斬ル
我諸兵膽氣ヲ得銳進シテ越將ノ首ヲ斬コト十三級大鬪ヲ發
シテ綏ケハ二隊ノ松任衆代テ敵ト對戰ス近藤山崎一先ニ前
ンテ衆鎗鑽刺シ驥駢搏擊ス越軍二隊ヲ合セテ一軍トシ其兵
三千圍陣ヲ作シテ拒扞ス其銳鋒凜然タリ山崎ノ先驅之カ爲
ニ折劒シ既ニ敗レントスルヲ青山之ヲ拯ヒ兵ヲ驅テ敵ヲ衝
擊ス 此時青山ノ臣諫テ曰ク山崎ハ常ニ武者如アル士也サレハ此時縱令君
急援シテ山崎ニ功ヲ取ラシムルトモ他日必ス自功トシテ君ノ急援ニ
因リシト唱フマシ今君山崎ノ敗レ衆目ニ出ルヲ待テ後之ヲ救ハ、君ノ救功
空シカルマシト青山其臣ヨ叱ク曰ク自功ヲ好ムハ私也我ハ 公ノ爲ニスト
言テ鎗ヲ取テ先登 又銃將平野五郎右衛門河村善五郎長田猪之助
シテ援助ストナリ

長明筆記ニ村井豐後ノ大將ニ
ナト先鋒ヲナシ高窪加州小原越道自金澤五里許
折シキ指麾スレハ崩兵守返シ河村平野鎗ヲ掩押返シ敵首ヲ取リシ勝利ノ
公後年ニモ度々尊話トアリ按ルニ平野河村長田皆今ノ藩臣ノ先祖ニ見ヘス
援ヒ來リ百銃ヲ浪放セシメ敵兵百餘人ヲ斃セハ越兵駭動ス
我兵之ニ氣ヲ吐テ健闘スレハ越軍崩潰シ走り各己レカ城ヘ
保ミ富山森山ヘ急援ヲ乞フ我軍森然トシ綏ソク 二公ハ先
隊ノ告ヲ疎玉フニ村井來テ斬馘八十七級ヲ獻シ其捷狀ヲ以
聞ス 二公懌然トシ今年ノ軍魁ヨシトノ玉ヒ 此時村井ノ軍甲
蓄ノ如ク銃丸刀室ヲ洞ス 世子 尾山城ヘ凱旋也 公還城二月廿八日村
之ヲ犒ラヒ置甲副刀ヲ賜フト云 井ヘ四千俵加俸且村井
ノ臣ノ成功ヲ賞シ吉川江見屋後小林ニ黃金二十兩絮袍一襲ヲ賜ヒ其外十二
人各不 各ヘ黃金十兩ヲ賜フ也平野河村長田ヘハ各百石ノ加秩ニ絮袍外袍ヲ
賜フト也又此運沼戰功ニ依テ村井ヘ感狀ノ書同廿八日 公ヨリ同月
廿九日 世子ヨリ同三月二日秀吉公ヨリ賜ハル其文即十年譜ニ載之

○成政燒鷹巢舊堡邊、報蓮沼之敗

三月廿一日夜成政銃甲ヲ率井テ加州鷹巢へ在石川郡西市瀬山上
自金城三里有奇、蓋是

天正八年、佐久間盛政修舊堡之地也、按今成政據其遺迹、放火近邑耶。出張シ村屋ニ放火セントス我觀人

之ヲ察シ來リテ告ク 公即テ尾山城ヲ發旗アリ事火急ナレ

ハ從騎五六十員ニ過ス前ンテ半里許ニシ味旦ニ及フ比ホヒ

前途十町許ニ一隊ノ行軍既ニ進ム是村井ガ行軍ニテ此時金ノ小槌
ニ赤キ鬚藤ノ附クル馬印ヲ先ニ

シテ押行 又一隊之ニ次ク是不破種村片山也蓋シ村井ハ其夜二九ニ在テ
觀人ノ注進ヲ聞クト其マ、手兵ヲ率テ馳セ進

ムト也不破等モ此夜ニ三ノ九ニ在シユヘ一番螺ヲ聞クト齊シク手兵ヲ從
へ馳出ト云但シ村井ノ軍ヨリハ七八町後ル、トナリ人數ハ三百許ト云

公望ンテ是レ村井不破等ナラント喜ヒ愈ヨ進マセラル成政

既ニ放火シ反旗セントスルニ村井不破等越軍ノ後ヲ撃テ首

於周口、凡我
許將出戰、輕
執自在者、是
類之公居恒
思義之所激
戰實誰所謂
戰後戰義、外
之何有

ヲ斬ルヲ三十有八級越兵狼狽スルヲ越將福岡與四郎佐佐平

左衛門之ヲ指麾シ兵ヲ護ン緩ヲ取ム我軍モ亦徐々トノ兵ヲ

斂メテ旋ヘル

○二公再攻鳥越城奮闘、并菊池父子降于我

夏四月八日 二公出師又鳥越城ヲ攻ント此時秀繼君不破與村片
山岡島村井富田武藤篠

原等從ト北國
太平記ニ見ユ城邊ノ峯頭ニ本陣ヲ布玉ヒ城中ヲ目下ニ瞰シ

銃手ヲ放丸セシム斯時城中ヨリ塘兵ヲ出ス一説ニハ一手
ヲ發ストアリ松

任衆ノ隊長小塚權太夫三千石淡路ノ弟也舊本此次へ原田又右衛門ヲ
加フルハ非也原田家譜ニ又右衛門前年病死ト

ア 上坂又兵衛七千石銃卒百員ニ將タリ即テ今ノ喜藤太ノ祖也但シ嫡子
因幡ノ家ハ慶長十九年絶祀也其詳傳ハ大坂役因幡傳中ニ

ス 記 銃卒ヲ馳リ之ヲ追テ城下ニ到ル因テ城守久世但馬精甲五

百ヲ發メ撃タシム其鋒猛烈ニシテ松任衆ノ先軍潰ユ此時世子ノ旗本近ク

崩レカ、乃中堅ノ壯士競進セントス 世子之ヲ制シ止メ少焉

アリテ發撃セシム其勢決河ノ如ク銳氣倍蕤ス時ニ山崎長鏡

此時雞卵ノ蓋ヲ被リ白紙子ノ罩甲ニ朱丸ヲツケ鳥毛ノ棒ノ指物ヲサシ金槌ノ馬印ヲ先ニ進マシムルト云 先驅シ生手ヲ以テ

還拒スルニヨリ 此時 世子見量シ玉ヒテ曰クアレハ山崎等ナリ今鎗ヲ

シ回望シテ曰ク只今交鎗ト見ヘ烟塵起レリト應フレハ 世子重テ見ヨ見ヨアノ際ヨリ衝崩スニテ有ルヘシトノ玉ヒシカ果ノ不違トナリ 世子ノ聖

鑿以テミ 越軍撓敗ス時ニ井波城端木舟松根ノ諸堡ヨリ聲援シ

來リ印牧次郎兵衛 寛永六年諸士ノ戰功ヲ尋テサセラル時横山長知九月

テ拙子槍ノ様子佐内藏助小性印牧次郎兵衛ト申者ニテ候彼者ノ槍ハ長柄我等ハ持槍ニテ候處ニ印牧鎗我等脇下ニ當リ創付候其迹今ニ有之候彼次郎

兵衛ハ越中ヲ 利長様御拜領被成候以後御家中へ被召出母衣ヲ被成御預御使番ニ被召仕候處其後相煩御國ニテ病死仕トアリ即チ今本番印牧彌門ノ祖

杉江彦四郎 一本作左門藩臣ノ杉江ト別苗 柵野小市栗田傳兵衛 藩臣織江

ノ祖也但織江譜ニ佐々ニ仕ヘルヲ載セス 鈴木孫左衛門飯野權兵衛福岡與四郎倉智

猪之助 智一 木村助作山田角彌等五十餘騎驀地ニ進ム我將橫

山長知 傳註在天 鷲津九藏 山崎長鏡譜ニ歴 九里少藏 小將頭タリ八王寺

役ニ見ユル九郎兵衛ノ兄也末胤今ナシ然ルニ 等之ト接撃ス敵兵強多

野尻次郎左衛門系圖ニ其先祖ト云ハ杜撰也 ニシテ防クニ堪ヘス鷲津越將八田甚右衛門ノタメニ討タル

山崎譜ニハ成政兵乘勝來歴我軍從山上至山下衆潰却走殆二百步山崎長鏡麾

下士鷲津九藏與成政士福岡與四郎戰死之云世間印行ノ書ニハ此時九藏ノ戰

死セントスルヲ見人々山崎ニ之ヲ救ヘト勸ムルニ山崎首ヲ掉テ曰ク九藏等

死力ヲ出シテ血戰シ敵兵ノ疲ル、期ヲ待テ銳撃シテコソ我奇功ハ有ルヘケ

レトテ兵ヲ収メテ進マスト云然レモ此說誤リナラン豈我麾下ノ士ノ死ヲ看

々ステ置ンヤ又富山ノ堀田平右衛門譜ニ先祖神尾治右衛門佐々成政ノ臣ニ

シテ末森ノ役ニ先鋒將タリ此時加州ノ士鷲津九藏カ爲ニ討死ス其子神尾圖

書後ニ 瑞龍公ニ仕フ然ルニ九藏ハ父ノ仇ナレハ加州布市村ニテ附規ヒ私

野尻ハモト宗
岡力家ノ與力
ナルカ寛保四
年始テ本組與
カトナルニハ
其元祖ヨリノ
系譜ヲカ家ニ
由サニアリ

ニ討取リシカハ 公憤ラセ玉ヒ勘氣ヲ蒙ル其年ノ小田原役ニ圖書笛吹峠へ
進ミ且安中城ニ先登シテ木戸ヲ破リ敵首ヲ取ルヨリテ勘氣ヲ免サセラルト
アリ此說本文ト不合但シ景周按スルニ九藏鳥越ニテ討死ハ明了也村井長明
筆記及ヒ有澤武貞ノ說ニモ詳也其上此役ニ圖書既ニ我從軍中ニ在テ得敵首
等ノヲ創業記等ニ載テ顯然 乃横山進テ八田ヲ殺ス山崎此期ヲ見
タレハ堀田譜誤ナルヲ必矣

量リ進鼓ヲ播テ福岡ト交鎗ス上阪九左衛門 今ノ喜藤太ノ譜
ニ此名見エス 及

山崎ノ騎吏味島六左衛門 後ニ開齋ノ臣ニ
賜ル末孫今ナシ 續ヒテ交鎗シケレハ

我兵氣大ニ振ヒ竟ニ越兵折ケ北ルヲ半田源太郎 今ノ半田譜
ニ此名不見 横

山長秀 半喜子長知兄也号因幡後賜
九千二百五十石又五郎ノ祖 神尾圖書 後賜九千石
孫九郎ノ祖 三輪主水 後号
志摩

賜七千二百六十 等餘勇ヲ賈ヒ各敵首ヲ獲尾撃シテ城際ニ逼ル九
十石采男ノ祖

里ハ杉江彦四郎ト支搏シ谷底へ轉墮シテ杉江ヲ殺ス 此時九
里杉江

ノ首ヲ持シ姑ク息フ所へ片山ノ家士伊藤十藏馳來リ九里ヲ押除ケ首ハ相討
也ト言ヒテ奪トリテ 公ニ獻ス然レトモ後日ニ穿鑿アリテ少藏ノ得シトニ

極ル 越將倉智ハ虎奮シ刀瘢若干ヲ被リシヲ我士細井彌左衛
門 百五十石辨 其首ヲ斬取ル因テ我兵膽氣愈ヨ壯ンニ連破累勝

シテ進ミ越軍ノ宗兵野間兵部等ノ首二十有七級ヲ獲テ剩卒
ヲ追撃シ各敵首ヲ提來リ 公ノ効首ニ備フ越兵遁脱辛フシ

テ城ニ引入リ固守スレハ 公モ旌旗ヲ戢ノ堂々トシテ其夜

振旋シ玉ヒ 景周按ルニ是ニテ 公鳥越城下へ至ル兩度ナリ然レモ城陷ズ

シ此城ノ落去ハ發輝トハ見ヘサレモ下文ノ五月ノ役ニ成政鳥越俱利加羅兩
堡ヨリ兵ヲ引トルトアレハ其時ヨリ自然ト我手ニ隸スルナルヘシ然レモ其

後鳥越守將ノ姓名見 諸士ノ功ヲ論シ各賞賜 山崎ニ黃金三十兩絮袍一
襲ト也一說ニ加祿七千石

へス城ヲ廢スレカ 厚カリケレハ皆驩然ト

黃金三十兩絮袍一襲ヲ賜ト云半田神尾三輪等

シテ雀躍ス 成政モ此クハ戰功ノ士ヲ賞シ黃金十兩二十兩絮袍外袍等ヲ與
ヘテ平左衛門小兵衛ハ各二千石ノ加俸アリ又福岡ノ今度鳥越

加那ニ倉智
ト上坂九左衛
門ト細路ニテ
接續シ互ニ智
ヲ留シテ槍
ノ柄弓ノ如ク
ナリシ處へ輕
卒ノ細井彌左
衛門引リテ倉
智ト手搏シ共
ニ隨谷シ細井
ハ倉智ノ首ヲ
取レリ此功ニ
ヨリテ細井ハ
小將ニ立身ス
トアリ追々ス
ヘシ又同書ニ
猪之助ハ横山
因幡ノ家臣倉
智惣左衛門ノ
兄ナリトアリ
サレモ今ノ倉
智惣右衛門ノ
首級ニハ此事
見ヘサルナリ

ノ退口ニ槍ヲ入諸軍難ナク殺テ收ムルノ功是ノ時ニ當リ我兵鋒精銳ヲ賞シ黄金三十兩ニ雙刀ヲ副ヘテ與フト也

ニシテ 公ノ名望日ノ中スル若クナレハ越中阿尾城 在射水郡解詳

子檜葉 越枝折 坊本ニ實名ヲ武勝ニ作レト大學家譜ニハ不知トアリ此外家譜ニモ不詳故ニ景

ノ主菊池右衛門入道 周之ヲ古記ニ考フ如左蓋中納言藤原隆家ノ子大夫將監則隆肥後ニ下向シ菊池郡ヲ玉ハルヨリ之ヲ菊池ノ始祖トス此子二代經隆三代經賴四代經宗五代

經直六代隆直七代隆定八代能隆九代隆泰十代武房 十一代時隆十二代武時 法名阿 十三代武重十四代武俊 或云武敏 十五代武光十六代武政十七代武朝十八代

兼朝十九代時朝二十代爲邦二十一代重朝二十二代武運 後改能運 永正元年能運卒シ爲邦ノ甥重安ノ子政隆ヲ以テ能運ノ後ヲ繼シメ之ヲ菊池二十三代ノ屋形

ト云是マテ代々皆肥後守ヲ通稱トス然レ國中ノ諸士政隆ニ不服同二年國士八十四員連判ノ誓書ヲ以テ阿蘇大宮司惟兼ノ長子惟長ヲ養君トシ名ヲ武經

ト改ム是ヨリ政隆武經不和ヲ生シ豐後ノ大友氏阿蘇家ノ武經ニ心ヲ通シ武經ヲ扶ク同六年政隆自殺ス是ヨリ國中皆武經ニ從フ然ルニ武經阿蘇大友ニ

與セス暴逆ニ依テ没落ス故ニ菊池武包ヲ以テ廿四代トス武包ハ菊池ノ庶流託摩武安ノ子也後ニ高麗ヘ行同十七年大友義長菊池家ノ重臣ト議シ其子重

治ヲ以テ菊池ノ家ヲ嗣シム之ヲ二十五代トス後ニ名ヲ義宗ト改メ其後又義政ト改メ右兵衛佐ト號ス從四位ニ叙ス義政大友家ニ反シ人望ヲ失ヒ流落シ

越中ニ來ル右衛門武勝ハ即義政ノ子ニ同國水見ニ城主タリ景周接スルニ右衛門入道武勝ヘ信長公ヨリ賜ハル天正八年朱印ノ物ニ越中水見郡内屋代一家分并二十ヶ年以來新知行不可有相違トアレハ右衛門ニ至リ永祿四年ノ比ヨリ阿尾城ニ據リ水見郡内一萬石分ヲ領セル成ルヘシ嫡子伊豆ハ慶長元年先父病死ス其家督ノ論有シヨリ右衛門入道ハ城州紫野ヘ退隱ス今ノ大學家ハ伊豆ヨリノ系ナリ 其男伊豆安信 譜ニ實名ヲカ

ヨリ富田治部左衛門景政 景周ノ祖越後守ノモトヘ密使ヲ以ノ父時賜四千石

テ 公ヘ降り奉仕センフヲ囑付ス景政即チ村井ト胥議シ

公ヘ獻狀ス 公之ヲ許諾ス 此一節ハ創業記七國志ヲ以テ書ス一説菊池父子成政ニ恨ミアル旨ヲ村井傳聞

シ家臣小林屋後ヲ以テ菊池ヲ引クニ菊池誓書ヲ獻シ降ルトアリ又一説成政櫻馬場ニテ遊宴ヲナシ諸士ノ戰勞ヲ謝ス酒闌ニシテ菊池曾テ上杉謙信ヨリ

賜ル所ノ短刀ヲ成政ニ獻シ頻ニ謙信ノ勇敢ヲ賞ス成政是ヲ怒ル因テ菊池成政ニ背キ 公ニ降ルト云今此書ノ本文ニ舉ル處菊池家傳ト景周家譜ト脗合

スルヲ以テ取之且今年七月四日 公ヨリ菊池右衛門入道ヘ賜ル書中ニモ委細ハ從富田可中トアリ其文年譜ニ詳ナリ

○國祖得阿尾城越軍怒而不及

十二日

景周按ルニ本藩略譜創業記昆目抄末森記等皆四月三日ニ作ル然レ

ト菊池ノ降ルハ鳥越役ノ前ニ在キハ文脈錯亂ス故ニ景周遍ク類書
ヲ集覽スルニ年譜長湫略譜並ニ四月十二日ト載ス頓ニ思フ此說其實ヲ得タ
ルヲ即チ此ニ取テ舉クルナリ又按スルニ譜記二日ト書スルハ十ノ字ヲ脫落
スルナ
公俱利加羅ヘノ軍令ヲ傳發アリテ軍ヲ津幡ニテ料ヘ

而シテ俱利加羅ヘ向ハス末森ト飯山羽昨トノ間ヨリ阿尾城

ヘ向フ 按スルニ此時未ク鳥越ニ久世但馬俱利加羅ニ佐々平左衛門松根ニ
杉山主計等相守テ皆敵地アレハ津幡ヨリ内高松夫ヨリ羽昨郡ヘカ

ハリ末森ト飯山トノ間ヨリ射水郡氷見 村井先鋒タリ原片山岡島種
ヘ出テ阿尾城ヲ受取タマフナルヘシ

村暨ヒ利益 此時在能 之ニ次ク此餘精兵通計六千阿尾城ニ到ル

菊池父子手士五十ヲ從ヘ城ヲ離ル、五六町 韃ヲ屬シテ

公ヲ郊迎シ蒲伏シテ前非ヲ謝シ而シテ城門ヲ開キ降服ノ禮

ヲ以テ城ヲ村井ニ授ク村井之ヲ受ケ其近邑ノ菊池ニ從ハサ

ル民舎ニ火ヲ放ツ 長湫略譜天正十三年四月十二日氷見庄ヘ加賀勢働阿
尾城主菊池入道兵千許ニテ籠リシカ成政ニ恨ミ有テ

加州勢ヲ手引シ加州勢ハ能州口ヨリ廻リテ 依テ神保氏春ヨリ急ニ此
氷見ヘ出テ阿尾城ヲ受ケ人數ヲ籠ルト云

旨ヲ富山ヘ告レハ成政憤リ汗馬ニ鞭ヲ加ヘ耳後風ヲ生シ兵

ヲ驅テ森山マテ到リ一戰ニ羸輪ヲ決セント健兒ヲ出ス而シ

テ我神兵既ニ阿尾城ニ入り代リ旗幟雲ニ映シ 公モ亦在ス

ト聞ユレハ成政一肚氣ヲ發スレモ奈何トモスヘカラス手ヲ

束子テ富山ヘ皈ル 公乃シ阿尾城ニ利益高畠九藏片山等甲

士千餘ヲ置テ 一說此トキ隊長ニハ小塚
權太夫長田權右衛門ト云 守ラシメ尾山ヘ旋城

○奥村千秋等殺伊香子某

十八日越士伊香子四郎兵衛 成政 等米市場上野村 此兩地ニ住シ
名未考

郷士ヲ聚メ近邑ヲ縱掠ス末森城守奥村千秋胥議シ中夜ニ其
不意ヲ擊テ北ルヲ驅テ之ヲ斬ル四月廿日 公二將ニ褒書ヲ
賜フ 此書文年譜見
開集等ニ載ス

○佐佐前野燹今石動近郷我軍擊而敗之

五月成政以爲ク加賀軍累勝ニ驕リ小矢部川 礪波 郡ヲ涉テ深ク

進マン我諸堡ト期ヲ約シテ號螺ヲ吹キ一舉ニ夾擊シテ之ヲ

殲サントテ鳥越俱利加羅兩堡ヨリ兵ヲ引取シノ 景周按スルニ
這兩堡是ヨリ

自然ト我手ニ屬スルカ別ニ 森山 氏春ヲ守將トシ
我兵ノ攻メ取リシヲ見ヘス 木舟 佐々平左衛門ヲ
守將トシテ其兵

二千 井波 前野ヲ守將トシ
五百 五テ其兵二千 増山 在礪波郡此時馬
廻番手ニテ守ル 等ノ諸堡ニ兵ヲ加ヘテ

守ラシメ成政ハ富山城ニ介士一萬ヲ貯ヘテ其期ヲ待ツ 或云
成政

兵士ヲ過多ニ畜ヘシハ畢竟北國第一ノ顯諸侯ト呼レノヲ計リ越中ノ山川
木竹土貢トモニ秩祿ノ數ニ結ヒ年貢一ツ五分二ツニ足ラヌ邑入ナレハ假給
事人等ハ祿高ノ唱ヘ多キヲ聞及テ上國ヨリ之ヲ望テ來リ輻湊シ而シテ其餼
稟ノ實ヲ知り乃歸國スル者多シト云然レハ加越ノ争ヒニ關リ是非ナク足テ
止ルモ多シト云 時ニ我 公鳥越等ノ堡我疆内ニ隸シケレハ俱利加羅

ニ近藤岡島平野ヲ置テ成政ノ機謀ヲ量察セシメ或ハ今石動

城ヲ 在礪波郡上野村櫻町村領在今石動町西
北城山是也本城羅城等ノ遺迹今存ス 新築シ秀繼君父子ヲシテ

之ヲ守ラシメ 四万石ヲ賜
ヒ此時入城 越中閩州ヲ眼下ニ瞰臨シ各堡ノ壁ヲ

固クセシメ玉ヘハ 景周按スルニ此時鳥越ノ守見ヘス是ヨリ廢城タルカ
一説ニ此時礪波郡ニ四堡ヲ築キ固守セシムルトアレ

トモ堡名ナシ他 日追敗スヘシ 成政失計シテ之ヲ憤リ因テ佐々平左衛門前野

小兵衛ト議シ俱ニ甲士五千ヲ率テ小矢部川ヲ涉リ今石動ノ

近郷ニ火ヲ縱ツ秀繼君父子利兵一千六百ヲ從ヘテ出城シ平

左衛門ノ軍ヲ浪撃ス 此時前田利秀享年十九 敵乃敗走ス我軍之ヲ

追テ首ヲ斬リ二十銳ニ乗シテ鬨ヲ發ス此時前野精甲ヲ盡シ

テ衝擊ス我軍ノ先鋒潰ヘ宗兵之ニ死スル者十餘員時ニ俱利

加羅ノ近藤等一千許ノ兵ヲ以テ敵背ヲ遮キリ鼓譟シテ來リ

ケレハ今石動衆モ還拒血戦ス中ニモ隊將平野火兵ヲ列シ五

十餘座ノ銃手ヲ輪放セシカハ前野カ軍大ニ敗績ス外ニ觀ル

者平野カ顯功ヲ聲賞セサルハナシ 公此旨ヲ聞テ啣采シ且

諸將ニ賞功ノ賜物アリ 見聞集ニ此時秀繼君父子木舟城ヲ乘取トアリ 按スルニ此說非也下文閏八月ノ役ニ成政木舟

ノ堅兵ヲ引 トルトアリ

○神保父子出撃氷見菊池等兵子潰村井援之有功

六月二十四日神保氏春父子帶甲五千ヲ以テ氷見 射水 郡 へ出張

ノ旨阿尾城へ告ク因テ城將利益及ヒ片山高畠菊池父子其宗

兵二千火急ニ出城シ民屋ヲ燔却セラレマシト氷見邑ヲ守リ

神保父子ト會撃シ菊池等撓潰セントスルニ甲長小塚藤十郎

淡路ノ 初名 等一火ノ銃手ヲ高阜ニ上セ頻ニ放丸スレハ敵軍銃傷

多ク之カ爲メニ辟易ス菊池其隙ニ乘シ騎卒ヲ主使シ虎奮還

拒敵主兩軍迭ヒニ六七人相斃殮シ血流溝ヲナス神保ハ中

堅ノ甲騎ニ歩兵ヲ併セ一千餘人ヲ率井進鼓ヲ播テ援ヒ來リ

菊池ヲ撃ツ利益之ヲ拒ミ而シテ宗兵四五十討タレテ大敗シ

殆ント塵ニセラレントス時ニ村井手兵三百ヲ從ヘ諸堡防備

追考此時斃者五十餘人

ノ嚴情ヲ巡見シ阿尾へ至ラントセシカ遙ニ菊池カ窮刃セル
 ヲ望ミ馬ヲ驅テ菊池ニ兵ヲ併セ疾撃奮鬪スレハ羸甲之カ爲
 メニ氣逸シ再ヒ起テ圍ヲ衝ク敵軍村井カ雄名ヲ聞キ井ケレ
 ハ其認旗ヲ望テ踟躕スルヲ村井急撃スレハ敵兵驚慌潰走ス
 ルヲ二里所アル長坂一作中坂マテ之ヲ追ヒ首ヲ斬テ一作五百百餘
 猶進ミテ止マサルヲ村井之ヲ制シ軍ヲ繕シテ綏キ斬獲ノ首
 級ヲ簡ヒ越兵中ノ名高キ者ノ馘八十有三顆ニ姓名ヲ録シテ
 獻ス 公稱嘖シ玉ヒ是ヨリ令ヲ承スシテ城兵ヲ動スト勿レ
 トノ玉フ且村井僥倖ニ會シ戰功アリシヲ賞シ黄金百兩良刀
 一鞘吉例トシテ青驪ニ鞍ヲ併セテ賜フト云一説天正十三年六月
荒山ノ堡へ越中勢又

働來城中人寡ニテ輒スク攻落シ首五六十ヲ討取リ城ヲ燒拂ト云景周
 按スルニ是レ前年九月七尾ヨリ勝山ヲ攻ムルトト重復スルナラン

○豊主北征成政裂地乞降、

八月 長湫略譜ニ八月ニ閏アリテ其一月事ナシ世本ニハ多ク八月トマテア
 リテ閏ノ字ナシ景周按スルニ秀吉公ヨリ七月十七日 國祖へ賜ル書
 ニ來四日到越中表出馬人數先々備目錄今朝蟹出ニ相渡トアリ何トカ此後出
 馬ノト故障アリテ延日アルカ左ナクハ戰國ノ時節先目錄七月ニ到來シ閏八
 月ニ秀吉公到着アルトハ當ラサルヤウ
 ナリ然レハ世本ノ八月トナス者當レリ 四日豊主北征ノ先軍既ニ調
 撥アリ 是續本朝通鑑 六日豊主浪華ヨリ入洛軍旅十萬旗幟雲ノ
 如ク鎗戟林ノ如ク罷熊ノ猛士赴々庶々トシテ山ヲ襄ミ海ヲ
 蔽テ賀州ニ入ル 即チ此時織田信雄 卿モ俱ニ來ルト云 我 公カ子テ迎官ヲ定メ道路
 ヲ修メテ灑掃シ街巷ニ攢欄ヲ置テ非常ヲ警セシメ 公自カ
 ラ松任ニ郊迎シ玉フ豊主面接シ寒暄ノ語了テ 公ノ頻年顯

功奇績ノ莫大ナルヲ嘆美シ夫ヨリ尾山城ニ抵ラセラル 此時

ヨリ利久君等へ賜物アリ又一舊説ニ此時大岡ヲ迎ヘント 國祖松任マテ出

馬也黃羅紗ノ羽織ニ立物七ツアル兜ヲ被リ下馬シテ從兵ヲ路傍へ連列シ敬

迎ス大岡既ニ三十間計ニシテ鞍ヲ下リ 國祖ニ近ツキ手ヲ取リ其羽織ノヨ

ク 國祖ニ應スルヲ言了テ後此度ノ顯功ヲ賞シ 國祖ヲ先ヘタテ金城ニ到

ル金城饗應ノ後大岡越中へ 其步騎陸續後殿猶越前北庄ヲ離レス

發向吳服山上ニ布陣トアリ

ト云 一説豐主ノ大軍俱利加羅ヨリ攻メ入ルト越中へ風聞セサセ豐主背進

シテ富山ニ至ルト也景周按ルニ如此大族ノ勢ヒサノニ智計ヲ用ルニ

及ハス是後人贅 逗マルルヲ累日 通鑑 尾山ヲ出師有テ二十日吳服山

ノ營 吳服ヲ源平盛衰記ニ吳福ニ作ル今ハ御福ニ作ル婦負郡ニアリ富山ニ

リ戎方二十七町アリ成政僧衣刺髪ニテ此處へ來ルヲ以テ道心山トモ

トナリ 二到リタマフ 林道春カ秀吉譜ニ秀吉發軍於越中前田利家率加賀

山城秀吉登能登石動山分兵使攻外山成政不克拒之依富田左近津田隼人而乞

降秀吉許之携成政而歸京賜越中于前田利家ト書テ月日ヲ記サス蓋登能登石

動山ト云ヒ携成政而 其鐵騎步甲前後儀列森然タリ 豐主諸軍ノ狼籍

歸京ト云皆杜撰也

農事ヲ勵ムト云 前田公年譜ヲ按スルニ豐主今石動ニ布陣スト云ハ此吳服

山ニ至ルマテノ中次ナルヘシ富山古城記ヲ考フルニ大岡中郡黒川村山ニ一

夜宿陣翌二日吳服山へ移ラセ三日逗留成政 二十四日我 二公ハ安寧

ハ安養坊坂下ニテ降ルトアリ此説可追考

坊坂ニ 又作安養坊景周按スルニ吳服山道心山安寧坊三名一地也有澤武貞

古城山也先衆ハ皆續 築堡セシメ之ヲ本陣トシテ富山ヲ下臨シ老

兵ヲシテ其形勢ノ可否ヲ謀ラシム 因テ成政森山木舟井波等

ノ堡兵ヲ引トリ神通川 婦負新川ヲ前ニシテ拒戰ノ備ヘテ設ケ

九死一生ノ羸輪ヲ決セント富山城ニ保ミ 北國大平記ニ天正十三

年三月秀吉公越中ヲ伐

ント議ス成政此ヲ聞キ俱利加羅峠ニ九ヶ所砦ヲ築キ國中ノ兵ヲ盡シテ之

今新水郡黒川
山ノ前阪ト云
山ノ東ニ東西
十八間計南北
十二間計ノ地
而ニ高キ一五
尺許ノ土居ア
リ方人此所ナ
リト云ヒ傳フ

軍師宿將ヲ聚メテ軍議ヲ問フ時ニ佐々平左衛門山下甚八郎
 膝ヲ前メテ曰ク豊主ノ大旅破竹管ナラス少ラク降テ存身ヲ
 守リ玉ハンユソ上策ナラメト成政之ニ從ヒ密使ヲシテ信雄
 卿へ謝セシメテ曰ク若シ豊主我ニ越中ノ一郡ヲ附與セハ永
 ク豊主ノ爲ニ北面シテ命ヲ承ント信雄卿之ヲ憐ミ瀧川下總
 守勝雅 按ルニ勝雅ハ一益ノ誤カ又羽柴下總守勝雅カ瀧川ニ羽柴ノ苗字ヲ賜ハルヲアルカ可考林氏豊臣譜ニ羽柴下總守勝雅ト土方勘兵衛雄
久ト信雄卿ノ爲ニ 神祖へ使シテ 神祖ト秀吉公ト和平ヲ説シムルヲアリ
然レハ一益ニテハアルマシ又藩翰譜云瀧川下總守雄親信雄ノ一字ヲ賜ハル
初メハ現常院ト云信長公ノ案内者ト成テ伊勢國ニ從フテ木造氏ヲ扶テ北畠
ト戰ヒヤガテ還俗シテ信長公ノ侍大將トナリ瀧川伊豫守一益 後左近カ名氏ヲ
乞フテ瀧川兵部大輔ト名ノル其後三郎兵衛尉ト改メ其後名乗ヲ雄利ト改ム
元龜四年叙爵シテ下總守ニナルト云云此時信雄ノ使ノヲ見ヘス可參考
 土方勘兵衛雄久 傳詳慶 ナシテ豊主へ此旨ヲ乞ハシム 本朝通紀
長五年 = 成政富

田左近津田隼人ニ依テ降ヲ乞ヒ秀吉之ヲ許ストアリ又日野小左衛門私記ニ
 此時秀吉公ヨリ雄久へ引出物トシテ越中布市村新知一万石ヲ賜フト此説不
 詳藩翰譜ニ雄久ノ此 豊主許サスニ士再ヒ信雄卿ノ命ヲ以テ之ヲ
 使ヒセシヲ見ヘス 乞テ止マス豊主曰ク此上ハ前田氏ノ許否ニ任セント我 公
 豊主ノ側ニ在テ曰ク成政詐謀多シトイヘヒ我掌握ニアレハ
 吾鄰境ニ在ヒ何ノ怯ル、ヲカアラン唯君ノ賢慮ノマ、ニ應
 答アツテ可ナラント是ニ於テ豊主成政ノ言ヲ納諾ス 越後記
十三年八月越中ノ佐々成政退治トシテ秀吉公八万ノ兵ヲ帥テ越中へ發向シ
越夕時ニ 富山本ニ白鳥城ノ南ノホセリ村ヘコユル 馬ヲ立ラシ富山貴舟増山鳥越黒川
島山 地不詳等ノ諸城ヲ攻取ラシ景勝モ八千ニテ秀吉公ニ隨心シ黒部マテ出馬
シ直江山城守兼續ヲ秀吉公ノ本陣へ使者トシ君命アラハ佐々ノ領分ヲ攻ム
ヘシトアレハ秀吉公感悅アツテ木村彌一左衛門ヲ使トシテ景勝ニ謝セシム
佐々降リ秀吉公歸軍アリケレハ景勝モ春日山へ歸國トアリ○續本朝通鑑曰
天正十三年乙酉八月己亥朔壬寅秀吉北征越中佐々成政是日先鋒既發甲辰秀
吉自大坂入洛參内奏北征之事直出軍經江州向北陸前田利家利長爲先鋒入越

中織田信雄、織田信包、丹羽長重、細川忠興、金森長近、蜂屋賴隆、宮部善祥、房池田輝政、稻葉貞通、森忠政、蒲生氏鄉、木村隼人、中村一氏、堀尾吉晴、山内一豊、加藤光泰、九鬼嘉隆等、各從軍、守列而進、此役秀吉至處城、主各變之、留金、于子城、且築三十六砦、隔俱利加羅谷、據險構柵、掛棧、僅通山谷路、擇壯士固守之、戊午、秀吉大軍、到越中境、先驅逐駿馬三百匹、試山蹊之險、認其蹄痕、踰俱利加羅、過砥浪山、登岩田峯、則越中一國在目下、秀吉控馬熟思之、乃命諸隊、出卒夫、鑿山以開新路、而令諸將分陣、群嶺、壬戌、利家等進攻、成政本營、諸軍繼之、成政力戰拒之、秀吉以大軍圍之、七日、織田信雄、憐成政、爲之請赦死、秀吉許之、信雄告之、成政、成政喜焉、丁卯、成政剃髮、謝罪降服、秀吉令利家、利長等、悉取成政部下諸壘、而召成政、爲談伴、閏月、己巳朔、秀吉自越中、班軍、陣日宮、留數日、前田利家、設饗、獻茶、賜越中國於利長、景周、按スルニ、此通鑑ニ、所謂秀吉公ノ軍七日富山城ヲ圍攻スル等ノ說ハ、林氏野史ノ誤ヲ因襲セルト見ヘタリ、我諸舊記中、絶テ所不書也、此誤一タヒ傳播シ、北國太平記等、又之ヲ因襲シ、夫ヨリ萬大虛ニ、吠ヘ近來兒童戲觀ノ畫本大閤記ナト云者、至ルマテ猶且之ヲ虛飾シテ、今ハ既ニ海内万人ノ耳ニ盈テ、遂ニ市中眞虛ヲ生スルニ至ル大息スヘシ

○豐主創成政食封越中三郡、加封 國祖、世子轉徙於越

中守山

江村專齋ノ老人雜話ニ、成政降參シテ坊主トナリ、清閑ト號ストアリ

二十九日 世本九月五日トシ、和州諸將軍傳ニ、ハ八月十五日、成政、祝髮、緇衣ニテ、吳服山ノ營ニ來リ、搗手浦伏シテ降ス、成政加賀陣前ヲ過ル

衣ニテ、吳服山ノ營ニ來リ、搗手浦伏シテ降ス、成政加賀陣前ヲ過ル

ニ令シテ、一齊ニ失笑セシム、然レ、豐主因テ、新川一郡ヲ與ヘ、一舊記ニ、此時成政禰禰

小脇刺ニテ、吳服山營ニ來リ、幕ヲク、ハ、リ入、時脇刺ノ柄、胸紐ニ掛リ、其休ユカラ、時成政禰禰

指出シ、成政ヘ、賜ルヲ成、餘三郡ヲ放テ、是ヨリ成政新川一郡ヲ領シテ、富山ニ居住ス 閏八月朔

年譜ニ、九月十四日トス、的セス、豐主越中ヲ發旗シ、通鑑ニ、自越中班軍、陣日

今朔日トスル者、ハ、通鑑ヲ証ス、宮、留數日、前田利家、設饗

獻茶トアリ、按スルニ、此日宮ニ留ルトア、尾山城ヘ再ヒ來リ、年譜ニ、ハ、豐主

ヒ尾山城ヘ來リ、十六日尾山ヲ發シテ、上京トアリ、然レトモ、夫ニテ、ハ、創業記ニ、九月十五日再

秀吉與 公共歸金城譚、公曰、北國平均之功、偏在足下之功耳、ト云ヒ、又豐主九、月十一日自筆ノ書ヲ、賦テ、淺野彌兵衛使スト云者、ト皆不合、按ルニ、是ハ、通鑑ニ

云如ク、閏八月朔、越中ヨリ、班軍日宮カ、金城ニ、十日餘、逗留シテ、閏八月十六日、尾、山起程、京着ノ上、九月十一日、日附ノ感狀ニ、淺野ヲ使トシテ、越中三郡及

ヒ羽柴筑前守ト云姓名ヲ、賜ヒシナルヘシ、然ラサレハ、前後膺合セス、我 公

景周曰、夫百如、一誠、占地、成政、有智、勇之名、身受、封乎、越中、食、四郡、而不知、足、空、拳、孤、立、作、慕、諸、浪、士、貪、森、謀、策、欲、以、誘、我、而、併、吞、鄰、國、者、不自、揣、之、甚、也、何、與、端、至、當、載、異、哉、至、取、大、敗、乃、祝、髮、剃、衣、悉、始、拭、唾、俯、伏、如、禮、冷、澁、如、蠅、而、爲、群、衆、所、鄙、笑、貶、武、門、之、醜、辱、於、來、葉、千、禰、大、愚、大、欲、規、智、勇、之、有、哉、
此書ヲ編後、關、原、政、春、古、兵、談、ナ、見、ル、ニ、大、策、一、通、ノ、爲、アリ、其、文、ニ、二十、五、日、至、于

上義明 小松城主傳詳 天正十一年 ハ故ノ如シ豐主歸洛ノ後九月十一日 一作二 十一日

重子テ 公ニ羽柴筑前守ノ五字ヲ其マ、ニ讓ラセラレ 一書 二豐

主喜感ノ餘リ羽筑ト呼ヒ戲レニ樊噲筑前ト綽號シ以テ己レニ類スルノ驕勇ヲ喜フト云按スルニ此姓名ヲ賜ハリ名ノラセラルハ今年十一月二十九日叙

爵ノ時披露アルナルヘシ此姓名ヲ賜ルヲ三壺記ニ天正十一年トス非也有澤武貞云功臣ニ大將ノ御名字ヲ許サル、一ハ鎌倉京都將軍家マテハ無之信長

公モ織田ヲ免シ玉フノ例ヲ聞カズ秀吉公羽柴ヲ多ク許シ玉フヨリ初マリ當御代國持十四五人へ皆松平ヲ許シ玉フ御諱ノ字許シ玉フハ鎌倉京都將軍

家ニモ有之 利家公御家臣ニ御姓字賜ハラサル思 召アル故ニヤ御國ニ前田ヲ許ルサレタルモノ無之 世子へモ羽柴ヲ讓

ラセ其上越中三郡 礪波射ヲ以テ我 世子ニ賜ヒ 景周按 公ノ由 水婦負

後之功賜越中於其長子利長トアリ有澤武貞考ニモ今年九月十一日 瑞龍公 越中三郡拜領アツテ森山城へ移ラセ玉ヒ此時松任ノ四萬石ハ上サセラルト

アリ然ルニ菅家見聞集系譜年譜等皆越中ノ三郡ヲ 高德公ニ賜ハルトスル 者ハ城主記ニ載スル今年九月二十一日秀吉公ヨリ 國祖へノ感書ノ文ニ三 郡ハ貴殿へマイラセ候ト有テ同書ノ末ニ越中三郡孫四郎宛所ニ折紙ト、ノ

候へモ若シ邪魔ニ候ハ、如何様ニモ其方次第ニ候トアル文ニ因テ之ヲ

國祖ニ係ルカ景周今此本文ヲ立 此紋ノ一藩翰譜 菊桐ノ紋ヲモタマフ ニハ天正十一年

トコノ時松任ノ四萬石ハ上サセララル 瑞龍公松任城ニ徙リ 玉フハ天正十一年也 世

子ハ越中守山へ遷城也 按スルニ混目集ニ天正十四年 瑞龍公守山入 城アツテ文祿三年マテ九年守山ニ居玉フトア

リ昌披問答ニハ天正十四年 瑞龍公越前府中ヨリ守山へ入城トアリ此二説 並ニ非也 國祖三州ニ牧タルハ此役ヲ始トス前田公年譜ニ此時松任四万石

ハ秀吉公へ上リ豐主ノ命ニテ寺西治兵衛 世本作治右衛門非也 此代官ニ置ク但 シ此代官ハ明年丙戌一年マテニテ天正十五年ニハ丹羽長重ニ賜フ也守山ハ

元龜ノ初ヨリ今年マテ神保氏春居ス然レトモ今年 世子 之ニ移ルノ後ハ氏春佐佐ト共ニ富山城ニ在カ詳カナラス 國祖即チ封

内ノ政事ヲ布キ庶民ヲ撫育シ玉フ 此時越中木舟城ニ秀繼君增山城 二山崎長門守山城ニ岡島備中加

州劍城ニ高島定吉ヲ置又一説越中吳服山ニ 岡島放生津ニ山崎城生ニ青山佐渡ヲ置ト云

○國祖拜少將、世子任侍從、 十一月二十九日 國祖左衛門督ヲ拜シ少將ヲ帶ヒ筑前守ヲ

兼子 世子從四位ヲ拜シ侍從ニ任セラレ肥前守ヲ兼ヌ

公昇 二

任ノ月或ハ今年七月トシ或ハ十一月ト爲シテ一定ノ論ナシ景周按スルニ七
ト十一トノ字体相似ルヲ以テ傳寫ノ者誤ルナラン又藩翰譜ニハ天正十一年
公叙爵羽柴筑前守ヲ讓ラセ 世子モ叙爵羽柴肥前守 此日 系譜二十九日ト
トナシ菊桐ノ紋ヲ賜トアリテ我諸記ト祖語ス可參考

日トス今系譜 木舟城地震ニテ崩陷シ城主秀繼君之ニ沈死 一説此
ノ説ニ從フ 時利久

君モ此城ニ在テ兵ノ爲メニ壓死セラルト云ヘトモ不詳又一書ニ此地震ノ時
越中庄川水源ノ山崩レテ流ヲ斷ツ此時其水口ニ辨才天安置ス今アル者即
チ是也ト云又此時飛州ノ白川ノ民家三百餘戸三丈許ユリ沈ムト云〇茲ニ礪
波郡能美郷北野村ノ北野天満宮ニ秀繼君自筆ノ縁起一卷ヲ藏ム國初ノ者
レトモ其書體全ク贋
作ト見ユレハ不取之

景周又一書ヲ接スルニ今年秀吉公成政ヲ伐チ篠津ニ軍ヲ止メ金森五郎八郎
長近長屋喜藏可重 後ニ金森出雲守ト號ス長近ノ子也或云金森長屋同姓ナリトヲシテ飛州高堂城主三木休庵越中
舟倉城主三木秀綱 休庵ノ子ヲ攻シム可重乃シ休庵ヲ擊ツ休庵敗レテ舟倉ニ保
テ固守ス長近急ニ之ヲ攻ム然ルニ藤瀬新藏反應シテ火ヲ放ツ因テ休庵ハ降
リ秀綱ハ城ヲ去リ而シテ賊ノ爲ニ殺サルト也按スルニ此説眞贋イカ、休庵
ノコハ永祿十年及ヒ天正元年等ニ記ス照考スヘシ休庵傳飛驒軍記ニモ詳ナ

ラノ城主記ニモ見ヘス慶長六年三萬八千石ヲ 東照大君ヨリ賜テ金森長近
飛州高山城ニ入り是ヨリ金森氏六世此城ニアリ六世ノ出雲守頼時ニ至テ元
祿五年得替ノ命アツテ這城ヲ 松雲公ニ預ケサセラル因テ同年九月騎馬隊
將永井織部共外ノ多士高山ニ行同六年ニモ騎馬隊將藤田平兵衛等數士行同
七年ニモ騎馬隊將野村五郎兵衛等行同年九月又騎馬隊將山崎源五左衛門等
行同八年ニモ騎馬隊將和田小右衛門等行此時高山廢城ノ 官命有テ事了ル
高山ノ一事前後曲折冗長ヲ以テ其要概ヲ舉グルノニ詳記及ヒ圖解等ハ故家
ニ藏スルヲ以テ茲ニ略ス今藩臣金森量之助ノ祖モ此出雲守可重ノ子飛驒守
重近 宗和ノ一子七之助方氏ヲ 微
妙公被召出ヨリ系シ來ルナリ

十四年丙戌五月上杉景勝上洛ノ時二十五日尾山ニ宿ス 是ハ 秀吉

公成政退治ノ後景勝甥ノ上杉彌三郎ヲ養子ニシテ質ニ上セ和平ノ禮ニ上洛スル故ナリ 時ニ景勝ノ迎トシテ石田

三成來リ面ス 景勝同六月六日江州坂本ニ至リ十四日大坂ニテ大開ニ對
面ス二十二日景勝少將ニ任シ七月歸國 國祖夜話錄ヲ按

ルニ此比ノコト見ヘテ景勝ヨリ直江山城ヲ以テ徳山五兵衛村井又兵衛マテ
隣國ナレハ以來懇意ヲ蒙タク參謁ヲ乞ハル、ニヨリ 公領掌アツテ山里ニ
テ對面アリ 江村野齋老人傳話ニ山里トハ山城ノ内北大 其時直江一人從フ伴食ニハ土
方雄久マテ也 開ヨリ梅松ト云坊主ニ預ケ置カルトアリ 點勸シ酒後腰刀一鞘贈ラセラル直江ヘモ絮

袍三領道服一領ヲ賜ル其後十日許有テ 公夜中景勝ノ方へ訪臨アリ此時景勝ヨリ正廣ノ脇指ヲ進上シ又謝禮トシテ來リ 公ノ正廳ニテ懇言ヲ云置テ 歸ラルト云

三州志鞆櫛餘考卷之十一終

三州志鞆櫛餘考卷之十二

加賀州 金澤 富田景周大賚編輯

○佐佐成政去越中丹羽長重入松任

天正十五年丁亥六月豐主佐佐成政ニ肥後一州四十五万石ノ稅ヲ賜ヒ

越中新川郡ヲ除ク成政因テ神保氏春父子等ノ越中ノ士ヲ從

へ肥後ニ轉去ス 成政肥後ニ徙ルニ國人服セス隈部某是カ首魁シ成政屢討之豐主人ヲシテ言ハシメテ曰ク公命ヲ承スシテ私

ニ兵戈ヲ動カスハ甚タ謂レナシト成政驚テ明年戊子攝州尼崎ニ至テ豐主ノ怒否ヲ窺フ豐主人ヲシテ責メシメテ曰ク成政虐政ヲ以テ民ヲ苦ム故ニ民反

シテ兵起ル罪ノカルヘカラストテ四月十七日成 是ヨリ新川郡ハ 公政ニ自刃ヲ命ス成政自刎シ佐々氏ノ宗祀絶ツ

ノ邑トナル 景周按スルニ新川郡ハ今年ヨリ文祿四年マテ九年間豐主ノ領ニテ我 公預リ分トナル一説ニ今年新川郡ヲ豐主ヨリ我 世

子へ筑紫陣ノ戰賞トシテ加封アリ其内布市邊一萬石 是年豐主丹羽長重ノ分ヲ土方勘兵衛へ賜ハルトアリ按スルニ此說非也

大屋燈故曰按
スルニ松任四
萬石ノ所詳カ
ナラスト雖ト
モ納賦勾ノ計

籍ニ松任下諸
村ト記ス者ア
リ是蓋天正八
年ノ頃ヨリ分
ツ所ニシテ四
萬石ノ土地ナ
ルヘシ村名左
ノ如シ
松任 德丸 乾
垣内 町新 四
幸明 新田 倉
光成 相木 竹
相川 新田 村
井北 安田 徳
光村 井新 田
二口 平新 乙
九郎 崎新 田
菅波 安吉 守
新保 上島 御
内方 新保 御
影堂 長島 四
屋福 永上 安
田番 田番 田
新上 安田 新
上上 柏野 小
下柏 野留 野
源兵衛 島水
島宮 丸米 永
宮保 笠間 黒
瀨小 川松 本
瀨北 島鹿 蓮
池東 米流 西

米光手取井
關荒島末正
長屋平加本
吉本吉新
本葛鐵三代家
譜等ニハ城主
ヲ長三郎左衛
門トス候ハラ
クハ誤ナラン
政奉古兵談ニ
岩石ノ城ヲ
利長公氏卿ト
攻メ玉フトキ
公ノ手ニテ一
番求ハ大田喜
藤次松平久兵
衛ノ兩人ト氏
卿ノ記録ニ見
エタリトイヘ
リ
上関金銀銭
ヲ給テ以テ軍
中賞賜ノ用ニ
充ツ此時未ダ
金錢ノ定制ナ
ク錢ハ懷中ニ
便ナレハナリ
國祖天正十三
年始メテ封内
ノ丈量ヲ命セ

ノ封地若州ヲ除キ賀州松任 四万石ノ税入藩
ヲ賜ハリ長重コ、
ニ徒ル 按スルニ長重ノ父長秀ニ天正十一年豊主ヨリ越前若狹及ヒ加州ノ
江沼能美二郡ヲ賜ヒ同十三年長重ノ時若狹一州トナシ其餘ノ封地
ヲ除キ而シテ今年ニ至リテ松任ヲ賜ハル也 有澤武貞筆記ニハ天正十五年秀
吉公筑紫御陣ノ節長重ノ手ノ者亂放シ法度ノ處ヲ亂取ス仍之長重若州八萬
石ナリシヲ召放サレ加州松任四万石ニ所カ
ヘトナル是レ其家來ノ業ナルユヘトアリ

今春二月豊主島津修理大夫義久ヲ征ス 國祖從軍ヲ請フ

豊主聽カス京都ニ留メテ 帝衛トス 世子ハ兵三千ヲ帥

井テ從軍タリ夏四月朔 世子及ヒ瀧生氏郷ヲシテ岩石城

ヲ前ノ界攻シム氏郷ハ城面 世子ハ城背ニ向フ城主熊井越

中守善ク拒キ善撃ツ我先鋒將岡島一吉先登ス長連龍奧村

永福山崎長鏡等矢石ヲ避ケズ累進ス因テ外郭敗レ城兵内

城ニ保ム我將大田喜藤次 後号 松平久兵衛 後号伯耆但シ松平譜
但馬 大平左馬允吉田長藏 大平ハ今ノ金太郎ノ祖也左馬
允ハ瑞龍公ヨリ此度ノ賞ト

河原兵庫ノ祖 今ノ士籍ニ此氏ナシ太閤記ニ前田肥前守内河原兵庫大平
シテ感狀ニ四百俵扶持セラレシコト天正十五年八月七日一作九月ニミエタ
リ亦此時同文ニテ吉田長藏ヘモ四百俵賜ハル吉田ハ八郎太夫ノ祖也 坪

内次左衛門 今ノ士籍ニ此氏ナシ太閤記ニ前田肥前守内河原兵庫大平
左馬允坪内次左衛門群ヲ離レテ攻入コト速ヤカ也トテ太

閻ヨリ金錢ヲ賜ルトアリ景周坪内ノ 之ニ次テ内埤ニ逼リ横山長
由緒ヲ求レトモ得ス以テ其傳ヲ闕ク

知 此戦功ヲ賞シテ四千 陰山三右衛門大平宗左衛門 陰山大平今共
裔ナシ其餘ノ

士裔ハ前 斬首多ク而シテ中村九八郎等 九八郎ハ與右 戦死ス 九八
後ニ註ス 衛門ノ祖也 裔ナシ其餘ノ

外舊記姓名ヲノセス家譜ヲ按スルニ小塚淡路弟ノ權太 氏郷ノ諸將モ
夫富田鉄次郎ノ祖内藏允等此役ニ功アリシコト見ユ

亦奮撃奇功アリ熊井苦戰其將卒數十人自剄シテ死シ城乃

陷ル豊主ハ 世子暨ヒ氏郷ノ奇勳ヲ美シ四月二日賞書ヲ

ラ内ニ陰山
膝内ノ米地ア
リ此陰山ノ祖
ナルカ

四

世子ノ陣營へ賜ハル増田長盛之ヲ持來
ル其文年譜ニ載ス 豐主殊ニ大田松平河原

大平其外氏郷ノ功將ノ軍忠ヲ勞ラヒ座前ニ於テ各金錢三

文ヲ賜ハル豐主ノ大軍鹿兒島薩州ニ到ルニ及テ五月七日義

久剃髮縮衣ニテ降り罪ヲ謝ス因テ龍造寺政家及ヒ世子

ヲ大隅へ池田輝政蒲生氏郷ヲ日向へ向ハシム兩州ノ諸城

主風ヲ望ンテ皆降り西州盡ク平ク秋七月豐主京ニ凱旋ス

是年豐主聚樂城ヲ營シ城ハ京堀川通りノ上也聚
樂ノ遺地今ハ町名ト成ル 諸大臣ノ邸モ

各此邊ニ構フ此時 國祖ノ邸ハ本丸ノ正西蒲生飛驒守細

川越中守邸ノ間ニアリ今此舊邸地
ハ不可考

此役ノ留守城將ハ金澤ハ安勝君七尾ハ良繼君暨ヒ高畠織部

中川清六守山ハ前田對馬父子増山ハ片山伊賀也又國譜ヲ按ス
ルニ此時魚津

ニ青山佐渡稻垣與三右衛門滑川ニ今枝内記
滑川ノコト不詳泊ニ小塚權太夫富山
ニ前田美作ヲ置ク新川郡ハ此時公邑ヲレトモ預リ領ユヘ是等ノ留守ヲ置ト

ナリ又一説ニ此時七尾ハ利政君ニ前田修理君長九郎左衛門ヲ
副ヘテ守ラシメ其外所々ニ町奉行所司代等ヲ指置セ玉フト云

十六年戊子藩翰譜ニハ天正十六年三月
前田利長右少將ニ任ストア
リ按ルニ此說非也林氏豐臣譜ニ今年四月聚樂城へ 行幸

ノ時ノ名籍ニ加賀少將 前田利家越中待從 前田利長トアリ若シ今年ト
ナセハ 父子同官也 世子少將ハ天正十八年也○今年十二月 國祖豐主

へ告テ 世子へ能登一州ヲ分與シ玉フ此時前田利好安親長九郎左衛門村
井左馬介高山南坊不破源六半田半兵衛其子次太夫山崎彦右衛門北村三右

衛門與野與兵衛等ヲ副ルト
混目集ニ見ユレ此說非也

今夏四月豐主奏シテ聚樂城へ駐蹕後陽
成帝ヲ請フ勅シテ之ヲ

許ス十四日幸行我 二公此儀ニ預カラセ玉フ此日 二公其
坐ニ侍シ奇松

祝ノ和歌ヲ詠シ玉フ 植オケルミキリノ松ニ君カ經ン千代ノ行エソカチ
テ知ラル、 國祖 カソヘ見ン千年ヲ契ル宿ニシモ松ニ小松ノ陰ヲナラ

へテ
世子

十七年己丑

今秋九月九日ニ列候聚樂城へ會朝シ豐主へ謁禮ノ時我

國祖ト上杉景勝ト謁儀ノ先後ヲ爭フ此時ノ謁官ハ寺西筑

前守也 國祖ノ太刀ハ村井又兵衛持シ景勝ノ太刀ハ直江

山城守持ス村井其支吾ノ誼ニ依テ 國祖先トナリ特ニ威

度アリト云

直江上杉家ノ位官ヲ播言シテ上番タラント云村井之ヲ罵
テ曰ク當時關白秀吉公ハ布衣ヨリ起レトモ今日天下ノ主

タリ我主ハ 菅丞相ノ家ナレトモ武功ヲ以テ三州ニ主タリ上杉ノ家モ申

分ノ如ク重キ家ガラナラハ布衣ヨリ上リタル秀吉公へ謁禮無用ナリトイ

へハ直江口ヲ箝シテ一言ナシ於是筑前守 國祖ノ太刀ヲ請テ披露シ 國
祖上番タリ 國祖退朝ノ後村井ヲ賞シ巨杯ヲ賜ハリ三酌ニ及フト也○按
スルニ此コト天正十五年カ十六年ナルヘシ其故ハ長明筆記ニ聚樂殿落成
ノ時トアリ又 國祖此時少將トアリ可追考然レトモ今此ニ係ル者ハ三壺

記等今年トナスヲ以
テ姑ク其説ニ從フ也

○國祖任中將且東州之役封内諸城置留守

十八年庚寅二月十六日一作十八日 二公東州ノ役ニ我北國ノ精甲

一萬有八千ヲ帥井テ出師アリ 去冬ノ積雪今春猶消エスアリケレハ
美濃路へ出木曾路ヲ經テ向ハセ玉フ

公ノ譜牒ニハ從信州 笛吹峠入關東ト云 因テ尾山ハ安勝君ニ村井又兵衛ヲ副へ富山

ハ前田美作魚津ハ村井ノ臣老功ノ者トモ 世本ニハ青山佐渡トア
リ然レトモ青山譜ニ關

東御陣ノ時御供ニ 守山ハ前田對馬七尾ハ中川光重ニ安勝君ノ家

臣ヲ副ヘテ留守タラシム 見聞集ニ安勝君暨村井豐後ノ臣ヲ置クトア
リ然レ安勝君ハ尾山ニ留守タレハ此説非也

東州征討了リ豐主凱旋ニ及ヒテ我 二公ヲ東奥ニ留メテ邊

疆ヲ平定セシム依テ 二公後レテ八月上旬聚樂邸へ歸旋且

家忠日記ニハ
其兵三万五千
餘騎トス

入朝シ玉フ時ニ 國祖從四位上ニ叙シ左近衛中將ニ任セラ

レ 異本年譜中將ニ任セララルヲ十七年四月八日トス又藩翰譜ニハ天正十八年
ノ春 國祖參議從四位下ニ任ストアリ並ニ誤レリ參議ハ十九年ニ任スル

也 世子少將ニ任セララル 藩翰譜ニハ之ヲ十六年トシ又一說ニハ十七
年トス並ニ非也其辨ハ十六年ニ記ス又文祿

元年朝鮮進發ノ中ニ松任侍從
ト大問記ニ書スルハ尤誤ナリ

今茲豐主北條氏政氏康ノ子ヲ征伐トシテ東國ニ赴クニヨリテ

二月十六日 二公兵一萬八千一作三万ヲ帥井テ北發シテ上州

ニ向ヒ三月十日ニ上杉景勝毛利秀頼真田昌幸ト松枝城一作

田松井ヲ攻メ玉フ我將長連龍山崎長鏡奧村永福不破彦三村

井出雲篠原勘六青山佐渡暨ヒ前田利秀秀繼君ノ男篠島織部典勝

等銳進シテ羅郭ヲ破ル河内山半左衛門利秀隊長ナリ既ニ天正十二年龍ヶ峯ノ役ニ見

家忠日記ニ松
枝城ヲ圍ムヲ
四月十日トス

駿河守實名
年譜作直宗
家忠日記作
政繁

家忠日記ニ駿
河守四代ノ祖
ハ江州ノ人ニ
テ北條早雲ト
共ニ關東ニテ
功アリ小田原
城ヲ草創セル
七人ノ一ナリ

ニ仲太夫
ノ祖ナリ 先登シ又別郭ヲ攻ム 廣瀬藤右衛門此子孫詳カナラサレ
トモ今ノ銃士廣瀬藤

兵衛ノ祖ノ狩野小兵衛カ妻ハ廣瀬藤右衛門ノ女ニテ
小兵衛ノ子與兵衛ヨリ外祖ノ廣瀬氏ニ改ムトイヘリ 原九左衛門今ノ九
左衛門

ノ祖 河合五右衛門此子孫不詳今ノ河合ニ氏ノ祖ハ並ニ國
祖ヨリノ臣ナレトモ此祖ニ此名見ヘス 堀江造酒

丞今藩臣ニ
此姓ナシ 壁ヲ踰テ之ヲ破ル 利秀夜半ニ河内山ヲシテ竊ニ

郭中ニ入りテ火ヲ放タシメ其機ニ乘シテ進撃ス因テ羅郭

別郭皆破レテ城主大道寺駿河父子子城ニ保テ拒ク 世子

ノ銃將長田權右衛門此胤今不詳今ノ長田ノ二氏モ 高德
公ヨリノ臣ナレトモ此祖ニ此名ナシ 竹牌ヲ

設ケ横山長知ト並進ス 一書ニ此トキ連龍ノ臣關宗右衛門關又八郎
長尾宗三郎須賀豐四郎モ進撃シテ死スト云

因テ我衆從進シ終ニ城陷テ主降ル我 公乃駿河守父子ヲ

駿河守ノ子ハ新四郎也是亦北條家ニテ上野松井田ノ城守也父子並ニ是ヨ
リ我 公ニ仕フ新四郎ノ子ハ玄蕃也此玄蕃慶長五年大聖寺役ニ勇戰合槍

故ニ此時モ北條家ノ三職ニ列セリトイヘリ
 同記ニ十一日利家松山城ヲ圍ム
 三ノ餘騎降リ加ハルト云古
 兵談ニハ松山城和議トナリ
 上田主水ハ小田原ニ籠城ス
 其臣難波田因幡木呂子丹波
 備木呂子丹波伊賀ノ四人降
 金子紀伊人松山トアリ
 山和議ハ松山トアリ
 井田城請取ノ内
 後一兩日ノ内
 北條安房守ヲ古兵談ニハ猪俣能登ニ作ル
 今ノ關東ノ北條安房守家ノ先祖ハ主殿介ノ女江戸へ出ルコトアリ時ニ大敵大君之ニ入聲ヲ命シ北條安房守ノ子孫ト稱シ安房

守ト右ノラシムト井井揚十郎書オキシト云

ス其後尾州へ行ト云 先鋒トシ上杉毛利眞田ノ諸軍ト武州松山
 今末胤本藩ニナシ

城ヲ攻ム城主上田主水ノ將難波田因幡木呂子丹波等降服

ス 主水ハ此時 依テ又此輩ヲ鄉導トシ 烈祖成績ニ松山ノ上田朝廣降
 在小田原城 兵卅餘騎ヲ率テ我 公ノ前

隊ニ隸 旣橋裝輪 並ニ 河越州 武 三城ヲ攻テ之ヲ拔キ其主ヲ皆
 スト云 州 州

降ヲシメ十九日鉢形城 武 州 圍ム 烈祖成績ニ 公ノ松山ヲ圍ムヲ
 十一日ニ係ケ鉢形箕輪旣橋河越

ヲ攻ルヲ十九日ニ 城主北條安房守 邦 降ル 安房守ハ北條氏直ノ伯父
 係ク参考スヘシ 氏政ノ弟也幼名助五郎ト

云シトキ甲州ニ質トナリシ人也此役ニ降ル後豐主ヨリ我 公ノ臣トナシ
 公千石ヲ秩ス安房守卒後其子采女へ又千石ヲ賜ヒ前田慶次郎利益ノ女婿

トス采女ノ子ヲ主殿介ト云此者 微妙公ノ時江戸ヨリ京都へ聘使ヲナシ
 相州ヲ過ル時國中ノ士農故君ノ孫裔ヲ拜禮セント舉テ群競スルヲ以テ

公改メテ聘使ヲ他士ニ命スト云主殿介嗣子ナリシテ絶炊ス其女龜へ寛文
 四年八月二十日十口ヲ賜フ故ニ今本藩ニ此子孫ナシ又此役ニ信州沼田ノ城

主猪俣能登守モ此城ニ同居セシカ是モ同 其勢ヒ建瓴ノ水ノ如ク刃
 少降ルトナリ此諸城ノ降人五万餘トアリ

ニ血ヌラス淡旬ニシテ數壘ヲ陷トス然レトモ豐主性豪猛
 專ヲ力戰ヲ好メルヲ以テ 公ノ仁攻ヲ以テ鈍シトス因テ

二公暨ヒ上杉氏等二十三日急ニ八王寺城ヲ 武 圍ム 城主北

條陸奥守氏輝 氏政 小田原 州 相 ニアリテ留守將橫地監物子城

ヲ守リ中山勘解由狩野一庵中ノ丸ヲ守リ近藤出羽介山下

ノ別郭ヲ守ル 公大道寺父子等ヲ從へ夜山下ノ郭ヲ襲ヒ

其不虞ヲ擊玉ヒ近藤之ニ死ス 公又兵ヲ進メ先鋒山崎長

門富田大炊 上文ノ六左 衛門是也 青山佐渡暨ヒ利秀等金子丸ヲ攻テ之

ヲ破ル太田長知 喜藤 不破橫山篠原村井宮崎藏人 藏人 高畠

平右衛門 始号九 湯原八丞 長太夫 阿波賀藤八郎 不森役ニモ見 等繼テ

藏己見 祖 今此姓ナシ

十六日揚光右衛門松平伯耆へ指出セシ書ニ 八王寺絶金子ト云處ヲ朝懸ニ御懸ノ其時閉齋家中へ首一ツ今一ハ西村次右衛門取候ト云一八王寺御政ノ并開齋先手仕ニ付テ一番ニ我等時裏マテ附名ノリ申處ハ私傍暨西村次右衛門御直衆ニ大音主馬殿御付候此者正居候處へ富田越後殿モ御付候御馬廻御小將ノ内ニハ一番ニ御付被成候ニ付テ御兩人ニ堅ク言禁ナカハシ申

候則其場ニテ私次右衛門ト手ヲ負候ニ付テ右御兩人へ御斷申候今以御兩人御覺可有御座候

進ム河内山先登シ且折截ヲ 二公ニ獻ス山崎ノ家臣堀角

右衛門 角右衛門 微妙公ノ時爲公臣四百石ヲ賜ハリ 寛永十九年病死シ其子角右衛門天死シテ絶ス 敵將金子三郎

右衛門ノ首ヲ斬ル中山狩野兵ヲ進メテ之ヲ撃ツ河内山銃

手ヲ前メ敵三人ヲ打殺シ亦疵ヲ被ル利秀又小丸ヲ攻ム守

兵死戦シテ嚴防ス又長山崎與村父子 永福永 妙易英 村井富田青山篠

原及ヒ上杉毛利眞田ノ諸將城門ヨリ攻メテ中丸ヲ乗トリ

二丸へ攻カ、リ中山狩野頻ニ指揮シ矢石ヲ飛シテ強禦ス

トイヘトモ少シモ畏レス竟ニ二ノ丸ヲモ乗クヅシ本丸へ

ト進攻ス横地ハ豪將ナリ特ニ銳甲ヲ左右ニ從へ城ヲ出テ

力戦ス其銳鋒凛然トシテ當ルコト能ハス我諸軍暨ヒ上杉

眞田毛利等ノ諸兵驚潰シ七慌八亂シテ走ルヲ富田大炊半

田半兵衛ノ二隊ノミ嚴然トシテ動カス守返シテ奮撃ス是

ヲ見テ長ノ臣岡部式部堀内帶刀 今ノ半兵衛ノ祖也世本一周ニ作

南志見兵助 今ノ藤太ノ祖也世本ニ南齋ニ作ル南齋ハ兵助ノ養子也此

右衛門今ノ木村吉之助ノ祖左門今ノ河野三郎左衛門ノ祖藤兵衛今ノ富田

數馬ノ祖新三郎各首ヲトル又城戸久兵衛山本圓齋高田與助横田久右衛門

永江善助モ首ヲ取ル但シ此等ノ末孫ハ絶炊也今ノ山 山崎ノ臣服部太

本三右衛門ノ祖與五郎ハ討死ス此等依長家傳附之

郎左衛門 此子數馬後ニ横山長知ニ任フ今ノ 三田村左助 今山崎ノ臣

シ山崎家傳ニ左助八王寺役ニ首一得 等トツテ返シ戦フニヨリ潰

之大聖寺役ニ小丸ニテ得首トアリ

兵追々立歸レリ 二公愈兵ヲ勵マシ指揮シ玉へハ大音藤

藏 時ニ享年十七 瑞龍公ノ小姓タリ後ニ主馬ト号ス今ノ帶刀ノ祖也此比

公命ニ背キ蟄居セルカ潛カニ此陣ニ出テ蝕キ首級ヲ獻スルニヨリテ蟄

居チ免シ元ノ近 先登シテ首一級ヲ獲雨森彦三郎 太閤記作 彦太郎 モ之

ニ續キテ首一級ヲ獲ル 舊注ニ實ハ雨森一番首ヲ得タレトモ大音ノ 塾居チ痛ハリテ大音カ得ル首チ一番トナシ

タリ 二公之ヲ聞玉ヒ雨森ノ友誼アルヲ賞セラレトアリ小瀬道喜ノ太閤 記ニ之ヲ評シテ曰ク雨森ノ高名チ一番首ニツケユト有シチ二番ニ辭シタ

ル義士ノ心中ヨク思フヘシ大坂寅卯ノ戰ニ首捕リテ前後ヲ争ヒ恥チモ不 顧者アリ或ハ聊ノ働チ大キニ云出シ或ハ甲チ拾ヒテ首ニキセ甲付ト記サ

レイノ子ノ某ト後リ指サ、ル、モノモアリ雨森ノ靈知ルコトアラハ之ヲ 笑フナラント云云景周雨森ノ由緒ヲ求レトモ舊記ニミヘス義士ノ傳ヲ失

コト遺憾 横山大膳大田喜藤次暨ヒ有賀秦六 清右衛門ノ祖ナリ 此時ノ功ニヨリ 最多シ

瑞龍公ヨリ父ノ有賀齋へ賜ル天正十八年二月二十二日ノ褒書ノ寫古案記 等ニミヘタリ又此外ニ毛利猪右衛門ノ祖義太夫菊田三郎左衛門ノ祖忠右

衛門小塚淡路ノ弟權太夫高島石見ノ弟九藏富田鉄次郎ノ祖内藏允神戶藏 人ノ祖藏人等此役ニ働アリシコト各家譜ニミユルヲ以テ附記之又三千石

肥田與右衛門此役ノ旗奉行ニテ戰功アリ手ヲ負テ守山ニ皈テ 死シ其子五郎八相續シ大佛普請ノ時切腹ヲ命セラレテ斷絶ス 等奮進シ

テ之ヲ攻ム是ニ於テ横地遂ニ一方ヲ擊破リ子城ヲ棄テ遁

走ス中山狩野ハ疲兵十餘人ト子城ニ入りテ自刎シ從者火

ヲ放ケ而シテ八王寺城陥ツ 豐主此城第一ノ堅城ナルニ連日ニ乘 トルコト富田半田ノ功ニ在ト賞シ玉

ヒ 國祖ヨリ景周ノ先祖大炊へ三千七百二十八俵ヲ 賜フ且太閤ヨリモ感賞ノ言ヲ賜フコト家譜ニアリ 其ノ一旦潰走ノ

時ニ當リ粉骨ヲ厭ハス戰死スル士ハ青木善四郎 左衛門 荒木

善太夫 五左衛門 門ノ祖 隱岐治部左衛門 是ヨリ四世市郎兵衛 是ヨリ時自殺シテ斷絶ス 三井加兵衛 江

角左衛門 澤崎作藏 是ヨリ七世太左衛門ノ時 寶曆四年逐電シテ斷絶ス 水野源兵衛 次郎太 夫ノ祖 三輪

彌七郎 仙太夫 祖 堀與八郎 與八郎 祖 野村七兵衛 伊太郎ノ祖日記ニ傳兵 衛トアルハ同人ナリ 北

村甚八郎 今ノ三郎左衛門 祖ニミヘス 日根野九兵衛 一作日根不破彦三ノ臣平野 齋宮ノ子不破大學日根野九

兵衛ノ養子トナリ日根野ト号ス天正十八年關東陣ノ時九兵衛ニ属シテ功 アリ八王寺城ヲ攻ムルトキ彦三發病スルニヨリ九兵衛彦三ノ人數ヲ引率 シ八王寺ニテ討死ス因テ 公飯陣ノ後九兵衛へノ二千俵ヲ大學へ賜ヒ 公臣トナス慶長五年ノ役後姓ヲ不破ト改メ浪華ノ二役ニモ從軍タリ九兵

衛父ハ備中守仕秀吉公西國ニテ三萬三千石
ヲ領ス九兵衛ハ其二男ニテ 國祖へ奉仕也 宇野才三郎 今ノ藩臣宇野ノ

脇田小五郎 帶刀重俊ノ實子ナリ 九里庄左衛門 庄或作勝又少若クハ
今ノ脇田虎太郎ノ祖 覺右衛門ノ祖庄藏カ

半田半兵衛 時ニ母衣役ヲ勤メ討死ス 市橋清十郎 今藩臣ニ此姓ナシ
傳ハ天正十二年ニ記ス 大聖寺ノ市橋波江

ノ先祖ニモ此名ニユス 其外市橋ノ 吉田喜藏 今ノ富山ノ吉
コト大坂役市橋左衛門下條ニ辨ス 田吟次郎ノ祖 等ナリト云

國祖ノ夜話録ニハ 公八王寺ニテ前田利秀、藤原、不破、富田、村井又六、小祿ノ
輩ニハ脇田小五郎、湯原八丞、九里勝左衛門、市橋清十郎、北村甚八、馬回ニハ半

田半兵衛、野村傳兵衛、荒木善太夫、阿波加藤八、是等ノ高名及ヒ九里、北村、市橋、
野村、荒木、日根野、九兵衛此外小性馬回併テ二十七人討死ノコトヲ常々曰

フトアリ又荒木初度ノ高 八王寺ノ戰ニ敵首ヲ獲ルコト總計三
名ニ討死不便ト曰トアリ

千餘級也 此首數ノコト本月二十四日 世子 秋七月七日 神君ノ
ヨリ有賀有賀齋へ賜ル書中ニミユ

奇謀ニテ北條氏政等小田原城ヲ出テ降ル豐主自裁ヲ命セ
ラレ北條氏ノ宗祀此ニ絶へ而シテ事落着ス是ニ於テ豐主

小田原ヲ發シ大旅ヲ帥井テ奥州ニ赴ク 是土賊ノ鋒起ヲ退 我
治センカ爲メ也

二公先軍タリ既ニシテ衣川ニ到ル 此時我臣寺西與市郎此路中羽
死スト云與市郎ハ 今ノ庄兵衛ノ祖也 時ニ暴雨連日沃クカ如ク河水漲漫衆軍涉ル

コトヲ得ス 公先神駿ニ跨テ涉リ玉フ 此馬ヲ京水ト名ク
四下ノ良也ト云 世

子之ニ次ク豐主ノ諸軍是ニ激シテ盡トク涉ル東州ノ諸城
風ヲ望テ降り東州平ク因テ豐主 二公ヲ奥州ニ留メテ班

軍也 二公東奥ニ在テ國政ヲ沙汰シ且奥羽ニアル關八州
ノ大小甲族ノ采邑履畝打量ノタメ郡縣ヲ按部シテ邊疆ヲ

正シ八月月上旬聚樂邸へ歸旋シ玉フ
今年蒲生氏郷ト伊達正宗ト郤アリ我 世子豐主ノ命ニ依

追考相傳太閤
ノ水繩六尺五
寸ナルヲ我
國祖古法ノ度
篤ヲ以テ三百
六十歩ニ丈量
ナサシムヨリ
テ關東ノ民心
ヲ得玉ヒ後々

マテ其徳惠ヲ
仰クト云但六
尺五寸ノ水繩
ナレハ三百六
十歩ヨリ餘計
ニ成ルヤウナ
リ古法ノ度筒
ハ何尺ナリヤ
モシ又斗代ニ
ヨルカ識者ヲ
得テ質問スヘ
シ

テ之ヲ饗シ和平成ル

此時正宗華衣長劍其体異ナルヲ以テ世子之ヲ憎ミ醉ニ乘シテ盃ヲ正宗ノ面ニ抛ツ坐客戸

田武藏上田主水土方勘兵衛等愕然ク猪子内匠等此コトヲ國祖ニ告ク國祖自若トシテ笑テ曰ク予モ亦少年ノ時如是ノ意氣多シト答ヘ玉ヘハ内匠等默シテ去ルト云云

景周按スルニ小田原記北條五代記北條盛衰記諸家太平

記等其事各牴牾スル處多シ然レトモ今我公ニ係ル者

ヲ折衷シテ文ヲ立ツ

○國祖拜任參議從三位

十九年辛卯三月 公休暇ヲ賜ハリテ尾山へ還城アリ六月

按ルニ秀吉公ヨリ國祖へノ書ニハ其方ヲ宰相ニ揚可申ト有テ三月十九日ノ月日也然レハ此ニ六月トアルハ六月ニ至テ宣命下ルト見ユ 公

參議從三位ヲ拜ス中將故ノ如シ 藩翰譜ニハ十八年庚寅參議ニ任スト疑クハ誤ナラン ○此時村井長賴

豐後守ヲ非シ篠原一孝肥前守ヲ拜ス 後改出羽守 按スルニ此村井叙爵ノ時ニテハ日本ノ倍臣ニ叙爵ノ人當家ニ村井篠原ノ二人 德川家ニ四人備前中納言ニ二人安藝ノ毛利ニ二人越後ノ景勝ニ二人凡テ十二人ナラテナシト 國祖ノ夜話録ニ見ユ然レハ世上ノ印本ニ國名ヲ名ニ用ユルハ凡テ守ノ字ヲ加フルコト蛇足タルコト明ラカナリ 八月六日村井豐後守第へ 在金城西丸 光臨シ玉フ 此時茶室自カラ濃茶ヲ献ス 國祖モ慰ミニ自カラ抹茶ヲ點セラル

今年豐主關白職ヲ秀次君ニ讓リ自カラ太閤ト號シ而シテ

五老ヲ置キ 公ヲ其二ニ處ス 五老ハ東照君我公毛利輝元浮田秀家上杉景勝是也豐臣譜ニハ景

勝ヲ小早川隆景トス一説ニ五老ヲ定ルハ前年庚寅トス○今年正月二十日甲冑養ヲ奥村永福ヨリ始テ獻ス

○國祖西觀 世子修尾山城壘

文祿元年壬辛二月 國祖西觀 世子ニ命シテ尾山城ノ石壘

ヲ築カシメ 此時加州戸室山ヨリ巨石ヲ斫出シ壘ヲ築クニ東一方崩ル、コトニタヒニシテ成ルコトナシ 國祖肥前ノ名護屋ニ在テ之ヲ

聞玉ヒ篠原出羽ヲ歸北セシメ督工官トシテ造ラシムルニ不日ニ成ル但シ石面段々引除築クヲ以テ世子立腹アリト云
 小立野 一作小龍野古
 山ト号スノ方山腰ヲ斫拔地底ニ陰樋ヲ設ケテ水道ヲ引ク是ヨリ尾山ヲ改メ金澤ト號ス
 今年四月十四日越中岩淵ニテ向井彌八郎ト齋藤半九郎山口庄八郎ト口角乃死因テ此兩徒交々闘死スル者若干也世ニ岩淵喧嘩ト云

今春三月十六日豊主自カラ出京シ朝鮮國ヲ併吞シ夫ヨリ朱明ヲモ席卷シ明都ニ南面スヘシト熊罷ノ大旅ヲ發シ戰艦ヲ造ラシメ四月肥前名護屋ニ到リテ陣營ヲ構ヘテ出張アリ前軍既ニ軸轡相次風帆海ヲ蔽フテ發ス 公ハ豊主ノ命ニヨリテ四月一本之ヲ三月十日トス北州ノ兵八千ヲ帥井テ此從軍我諸將士ノ姓名舊記ニ見ヘス 十二日ニ名護屋ニ到リ
 今年出師名護屋在陣衆十萬二千三百人 國祖從兵八千人 世子八百

此注ノ世子從軍城フヘシ若此ノ說實ナラハ上注ノ條

原出羽尾山築豐ノ時 世子在城ト相反ス追接スヘシ

高麗役ニ國祖父子名護屋在陣ノ時横山國祖種村三郎四郎ノ歩若黨ト途中ニテスリアヒ口論ニ及フ子弟ノ大勝之ヲ見テ若黨ヲ打擲ス因テ種村其若黨ヲ追放ス其後大勝種夫ノミニテ本陣ヨリ下宿スルノ路ニテ彼ノ若黨ノ術メニ斬附ラレテ創ヲ負ヒ而シテ遂ニ却テ敵ヲ斬殺ス 世子其ノ勇ヲ賞シ足マ

人ハ此内也朝鮮渡海衆二十万二千二百人都合三十萬三千五百人也是即朝鮮出師人數目錄ニ見ユ接ルニ此時秀吉公ノ居セシ所今皆畑トナリテ古ノ遺狀ナシ我 公ノ居地モ今シレヌ只 東照君ノ館迹ノミ老松鬱葱トシテ存スト云 名護屋陣營ノ造作ヲ掌ト
 公ノ預カル分三ノ丸西ノ門三間ニ八間同西北ノ角矢倉四間ニ五間同取次ノ間二間ニ四間此三ヶ所ハ全ク 公ノ手ニテ作ラセラルトアリ
 且 東照公ト總テ此タヒノ兵制職制編伍方略等ノ諸軍事ヲ論定シ玉フ 名護屋在營中金澤衆六ヶヒ交代ストアリ 世子從軍八百及勝君村井長賴魚津ニ青山與三富山ニ前田對馬放生津ニ山崎庄兵衛ト云山崎ハ増山ノ守タレトモ此時此城ニ來リ守タルト云 秋七月豊主母堂病革タルニ因テ名護屋ノ政刑朝鮮指揮ノコトヲ以テ 東照君ト 國祖トニ委子諸將將士ヲシテ名護屋ヲ警衛セシメ而後名護屋ヲ發シ日夜ヲ論セス京ニ赴キ歸ル九月豊主母堂ノ忌終テ再ヒ名護屋ニ赴ク

テ二十五石
ナリシテ五千
石増シテ七千
五百石トスト
政春ノ古兵談
ニ見ユ

再考壽福子モ
トハ芳春夫人
ノ後役ノ女ナ
リ豐主厄幸誠
主ヲ國々へ使
トシテ在朝鮮
并名護屋在留
ノ大名へ衣服
洗濯ノ爲メニ
女ヲ遣スヘシ
ト爾ラシ、時
ニ衆女恐レテ
泣行カントイ
フモノナシ獨
壽福子行カシ
トテ文録元年
行キテ名護屋
ニテ檢孕翌春
三月歸リテ猿
千代公誕生ナ
リ
又一書ニ上木
新兵衛ハ朝倉
義景時代ノ越

前ノ郷人ナリ
同國白鬼女ノ
波ニテ金百兩
ヲ拾ヒ高札ヲ
建テ遺セルモ
ノヲ誤ケルニ
翌年ニ至リテ
金主ハ越後往
來ノ白布商人
ト相分リ金ヲ
復サントスル
ヲ商人上木ノ
無欲ニ感シテ
受ケス上木ハ
是非ニ違サン
トイフテ一定
セテ遂ニ所ノ
去行ノ判断ト
ナリ五十兩ヲ
分付スレハ
上木ハ此金ニ
テ一ノ法華寺
ヲ建立シ經王
寺ト號ス壽福
君ハ此ノ上木
カ女ナレハ金
澤ノ小立野ニ
モ經王寺ヲ建
ツルハ此山緣
北金澤經王寺
ハ初メハ越前

○微妙公生金澤城前田利秀下世

二年癸巳夏四月十六日 一本爲十二
月二十五日 微妙公金澤城ニ生レ乳名

ヲ猿千代ト稱ス 是レ系譜ニ因テ本文ヲ立ル也一書ニ此誕生ヲ文祿元年
トス非也按ルニ万治元年享年六十六ニテ薨スルナレハ

今年誕生タルコト尤明也一説ニ今年十一月二十五日肥前ノ名護屋ニテ生レ
玉フト云壽福子名護屋營中ニ從フコト往々雜記ニ見ユレハ此一説全ク舍ツ

ヘカラス參考スヘシ又一書ニ 公モト庶出タルニヨリ前田對馬ノ妻ハ 猿
千代公ノ姉ユヘ是ヘ密ニ囑付アリテ對馬方ニテ成人シ玉フトナリ蓋シ此

公幼穉タルト 生母ハ小幡氏 壽福院殿是也其實父ハ上木新兵衛也母ハ山
崎右京朝倉義景下ニテ
越前新庄ニ住ス 女也四女ヲ産ス壽福子

本保治右衛門ノ室栗田傳兵衛ノ室田邊助太夫ノ室是也上木死後小幡九兵衛
越中ノ推名ニ再嫁シ二男二女ヲ産ス嫡子ハ小幡右京次男ハ宮内其次ハ堀三郎

兵衛ノ室其次ハ九里覺右衛門ノ室是也但シ上木死後山崎氏壽福子ヲ初メ引
ツレテ小幡へ再嫁シ小幡ニテ鞠育セラレ、ユヘ小幡氏ト云ト也是即チ小幡

雅樂助系譜傳也此外三壺記青地カ系譜等ノ説是ト小異 九月朝鮮ニ於テ

アリ略ス三壺記ニ壽福子美容無雙特ニ仁慈深シトアリ 我軍大勝利ヲ得ルノ所へ明帝ヨリ巨軍ヲ發シ朝鮮ヲ援ヒ我兵

困苦ニ及フノ旨急船ヲ以テ告ケ來ル此時我 國祖豐主ニ固

ク乞テ曰ク身不肖トイヘトモ主君ニ代リ直チニ朝鮮ニ渡海

シ明兵ヲ舉テ鑿ニセント豐主其大志ニ感シ手書ヲ賜フ 其書
文ニ

曰ク今度ハ唐人數万騎人數出申由今度ハ貴所罷越我等名代トシテ唐四百餘

州伐隨可申旨望被申候義誠ニ手柄ノ被申分不初于今義ト乍申大慶申候然處

ニ彼唐人共佗言申人數トモ引入申由注進申越候間此度者先唐入指延可被申

候何事モ以而具ニ可申渡其心得ニ可有之候恐恐 九月二十一日 大岡判

羽柴筑 前守殿 既ニシテ明軍和ヲ乞ノ由重子テ告來ニ依テ事止ム十

一月 國祖休暇ヲ賜テ歸北アリ今年利秀朝鮮ニ從軍ノ所半

途ニシテ疾病シ因テ其將篠島織部軍ヲマトバテ歸越ス利秀

十二月十九日今石動城ニシテ下世ス享年二十有六也爲人勇

力武功ノ良將ト云 長湫略譜ニ天正十三年四月今石動ニ城ヲ築キ加州津
幡城ヨリ前田右近秀繼君ト嫡又次郎利秀ヲ置キ同年

經王寺ノ末寺
ナルカ後ニ妙
成寺ノ末寺ト
ナレリ

追考此時播磨
飛騨淺野輝正
毛利河内金森
法印村上周防
坂久太郎ナト
皆公ニ隨心
ナリ只伊達正
宗運ヲ兩端ニ
守リテ首級ス
公後ニ聞キ渠
我ニ哲恩ヲ得
シヲ公ニ思レテ
義志ナシトテ
怒ラセラルト
ナリ

秋秀繼君貴舟へ移リ利秀ノミ守ルト云云利秀嗣子ナク家絶フ按スルニ今石
動永傳寺ニ今秀繼君父子ノ位牌アリ利秀ハ末森運沼龍峯小矢部上州ノ松枝
武州ノ八王寺等ニテ戰功多シ系譜ニ文祿二年癸巳入朝鮮半途疾病飯國トア
リ一説ニ文祿二年從征島津義弘屬瑞龍公中途罹疾歸越中卒ト此説非ナリ
是ヨリ篠島織部ニ加祿シテ三千石 今石動ニ置セラル 是ヨリ篠島
在住シ寶永七年マテ凡百十
八年間ト云今ノ典膳ノ祖也

今夏五月五日名護屋ニ於テ 東照君衆中ノ者ト我將篠原
出羽守ノ奴ト汲水ヲ争ヒ是ヨリ事增長シ各類ヲ以テ驅馳
聚屯シ既ニ發難ニ及ハントス豊主勸解シ且營陣ヲ相遠サ
ク今年四月大明ノ使者沈惟敬并ニ徐一貫謝用梓共ニ名護
屋ニ來テ豊主ニ拜謁ス豊主悅ンテ即チ芻柴下總守勝雅ヲ
東照君及ヒ 公ノ所ニ遣シテ曰ク明ノ兩使ヲ饗スヘシト

因テ用梓ハ 東照君ノ營一貫ハ我 公ノ營ニ入ル五月兩
使各 東照君ト 公トノ營ニ在テ日々其饗應ヲ受ク九月
豊主秀頼君ノ生ル、ヲ歡ンテ曰ク朝鮮ノコト沈惟敬既ニ
和謀ヲ調フ軍旅ノ指麾ハ 東照君ト 公ト之ヲ決斷アル
ヘシト謂テ乃シ輕舸ニ乘リ大坂へ歸城ス 此一節豊臣譜ヲ証ス
然レトモ我舊記ニ
公八月名護屋ヨリ大坂ニ歸テセ
ラルト有テ吻合セス追考スヘシ 我 公十一月大坂ヨリ金澤城へ
飯ラセラル

○立太夫士履端早朝拜年儀 國祖昇進中納言前田安勝
君捐館

三年甲午春正月 公始テ卿太夫諸士履端早朝拜年ノ儀ヲ行

追考此改易三
人ノ内武部越
後其一人也越
後ハ元加州ノ
賊將タルカ後
國祖ニ仕ヘテ
五百石ヲ賜ハ
ル然ルニ今春
追放サレテ去
リテ小出大和
守吉英ニ仕フ
其子右馬允再
ヒ 微妙公ニ
五百石ニテ召
出サレ六代ノ
孫四郎兵衛ニ
至リテ明和九
年改易セラレ
テ絶祀セリ

フ 安勝君父子及ヒ長高島不破村井等ハ鷲眼百匹三千石ヨリ以下ハ五千匹小
將馬廻ハ卅匹其餘ハ廿匹禮錢ヲ献ストナリ中祿以下ノ士ハ紙子ヲ着シテ
禮ヲナストナリ古代質素ノ風俗思フヘシ且此時留守居ノ者或ハ代官等出仕
ナキ者二十人許アリ之ヲ糺明アリテ實病ハ其儘オカレ虛病ノ分二三其秩
ヲ放クレ其外十一人ノ名ヲ 公ノ居室ノ壁ニ記シ慣ラセラルトナリ又同二
日ニハ久シク見玉ハサル倍臣ニ拜年アルヘシトテ謁見アリ此時村井ノ臣小
林彌六左衛門屋後太右衛門へ絮袍各二領ヲ賜ヒ村井へ能州島八ヶ千石ヲ賜
ヒ且人持ノ内ノ家臣我等見知リタル者今ハ見ヘスト仰ラレケレハ人持ノ人
々各赤面スト此等ノコト 亞相公夜話録ニ見ユ景周這因ニ記ス或書ニ當
家ノ年寄人持馬廻ノ名目ハ織田家ニ在シ名目也ト云按ルニ人持ノ名目ハ天
正二十年六月秀次君軍法出令ノ第一條ニ見ユ當家ニテ人持ノ名目ノ顯然ク
ルハ此年頭ヲ始メトス此次ハ慶長三年伏見邸ニテ石川右馬介宮川與左衛門
交丹ノ時人持番奥村河内トアリ年寄ノ名目ハ 國祖遺誡ノ文ニ見ユ是家老
ハ老ニリ轉セル也老中大老ナトモ此類也家老ハ家令ニテ古キ名目也古へ親
王又臣下ニテモ一位二位ノ家令ハ朝廷ヨリ補セラレ位ヲモ賜ハル也馬廻ノ
稱ハ織田家ニ始ルト云ハ非也按スルニ永正六年將軍義植公ヨリ細川右京太
夫へノ教書中ニ 同月二十日 公甲冑ニ供スル鏡餅ヲ祝味シ玉
既ニ見ヘタリ

一書之ニ加半
田半兵衛ハ誤

也 富田大炊山崎彦右衛門北村三左衛門ノ四士ニモ次室ニテ
伴食ヲ命ス壽觴ハ村井ニ賜ヒ次室ノ四士へハ流觴也群臣五
士ノ伴食ニ撰出アルヲ羨ヤマサルハナシト云三月 公浪華
へ朝觀アリ夏四月八日豐主我 公邸 此邸ハ京ナル聚 へ光臨ス
此光臨ノ委曲 此時 公從三位權中納言ヲ拜ス我二臣太夫ヲ拜
下文ニ記ス 高畠定吉石見守ヲ拜シ中川光長武藏守ヲ拜ス按スルニ此中納言ニ説々ア
スリ寛永十八年 官へ上ル譜牒ニハ不經中納言慶長二年三月十一日任大納
言トアレハ是正徵ナレトモ中納言昇進ノコト必シモナキニ非ス乃此豐主光
臨ノ時中納言ニ叙任ノコト及ヒ中納言昇進泰内ノ時中山殿ニテ裝束暨ヒ梳
髮ノ所へ菊亭殿裝束ニテ御出而接ノ禮修レルコトナト 公ノ夜話録ニ見ユ
又豐主ヨリ 公へ江州ノ二邑ヲ賜ル目錄宛所ニモ中納言殿トアリ然レハ今
文祿三年四月八日ヨリ慶長二年三月十一日マテ四ヶ年ノ間ハ中納言タリト
見エタリ此昇進ノコトニヨリ景周數十回此條ヲ改竄シ最後ニ竟ニ此本説ニ
歸スル也又按ルニ 公此中納言ニ成リ玉フトキ 世子中將ニ進ミ玉フ成ヘ
シ 世子中將昇進ノコト諸記ニ見エス然レトモ慶長二年 世子參議ニ昇進

ノコト疑ヒナケレハ位次躡ユヘカラス若超任ナラハ其コト亦或ハ舊記ニ載スヘキニ其コト見ヘサルハ之ヲ脱スル成ルヘシ○今年 公坂藩ノ道石川郡海濱ニテ放鷹夜ニ入りテ着城トアリ此時供ノ小姓齊藤八兵衛ヲ宮腰ニテ篠原山羽ノ家臣切害スルコトアリ

今春ヨリ豊主京都聚樂城ヲ伏見ニ移シ隱居城トス京ノ聚

樂城ハ秀次君へ讓ラル二月一説爲三月二十一日 豊主和州芳野山ヲ遊

覽シ花ヲ賞ス 公從フ 國祖ノ詠歌五首アリ 花ノ願ト云題ニテ「サク花ト心ヲカクル一本心ヲカケシトアリ」 芳野山又來ン

春ヲ思ヒヤルコモ 不散花風ト云題ニテ「散ラサシト思フ櫻ノ花ノ技吉野ノ里ハ風モフカシナ 漉上花ヲ「散花ニ漉ノ白波交リテ雪カト峯ノ

雲ツカ、レル 神前花ヲ「千早振神ノ惠ミニ叶ヒテヤ今日三吉野ノ花ヲ見ルカナ 花祝ヲ「吉野山花ノ盛ノ久キニ君カ齡ハカキリアラシナ

月三日豊主紀州高野山ニ登リ青岩寺ヲ旅館トス 公亦從

フ 世本ニ高野ノ登山ヲ始トシ吉野ノ賞花ヲ後トスルアリ謬レリ 今春豊主自カラ猿樂ヲ禁中ニ

作ス 神君 國祖モ亦自カラ之ヲナス 事見徳川創業記 三月淺野長

此公... 在... 附錄ニ...

政 彈正 少弼 ニ因テ豊主ノ責臨ヲ乞フ四月八日 國祖ノ邸へ來

臨アリ 公卿國侯 聖護院准三后道澄、菊亭右大臣晴季、江戶大納言 東照君、大和、大納言秀長、勘修寺大納言晴豐、丹波中納言秀俊

中山大納言親綱、岐阜中納言秀信、日野大納言輝資、藤右衛門督永孝、備前宰相秀家、會津少將景勝、結城少將秀康、八幡山侍從高次、吉田侍從輝政、若狹侍從勝

俊郡上侍從貞通、大崎侍從正宗、佐竹侍從義宣、安房侍從見伊奈 相伴トシテ

侍從秀頼、東郷侍從秀一、以上二十二人也、或云共奉シ來ルト

至ル 嘉祝種々進上各差アリ 國祖ヨリ太刀長腰刀若良馬一匹鹿絹二百匹白銀千枚白毛絲二百斤絮袍五

十領内十領唐絨二十領白綾十領紅梅口筋十領摺箔也純子二十卷 瑞龍公ヨリ太刀一鞘駿馬一匹八講布二百端利政君ヨリ太刀一鞘良馬一匹杉原紙

十東生絹帷子十領右丹後少將細川越中守忠興披露之 盛饌海陵都鄙ノ良味ヲ極ム 太閤ノ配膳

替ハ松島侍從浦生氏郷、相作衆配膳ハ安城攝津守服部采女正、堀田圖書頭、河尻吧前守、椿子内匠頭、本多若狹守、片桐東市正、佐佐孫十郎、長東次郎、兵衛、真田

藏人頭、毛利豐前守、石川又十郎、星野新左衛門、池田備中守、松浦伊豫守、春田九兵衛、丹羽藤藏、伊藤長門守、村井長門守、上田左太郎、大岡勘平、小出大和守、石川

肥後守、大野彌市郎、田中帶刀、今枝勘右衛門、瀧川助九郎、矢田半右衛門、淺野長次郎、西屋喜兵衛、太田半次郎、安見甚七郎、白江善五郎、春田五平次、小島三介、余

語又三郎青木源三郎日比野久太郎建部彌吉永原彌左衛門薄田小四郎凡テ四十二人酒觴獻酬數回 太閤への酌ハ飛鳥井中將雅

庸手替ハ金山侍從忠政加酌ハ松任侍從長重手替ハ能登侍從利政也相伴ノ酌ハ溝口大炊介手替ハ尼子三郎左衛門加酌ハ本郷與七郎手替ハ池田彌右

衛門 也 我臣二十三人太閤へ拜謁 中川武藏守光重篠原出羽守一孝村井豐後守長賴前田對馬長種長九郎左衛

門連龍高山南坊長房青山與三吉次徳山五兵衛寺西宗與與村助右衛門永福不破彦三光昌片山内膳太田兵庫長知岡島帶刀一元山崎庄兵衛長鏡横山大

膳長知菊池十六郎村井左馬長次與村織部榮明富田大炊 シ土器盃ヲ賜重政木村三郎兵衛岡田長右衛門井上豐前也獻物各有差

ハル 細川忠興 舞二番 幸若八郎 猿樂五曲 高砂今田村源氏供 了テ

太閤黄昏ニ歸輿セララル 右ハ東山慈照院義政公渡御ノ古例ニ倣フト云四月六日太閤大坂ヲ出興アリ京ノ施藥院

へ入り夫ヨリ 公邸へ渡御也施藥院ヨリ 公邸マテ千二百間此間警衛トシテ二千五百人ヲ置也大和秀長丹波秀俊岐阜秀信監之凡ソ此日 公邸へ

至ル相伴衆ノ從者二百五十人餘皆奇膳ヲ賜フ○此時豐主三日逗留ト云説ハ非也又豐臣譜ニ此光臨ヲ天正十七年三月ニ係クルモ亦非也 此

饗アルヤ千利休 按スルニ利休ハ伊藤紹陽ノ門弟ニテ茶家ノ和尙ト稱ス舊ト泉州堺ノ町人與四郎ト云者也太閤ノ爲メニ家祿三

千石ニ至ル其七弟ト世ニ稱スルハ第一 瑞龍公第二蒲生氏郷第三細川三齋第四高山南坊第五古田織部第六織田有樂第七金森出雲守是也利休一子アリ道安ト云フ茶法皆傳授ナシテ病死也因テ利休死後太閤ヨリ古田織部へ和尙ノ号ヲ命ス古田ノ門弟ニ小堀遠江守アリ 大猷公又和尙ノ号ヲ之ニ命セラレ師匠トシ一万五千石ヲ賜フ 微妙 陽廣利次利 治ノ諸公皆此高弟也此事本文ニ預カラサントモコ、ニ贅附ス 光臨ノ三 年前ヨリ請殿諸器等造成ノ主使監驗ヲ爲スト云

○豐主賜江州二邑于 國祖且秩良射二百員

四年乙未三月六日金澤ヨリ京師へ上下ノ寄宿地トシテ江州

高島郡善積庄内今津弘川二邑ヲ以テ一千八百六十四石五斗

七升ヲ秀吉公ヨリ 國祖へ賜フ 太閤朱印ノ書ニ近江國高島郡今津西濱九百二十八石四升同弘川内九

百三十六石五斗三升都合千八百六十四石五斗七升之事上下之爲泊所令扶助訖全可領知者也文祿三月六日 加賀中納言トノヘトアリ世ニ之ヲ芳春夫人へ化粧田トシテ太閤ヨリ賜ルト云者此朱印ノ文義ニハ背ケトモ芳春君逝去ノ後 微妙公ヨリ 台徳公へ上ラレ元和五年再ヒ 官ヨリ 微妙

同十九年 利長公薨後御城ヨリ今ノ御旅屋ニ建ラル 御殿ハ此書院也給ハ
長谷川等伯トアリ景周又按ルニ 國祖へ賜ル者ハ聚樂ノ殿也ト云事人々傳
言スレトモ此事非也聚樂ハ京地ニテ秀次君生害ノ後ハ廢城トナリ今ハ聚樂
ノ町名ノミ殘ル也其樓閣ハ爰カシコニ分レテ今モ寺閣ナトニ殘リ存スルモ
アリ 淺野幸長 左京太夫也彈正長政ノ嫡男ナ
ト云 罪ヲ得我 公ノ救護

ニ因テ能登口郡津向 今モ此邑名アレトモ 流人ヲ置地ニ非ス へ蟄居シケレハ幸長

大ニ喜フ 今年秀次君高野へ退去ニヨリ其居室ノ遺物ヲ改ムルコ幸長秀次
君へ懇志ノ判書アリ依テ太閤是ヲ憤ラセラレ淺野幸長成敗ニ究

ル然レトモ是ハ幸長ノ先年追放セル家臣右筆磯谷ト云者ヲ石田三成介抱シ
彼ニカ、セ僞判ヲリセ置キシモノ也因テ 國祖太閤へ強テ申解スルヲ以テ

長政ハ領分ノ甲州幸長ハ 國祖ノ縁者タルヲ以テ能州へ蟄居ス此後 國祖
高麗陣ノトキ幸長壯將ナレハ一功立サセラルヘキ由太閤へ進メ玉ヒ即チ出

軍アル處慶長二年所々ニテ合戦殊ニ蔚山ノ嬰城ノ大功ヲ以テ關原役後賜紀
州号紀伊守詳在長明筆記故ニ淺野家ハ我 公ノ庇ハ死生不可忘ノ盟言アリ

云ト

○國祖除阿尾城

慶長元年丙申越中阿尾一萬石ノ主菊池伊豆卒ス其男大學幼
シ其祖父右衛門入道ハ向キニ阿尾ヲ辭シテ城州紫野へ退去
スルユヘ 公阿尾ノ地ヲ除キ大學へ別ニ采地千五百石ヲ賜
ハル 即今ノ大
學ノ祖

今秋八月二十九日明ノ遊撃將軍沈惟敬伏見ニ來ル豐主ノ
命ニテ 公ノ邸へ迎へテ日々之ヲ饗應ス 按ルニ 公ノ伏見ノ
邸ハモト秀次君ノ遺

館ナレハ宏厯ナルユヘナラン遊撃ヲ 公邸ニ置セララル 九月二日遊撃
間ノコトハ 公ノ夜話録中所々ニ出ツ就テ見ルヘシ

豐主ニ謁見ス 此時ノ次第儀式 時ニ我四臣太夫ヲ拜ス 奥村織部
等詳于豐臣譜 榮明河内

守ヲ拜シ富田大炊重政下野守ヲ拜シ後改越 木村三郎兵衛土佐守ヲ拜
シ岡田源太左衛門丹後守ヲ拜ス此時前ノ六員ヲ併セ十太夫並列ス 冬十

月 一作文祿 豐主伏見ノ河濱ニ 喫茗室ヲ造興シ 公暨ヒ 世
三年非也

子北國ノ土丁ヲシテ土囊ヲ以テ宇治川ヲ堰出シ地形ヲ作

ラシム長連龍之ニ監タリ或云此事明年丁酉ニ在トス諸記不一也相傳此時我公自カラ臣齊藤刑部及ヒ長九

郎左衛門家臣ノ六十歳許ナル鈴木某ト共ニ草畚ヲ擔フテ土塊ヲ搬運シ玉

ツ小君是ヲ聞キ戯リテ曰ク生民以來大納言ノ荷擔セシヲ聞ズト公モ亦

云古往今來寡人獨ナラント對ヘ玉フト也豐主此勞ヲ見大ニ公ノ質實ヲ

感賞スト云三壺記ニ此時加州ヨリ三千五百ノ人歩上リ落成ノ日公ソノ

下邸ノ河邊ノ水溜且路上ニ土ヲ盛セ酒ヲ諸人歩ニ賜ヒ背門ノ坂上ヨリ大

音ニテ諸人ノ勞ヲ賞セラルレハ皆雀躍ス此時普請ノ奉行ハ野村勘兵衛前

田加右衛門宮川與左衛門北島庄左衛門トアリ

○國祖任大納言准清華 世子任參議溝口秀勝村上義明

移越後山口宗永入大聖寺丹羽長重移小松

二年丁酉三月十三日藩翰譜作 國祖大納言ニ任シ清華ニ准ス

此事 官へ上ル譜牒ニ明文アリ其他本藩錄前田創業記三州領分次第考等ニ

モ皆今年トナス藩翰譜ニハ慶長元年トシ烈祖成績ニハ公卿補任秀吉譜ヲ引

補云按推字
城當削下大
可模

テ慶長三年四月二十日トス青地禮幹曰接村井氏夜話云文祿三年四月八日
公享太閤於其第時拜權中納言臣高島織部拜石見守中川清六拜武藏守頃歲
德川公暨毛利秀元上杉景勝浮田秀家蒲生氏郷等亦相次有享燕之儀景勝亦拜
權中納言會殿中位次以景勝拜參議在公前之故公坐次景勝公色不喜太
閤聞而駭焉乃召尙席前田玄以問之玄以實告太閤詰曰盍臨時告之會明日享
毛利氏乃使彈正忠淺野長政至公邸謝且拜權大納言公即夜造朝拜命之辱
矣臣與村永福拜伊豫守神谷左近拜信濃守併村井篠原兩太夫俱命太夫六員云
是村井氏說如此而與村氏年譜其餘記載皆以公拜大納言爲慶長二年三月事
距于今茲凡四年武德大成記云慶長三年戊戌四月利家拜從二位大納言而却
有慶長元年丙申九月二日太閤享大明冊使楊方亭沈惟敬自坐上壇中央使兩冊
使坐下壇右使內府家康大納言利家暨中納言等七人坐下壇左云云之語是
慶長元年既爲大納言亦明矣何有至三年復任大納言哉諸說皆不足證當以村井
氏說爲據焉景周按禮幹ノ論斷甚々明也但シ是ニテハ公ノ中納言ナル儘ニ
一日ノニ夜話錄中中納言ノ事ニ付菊亭殿ノ事暨ヒ中納言ニ付テ云者二三所
ニ及フ其他江州ノ二邑ヲ賜ル書ノ宛名ニ中納言ナルヲ併考スルニ儘ニ一日
中ノ事トハ見ヘス又毛利氏へ公ノ到ル事夜話ノ錄スル所ノ明日必ス卯月
八日ノ明日トモ見ヘサレハ取カクシ景周之ヲ今年ト本 九月二十八日
文ニ立ルハ專ラ寛永ノ譜牒ノ官へ上ル說ヲ取ナリ

世子參議ニ任ス 藩翰譜ニ公卿補任ヲ引テ慶長二年九月二十八日從四位
下前田利勝爲參議ト明文アリ武德大成記ニモ今年九月

伏見ニテ參議ニ任ストアリ我諸記却テ此ヲ脱執ス有澤武貞ハ慶長二年 瑞龍公中納言ニ任ストスレトモ年譜系譜等明年戊戌ニ中納言ニ昇進スルコトヲ係レハ疑ラクハ武貞ノ中納言ト云ハ此參議昇進ノ誤ナラン然ラサレハ越階也又 世子中將拜任ノ事諸記脱之按スルニ天正十八年少將ニ任シ今年參議ニ任スルナレハ 國祖文祿三年參議昇進ノ時 世子中將ト成リ玉フナラン

冬十月 世子越中守山ヨリ富山城へ徙ラセラル 是守山高聳

風威猛烈ナルヲ避クル也守山在城ノ間凡十三年 天正十三年自松任移守山玉

フ也昆目抄ニハ文祿三年徒富 是歲 藩翰譜 加州大聖寺城主溝口秀勝山在守山九年トアリ此說非也 爲明年

傳詳天正十一年秀勝或作宣勝非也前車後語集ニ宣勝ハ秀勝ノ子トス秀勝ハ彦左衛門勝政ノ子也若州ニテ六万石賜リテアリシヲ天正十一年加州大聖寺

ニ移シ置カル天正十二年丹羽氏越加ノ封地ヲ除カレシヨリ越前北庄ノ城主堀秀政久太郎ト號ス天正十三年ヨリ與力トナリシカ天正十八年秀政相州小田原ノ

役ニ病死其子秀治今年越後一國并奥州會津三十萬石ヲ賜ハリテ越後 八越へ移ルニ及ヒテ村上義明ト同ク從テ移ル北庄ニハ青木一矩ヲ置ク

後新發田 一作 柴田 へ移リ小松城主村上義明 傳ハ天正八年暨ヒ十一年ニアリ義明今年本庄へ移リ後

慶長十九年坐大久保石見事家滅スト城主記ニアリ藩翰譜ニハ元和二年徳川上総介殿配流ノ時義明モ所領沒収トアリ關原記大全ニ義明ヲ作頼重ハ非也今ノ本藩村上九左衛門ノ家ハ周防ノ後ニ 越後本庄へ移ル豊主大聖寺非ス丹波ノ地士次郎左衛門ノ末孫ト云

城へハ山口宗永父子 宗永ハ或ハ正弘又宗久又宗和ニ作ル通名ハ玄蕃ト云武家勳功記ニハ玄蕃頭正弘初名ハ正永其子

右京亮修弘トアリ或ハ右京トモアリ山口本姓ハ多々良也周防大内介ノ族ニシテ防州ニアリ義隆滅亡ノ後秀吉公ニ仕へ秀秋ノ後見トナル秀秋行跡ヨカ

ラス正弘諫盡秀吉公ノ旗本ニ歸リ後越前ニテ賜北庄城トアリ然レトモ宗永ニ賜北庄事見アヲラス宗永ハ大聖寺ニテ七萬石ヲ賜ハル或云六万三千石ニ

テ内一萬石ハ右京領之同居ストアリ又一書ニ戸次右近子ナク領分ニ空主トナリシカハ山口ヲ朝上ト爲シ賜六萬石置之トイヘリ此說非也戸次ノ代リハ

拜郷也既ニ天正八年ニ見ユ見聞集ニハ山口玄蕃初メ秀吉公ノ命ニテ筑前秀秋ニ從ヒ西國ニ赴キ筑前一國險地ヲナシ領納三十萬石ノ高ヲ三十七万八千

五百石ト竿ヲ入ルヨリテ國民之ヲ疎ム其後大聖寺ニ 小松城へハ丹羽長來ヲ又賦歛ヲ重クシ金銀ヲ貪リタルハ領民窮スト云

重 傳詳天正十五年長重天正十五年自若州移加州松任今年自松任移小松松任四万石ニ此ヲヒ能美郎ニテ八万石ヲ加増セラレ併テ十二万石ヲ領シ叙加

賀守住小松城四年也先是文祿四年 ヲ徙シ置カル 此時豊主ヨリ家老坂井長重任參議叙從三位事見藩翰譜 與右衛門江口三郎左衛

門へモ各一
万石ヲ賜フ

今秋九月 日不詳前田創業記爲四月八日非也 豐主 公ノ伏見ノ邸

へ照臨シ豐筵方文ノ華錯ヲ儲ク其伴食トシテ至ルモノ十

人許ト云 東照君金森法印淺野彈正浦生飛騨織田有樂前波半入 興闌

ナルニ及ンテ豐主炙治ヲ始メラレ各之ニ倣フ豐主 公邸

ニ四五日逗留アツテ歸輿也 炙治ヲ上ルハ 公ノ小將神谷信濃守

アリ信濃ハ有樂へ勘十郎ハ左近へ金左衛門ハ半入へ勘七ハ線香ヲ出スト

ト諸舊記濁混ス今永貞 公ノ夜話録ノ頭書ニ依テ今年ト定ム遐按フルニ

寛永辛巳ノ公譜ニ秀吉數過利家館春遇尤厚其所賜之茶壺 未茶碗 祐子腰物

三池小仙太切刃 貞宗水ニ降雲 皆重器也其餘猶多云云此ニ因レハ渡御猶此二度ノミナラサル

カ交關白秀次君伏見ノ 公邸へ見回トシテ來臨ノ夕條モ夜話録ニ見ユ年

月シレス同録ニ關白渡御ノ時鹿 毛馬拜領トアルハ此時成ヘシ

○國祖養老 二世瑞龍公嗣立轉任中納言

三年戊戌夏四月 公草津入湯 按ルニ一本堂藥選ニ上野州草津ノ温

久佐津ノ湯上州ノ内ナリ或ハ九相津又草津トモカク信州追分ヨリ上方筋ノ

本道アリ關東ノ方へハ道幾筋モアリ此入湯ノ時 瑞龍公ヨリ新ニ越中富山

ニ築城ノ繩張ヲ 國祖へ願ヒ玉ヘトモ領掌シ玉ハス富山城ヲ過キ野中ニ假

館ヲ命シ次リ玉ヲ事又堀久太郎越後春日山へ得替ノ時ニテ 國祖直ニ訪ヒ

玉ヲ處堀氏既ヒ其饗應目ヲ驚セシトアリ又此堀氏得替ニヨリ金澤へ本柄ト

云者ヲ以テ金子五十枚借ニ來リ即チ遣サル事又 内府伏見ヨリ神谷善左衛

門ヲ以テ時衣三十夜衣二蒲團二鮮肴等進セシレ 國祖ヨリ神谷へ金打蚊ノ

脇刺及ヒ道服ヲ賜ハルコト又今春七郎鐵科伊白召シ供セラルコト皆 國祖

夜話録ニ見ユ○又因ニ記ス一書ニ飛州乘鞍ケ嶽ノ麓ニカマト、云温泉アリ

瑞龍公入湯シ玉ヲ其時高原ト云所へカ、リ通ラセラル其道ノイマリト云所

ノ八右衛門方ニ一宿ナリセラル道甚ク險難ノ由聞玉テ曰フハ如此切所ハ夜

行ニ如クハナシトテ夜中山路ヲ通行アリト也高原ニ於テ江馬四郎ノ舊所ヲ

尋テ見玉ヒ高山へハ使士ヲ遣ハサルト云此 歸路今石動ニ入城アリ

事金森法印ノ代ト有テ年号等ナシ他日可考 長明筆記ニハ入城トハナク今石

葉選香川修
卷作

鞆藥餘考卷之十二

四十一

公時ニ貴 携へ奉り來りテ始テ 公ニ謁見ヲ乞フ 長明筆記ニ

十郎ニ命シテ金打蛟與付ヲ進セラルトアリ 猿千代公 十日 公養老有

テ加州二郡 石川 暨ヒ 氷見郡 射水 能州 鹿島一萬 ナ養老領トス 是即

所載也武貞考ニハ此コトヲ二年丁酉ニ係ケ其時越中一國ハ 瑞龍公へ能州

一國ハ利政君へ讓與トス按ルニ此説長明筆記ニ 國祖能登一國ヲ利政君へ

授與ノ時村井豐後等ヲ乞セラル箇條アリ是等ニ據ルニ似クレトモ 國祖遺

誠ノ文ニ據ルトキハ讓國ハ慶長四年也系譜武德大成記藩翰譜ニモ四年ニ係

レハ四年ヲ証トセンカ然レトモ寬永十八年 官へ上ル譜牒ニハ 瑞龍公慶

長三年爲家督トアレハ景周ハ之ヲ証トシテ他説ヲ取ラサルナリ武貞三州領

分考ニハ養老領石川河北二郡拜領トマラ在テ氷見郡等ヲ脫ス誤 瑞龍公

レリ遺誠ノ文ニハ石川河北氷見郡及ヒ能州一萬五千石トアリ

嗣立シ 寬永ノ譜牒ニ明文アリ武貞考等ニ此嗣立 越中四郡能登四郡 但

口郡一萬五千石 襲封アリテ 武德大成記ニ 利長嗣立加越能繼テ領スト

國祖養老領ハ除之 襲封アリテ アレトモ是ハ慶長五年後ノコトニテ誤也此

時石川河北ハ 國祖ノ養老領ニシテ而モ此内松任四萬石丹羽長重ノ

領也能美モ長重ノ領ニテ江沼ハ山口宗永ノ領也其詳記本封叙次考 從三

位權中納言ニ轉任也 武貞考ニハ之ヲ二年丁酉ニ繫ケ其時羽柴肥前守

ト改稱ストアリ然レトモ系譜年譜公卿補任烈祖

成績秀吉譜藩翰譜皆今

年ニ係ク故ニ景周証之

今春三月十五日 三益記ニ文祿四年三 月十五日トス非也 豐主醍醐ニ 此時賞花ノ地ヲ

花ヲ賞ス 國祖從之此遊宴ニ豐主ノ寵妾京極方ト 江州佐

末流京極長 政所ト 秀頼君ノ母 孟行ノ後先ヲ爭ヒ大宴冷コ 國

祖是ヲ支吾スト云 此時我 公暨ヒ諸大名來會ス勇名錄云此時諸大

持ヲ立關ヨリ下へ御スニヨリ皆下ル 前田利家ノ刀持富田大炊久ク坐ス

云 秋八月十八日豊主伏見城ニ薨去ス春秋六十有三 長明筆記
此日

公本丸内へ入玉フ時小刀ヲ袋ニ入テ村井勘十郎ニ持セ玉ヒ 遺言シテ
病中

公ニ命シテ列侯ヲ 國祖ノ邸 公ヲ以テ秀頼君ヲ輔ケテ政ヲ攝
ニ集メテ誓書ヲナサシムル也

セシム 公遺命ニヨリ其邸ニテ諸侯へ豊主ノ遺物ヲ分與ス而シテ
公

ノ刀ヲ賜ハルトナリ○冬十月 國祖 東照公ト豊主ノ遺命ニ依テ淺野長

政石田三成ヲ筑紫ニ至ラシメ朝鮮渡海ノ諸兵ヲ尽ク本邦へ引トラシム一

○國祖薨有遺書 世子襲封利政君入七尾

四年己亥閏三月三日 辰時 國祖攝津大阪城ノ高邸ニテ薨シ玉

フ春秋六十有二 一本作六十有三○烈祖成績云 神祖在伏見第召徳山五
兵衛問曰利家臨終何言對曰利家深以不見秀頼公成立而

死爲憾嗔目大呼而瞑 神祖流涕感其志加藤清正嘗語人曰利家晚年頗志於學
太閤薨後招宇喜田秀家淺野幸長及余語次舉臨大節而不可奪也之章余當時目

校合雜記ノ一
ニ云 公薨後
公ノ臣徳山五
兵衛伏見へ來
ルナ 内府側
へ召シ 大納
言病革第繼ノ
際遺言如何ト
問玉フニ徳山
五兵衛ニ 利家

無一丁不擇其義近年讀論語頗通 曉在今之世不事斯語者恐陷不義 公去ル三月二十一日疾ヲ扶ケテ

小君 高島 氏 ニ 紙筆ヲ把シメ遺誠十有一條ヲ制シテ 世子ニ貽

ラセ玉フ也

其文曰 景周謹曰此遺文諸舊記ニ見ユ然レトモ其文甚タ異同アリ一
定セズ頃者有澤永貞ノ校本ヲ得テ之ヲ讀ムニ世本ニ比スレ

ハ較正シキニ似タリトイヘトモ亦疑議スヘキ所少カラス臣其謬妄ヲ
恐ル然レトモ 君上ノ手澤私ニ改竄折衷スヘキニ非レハ姑ク永貞本

ヲ取テ原文トシ世本ノ異文ヲ字下ニ
記シ他日正本ヲ獲ンコトヲ跋ツナリ

我等煩瀾 一無 爾々無之候間近々與存候 一無與存
候三字 相果候者

長持ニ入レ金澤へ下シ野田山ニ塚ヲツカセ可被申候則

一無可以 我等死骸ト一度 度一
作所 女トモ加賀へ下シ可被申

候專 一無
候

其サニ身後ノ
コトヲ嫡男利
長ニ遺囑ス其
時空芳春院枕
頭ニアリテ泣
テ曰君少壯ヨ
リ戰ヲ經テコ
ト數十度也タ
トヒ手自ラ刀
槍ヲ持シテ殺
サストモ武臣
ニ命シテ人ヲ
殺スト算フ可
ラス然レハ其
罪業ノ罪ヒ恐
ル可シ仍テ妻
姫帷子ヲ遺囑
ニ用ヒント欲
ストアレハ利
家傳笑シテ曰
ク我卿世ニ生
レ人ヲ殺セヒ
一人モ故ナキ
者ヲ殺サス又
人ヲ助ケル
計多シサレハ
地獄ニ至リ牛
頭馬頭等阿責
スル我カ恩ヲ
得ル勇士ノ氣

之一作候能州口一作郡一萬五千石孫四郎へ遣之候事

一判金千枚脇指三腰刀五腰札ヲ付置候孫四郎ニ遣之候間

御渡可有之候其外遺物ニ遣候金銀申置候コトク可被遣

候其外一々日記ニシテ不殘利長へ進之一作遣之候事

一金澤ニ有之金銀諸道具是又此間挾入日記ニノ四字何モ其方へ進之一

之候也然者一無也然者三字而有間字三年加州へ下申義無用ニ候其内

何トソ一作將アキ可申事

一兄弟ニ申置候第一合戰ノ刻敵ノ畔キリ成トモ踏出シ尤

ニ存候他國ヨリ被押込一作自國候者草此下一ノ陰ニテモ尤

ト存間敷候跡々一作信長公小人數ノ時ヨリ何時モ其故

モ三字一作御國内ニテ合戰被成タルコトナシ一作敵國へ

踏入度々利ヲ被一此下有為字得候事

一奉公人ノ義ハ早二十年ホト召仕候者其家ノ作法能存候

間本座者同前ニ候利家人數佐々内藏助ト取合ノ刻又ハ

關東松枝八王寺囃ニイタシ又乘崩シ候時分モ新坐者ヲ

聞及過分ノ知行遣シ呼寄候得共本坐者ヲ越事我等家ニ

不限 信長公尾張一國御手ニ入候刻ヨリ本坐者新坐一作

新參ニ被越此間有ル二字事ナシ万事ニ付テ本坐ヲ捨ル事可爲

越度候人ハ出來不出來ハアル者ニテ候間ハヤ其方ハ三

ヶ國ノ主候ノ間万事心持大事候近所ニ依怙ヒイキ無此一

下有者ヲ四五人モ誓紙ヲサセ被召仕候テ外様ナリトモ

家久敷者ハ聞立呼出被召仕候者被見立被召仕候者被見立一作被召仕候テ被見

尤ニ候其上新坐者ハ我身威勢ノ時者奉公仕者ニ候自然

手前惡キ時一作時分ハ其身ノカタツキヲ本トシテ結句表裏

ヲ致ス者ニ候又本坐者ハ日頃主人へ對シ不足ヲ存候者

ニテモ左様ノ時一作時分ハ其身ノ爲ヲ存不遁者ナリ此義ハ

不及申候 信長公御遠行ノ刻安土ヨリ其方内儀ヲ引連

被逃刻路次ニテ本坐新坐ノ覺可有之候其心持一作心得肝要

ノ事

一 武道ハカリヲ本トスル事有間敷候有間敷一作無用 文武二道ノ侍

稀ナル間分別位能者ヲ見立聞立ケ様一作左様ノ者ハ新坐ニ

テモ情ヲ懸ラレ召仕一作情ヲ懸被召仕不苦候此三字一作尤候我等モ一代本

坐ニ爲仕置合戦ノ刻ハ先手ヲサセ候得共終ニ越度取ラ

ス候第一諸侍身上成兼一無兼字候様ニ痛被中間敷事一作痛ハリ可被中

事

一 長九郎左衛門高山南坊世上一作世間ヲセス我ヲ一人ヲ守リ

律義人候ノ間少充茶代ヲモ一無モ字遣シ情ヲ懸ラレ一懸下ニ置レノ字

ア可然存候片山伊賀事一本事下ニ主ノ二字アリ身上ヨリ大氣ヲ本ト

仕者候ノ間自然ノ刻ハ一ニノ刻ハノ三字ナシ謀反スル事可有之候言

葉ニテ念頃ノ體ヲ致シ一作被致油斷有間敷候徳山五兵衛世

上ヲ致シ國主共ト一作我ヲ影ヲ持知人一作ニ成候ト聞

及候此間一揆入然モ二字我ヲ存生ノ間ハ惡心ヲ致一作シ候テハ足

ノ立トモ有間敷候主分別立ナル者ニテ候間時分ヲ待在

之候ト見付候條我ヲ相果候ハ、必表裏ヲ企可申候間左

様ノ仕置尤存候山崎長門善者ニテ候越中取合ノ刻モ鳥

越ニテ能候然共意地惡敷片ムキナル武邊一作片クナシキ武者ニ候

間三十一無十字四十ノ頭可然候大ナル大將御無用之事一作無用

候事

一村井豊後奥村伊豫事子共ニ家ヲ渡シ致隱居今程樂ヲサ

セ置候然共相果候ハ、彌情ヲ懸ラレ髮ヲモソラセ父母

一無父母二字而作髮ヲモソラセ不被中祝儀祝儀ナトノ刻モ此兩人家ノ老一作年寄ニ

候ノ間召仕尤候其上大事ノ合戰ノ刻モ右兩人ノ者一作ニ

二字左様ノ事モ仕付タル者候ノ間人數千ホト充預ケ前

後ヲ爲守可被申候伊豫一頃我等ト中タカヒニテ致牢人

在之候一作中ツカヒ致シ有之時越前義景陣ノ刻ハヤキ首ヲ取參候間

其時我等召置其後内藏助ト取合ノ時分末森ヲ預置候得

ハ持濟シ忠節仕一作候關東陣ノ刻ハ彼等ニモ先陣ヲ申

付候ノ處無越度仕濟候豊後ハ江州金賀森一作ト云所ニ

テ佐久間玄蕃ト一所ニ有合一番乘仕候其上能首取 信

長公へ懸御目候大坂合戰合戰一作陣ノ刻ハ我ヲ傍ニテ鎗ヲ突

致手柄候長篠一作柳ケ瀬合戦ノ刻ハ我等ト此間ニ目前ニテノ四字ヲ挿入ス致太

刀打候名有者ノ首ヲ取候此義モ常々其方へ語申候越中

佐々内藏助ト取合ノ時分ハ末森ノ後卷先手ヲサセ又ハ

蓮沼ヲ燒候刻モ度々先陣ヲ申付候處貴殿如存知存上一度有被字

々致手柄忠節ヲ仕者ニ候別シテ此間一挿入此者二字情ヲ懸尤候岡

田長右衛門事算用ナトサセ候テ能奉公人ニ候間主分限

ニ過候ト貴殿モ可被存候得共是モナシミノ旨ニ候間隱

居分二千石爲取候但此者貴殿奉公振御覽候テ目懸フリ

ハ其方分別次第ニ候次ニ青山佐渡魚津一作小津ヲ預置候此

者律義人ニ候此下一有間字彌情ヲ被懸尤ニ候候上一有存字神谷信濃方へ

宗半娘一作姪可遣カトオシヤウ一作内セウ景周謹按オシヤウハ宗半妻第ニ公ノ名粧音ノ字也詳系

譜申候貴殿分別次第ニ候

右條々心盡一作心惡候得トモ口上ニハ跡先忘候間書付進之

候万事我ヲ相果候ハ、心持肝要ニテニテ一作候間如斯候以上

慶長四年三月二十一日 ナクセンノ守一作筑前利家判

羽柴肥前守殿

右遺命ヲ以テ薨後遺骸ヲ加賀へ下シ此時瑞龍利政二公共大坂ニ残り玉フ同四月

八日金澤ニ於テ葬禮ノ儀了テ即チ城南ノ野端山端今作田ニ歸寢

ス

後陽成帝 勅シテ從一位ヲ賜フ故ニ 高德院殿前亞相贈一

位挑雲淨見大居士ト謚ス

按ルニ 公天正九年能登入國ツリシヨリ今年マテ凡十九年 公ノ遺言ノ如ク遺骸ヲ長

持ニ收メ閏三月四日神谷信濃篠原出羽橋本惣右衛門等供護シテ加州へ下ス村井豐後與村伊豫ハ遺言ニテ上方ニ在テ 瑞龍公ヲ補佐ス十日許過テ村井

勘十郎岡田長右衛門又夫ヨリ五六日ヲ經テ 瑞龍公脇田主水今井左太夫其外四五輩ニ命シテ金澤へ返サセラル是ハ皆 瑞龍公ノ者ユヘ憐ミテナリ

葬式ニ勘十郎ハ太刀出羽ハ位牌香ハ竹田宮内一作竹内天蓋ハ信濃 瑞龍公ノ名代ハ前田對馬利政君ノ名代ハ脇田善左衛門也導師ハ寶圓寺徐芸和尚也又遺

言ニテ出羽 信濃刺髮ス 景周謹按ルニ凡ソ 公ノ天質篤行愨實義ヲ見テ進

ニ信ヲ履ミ仁ニ勇ミ驕ラス吝カナラス敬ヲ上ニ盡シ恤ヲ下

ニ厚クス戰國數百年間前後 公ノ如キ英邁賢明ノ主ヲ見ス

諒ニ皇天其令德ヲ祐テ福祚ヲ將來無疆ニ流ス者易ニ所謂積

善ノ餘慶疑フ可カラス時ニ小君剃髮アツテ芳春院ト號ス 芳

君初ノ名ハ松ト云按スルニ高畠左京太夫或云甲斐守ノ女ニシテ石見守定吉ノ姑也一説ニ土方雄久ノ始ナリト云信長公ノ同胞篠原万阿彌一作万一ノ女ト云ハ非カ

帝考徳山譜ニ
五兵衛秀現慶
長五年家康公
ニ仕ヘ十一月
卒ストアリ然
レハ五兵衛今
年御當家ナ出
奔シ明年ヨリ
幕府ヘ仕ルナ
ルヘシ秀現ハ
即秀則ナリ

然レモ 松雲公ノ夜話録ニ芳春君ノ父ハ信長公ノ弓頭篠原主計也トアリ參考スヘシ傳ニ夫人賢貞ニノ内助多シト云又一書ニ高畠左京太夫ハ尾州山田

郡高畠ノ城主ニテ信長公ニ隨身ス其子モ亦左京太夫ト云此人ニ六子アリ嫡子左門ト云其次芳春君也此外弟妹四人アリ左門ノ嫡子織部ト云石見守貞吉

是也高畠氏ノ元祖ハ鎌倉ノ住士前田右衛門吉雄字徳二其子斯波家ノ臣高畠左京太夫吉邦文明九年卒其子信長公ノ臣左京太夫直吉文龜元年卒其子信長公ノ臣左門吉光大

十七年 其子石見守定吉ト高畠五郎兵衛ノ譜ニアリ○閏三月十日 瑞龍公遺命ヲ奉シテ大坂一作金澤ニ於テ石川左源太松田四郎左衛門ヲシテ片山伊賀ヲ殺ス

徳山五兵衛之ヲ聞テ出奔ス按スルニ是ヨリ 幕府ニ仕フルカ岡島備中一元モ越後へ出奔シ堀秀治ニ任ツ一元ノ妻ハ伊賀女ナレハ也一元後ニ召返サル

瑞龍公 是以下 公ト單稱ス 中川武藏村井豐後ヲ浪華邸ニ殘シ

置八月二十八日浪花ヲ發シ金澤ニ還城也利政君能州ニ守ト

シテ七尾ニ入城ス 景周按スルニ 瑞龍公越中利政君へ能州分與ノコト

故ニ景周初メニハ有澤武貞ノ考記ニ從ヒ慶長二年ヲ以テ讓ラセラルト本文ニ立ツ然レトモ其後改竄數々ヒニ及ヒ一定スルコトヲ得ス竟ニ 國祖遺誠

ニ依テ今年ヲ証トス青地禮幹ノ系譜モ此遺誠ノ文ヲ証シタルニヤ今年トス其詳註ハ天正十六年慶長二年ニ載ス參考スヘシ又慶長二年能登一國ヲ以テ

利政君ニ分與ト武貞考ニ見ユ然レトモ遺誠ノ文ニ因ルトキハ能州口郡一萬五千石也左レハ羽鳳珠ノ三郡ハ勿論鹿島モ利政君領ナリ一萬五千石ノ外ハ瑞龍公ノ領也長連龍ノ鹿島半郡ハアレントモ是 公ノ封祿高ノ内ナルヘシ武德大成記ニ 公嗣立加賀能登越中三州ヲ繼領スト云ハ是 國祖薨後ノ事ト混スト見ユ遺誠ノ文ニ 瑞竜公ヲ指テハヤ其方ハ三ヶ國ノ主ニ候ト曰フハ命ニ違フニ似タリトイヘトモ戰國且暮變態ノ風其時世ノ可否後世守株ノ見ヲ以テ一概スヘカラス○青地禮幹所撰ノ系譜ニ利政君嘗拜從四位侍從兼能登守轉少將トアリ按ルニ此少將ト云コト妄誕也桃雲寺牌面ニモ不見其上享保四年 松雲公少將ノコト御家錄ニナキヲ以テ前田近江守へ御尋ノ處家傳ニモ無之因テ中村典膳青地ニ問之ニ其答 不分明少將拜任ナキコトニ一定スト云

今春正月秀頼君伏見城ヨリ大坂城へ移ル我 國祖モ大坂城ニ入り 世子ハ伏見城ニ居玉フ此月下旬我 公條牒十 一事ヲ 此條事ノ文傳ラズ但シ此條中 内府隱居アルヘキ旨アルコト家 忠日記ニ見ユサレハ 内府江戶へ早々隱居ノコト今年八月マテ 指延玉ハリタキ由 國祖へ頼マセラル、コト長明筆記ニ在リ 東照大君ニ呈シ 大君許諾ア

家忠日記二十
九日トス此月
ハ六ナリ

源公 公ノ條事ヲ許諾アルヲ本多忠勝井伊直政等怒リシカハ源曰公リ 利家存命中取合ニ及ハ大事ト此 國祖ヨリノ十一條ハ徳山五兵衛村井 豊後奥村伊豫三人ヲ名代トシテ 内府へ遣サシ有間法印淺野彈正ヲシテ 之ヲ上ラシム此時 内府返答異義アラハ 國祖淀橋本マテ秀頼君ノ名代 トシテ出馬ノ支度アリ然ルニ 内府十一條共我誤リタリトテ點ヲ掛玉ヒ タレハ其コトニ及ハス若シ此條々 内府許容ナクンハ 國祖名代トシテ 出馬シ 内府ヲ退治セントノ勢ヒ也備前中納言モ備前 島ノ下邸ニ人數八千ヲ貯ヘ 國祖ノ先鋒ヲ爲ント也 是ノ時ニ當リ

石田三成増田長盛等ノ陰計ニ依テ 大君ト 公ト釁アリ 細川越中守忠興之カ調停ヲナシ而シテ和ス 續清正記ニ太閤薨 橋ノ處和平アリテ 公加州へ皈ラル、時 神君ノ息男 証人ニ取テ北 國へ同道也因テ清正聞之和田備中ニ侍二十騎足輕五十人ヲ付テ途見送ト 云コトアリ是聊モナ 二月晦日 一作二十 九日非 大君ノ佳招ニ因テ 公

病ヲカメテ船ニ乘リ大坂ヨリ伏見ニ至テ 大君ニ面晤ス 神谷信濃守只一人侍ス關原略譜ニハ信濃ノ外五人ト云烈祖成績云、利家入第、神祖亨之召 利家之宰神谷信濃賜杯酒武德大成記ニ此時 神君我 公ノ爲ニ蒲團ヲ設

家忠日記ニハ
神君小舟ニテ
利家ヲ迎フ
利家謝シテ舟
ヨリ陸へ上リ
肩輿ニテ神
君ノ館ニ赴ク
其途中加藤淺
野細川歩行ニ
テ輿傍ニ從フ
利家并ニ加藤
等ハ旅服ニ道
服也 神君ノ

近臣ハ長袴ニ
短刀ヲ帶フト
アリ又當時ニ
町嚙ナル響應
ニテ悉テ盡シ
美ヲ盡シ土器
數回ノ後 神
君ノ前へ 利
家ノ寵臣神谷
信濃守ヲ召テ
御盃ヲ賜フト
アリ
此公邸ヲ家忠
日記ニハ大坂
ノ邸トシ 神
君餘ニ乘シテ
大坂へ赴ク供
奉ノ翌皆河邊
ノ陸地ヲ離レ
ス弓鉄炮ヲ以
テ警固ストア
リ
家忠日記ニ此
日 公 神君
ト開談中へ石
田三成黒衣ヲ
着シテ來リ一
座輿ヲ雇スト
アリ

アリト 細川忠興加藤清正淺野幸長等步行シテ之ニ從フ 大
君歎意眷々玉膳ヲ設ケ甘脆ヲ盡セリ 此時 公 大君ニ謂テ曰
ス故ニ巷説紛々クリシバラク向島ニ 我 公是日歸坂シ玉フ 長明
筆記
ニ 國祖二十九日夜橋本ニ御泊晦ノ朝船ニテ伏見へ赴キ玉フ時弓ノ者ハ
皆橋本ニ殘シ富田下野守鎗ノ大身ニテ柄ヲ銀ニ仕タルヲ持チシカハ命ニ
ヨリテ是ノ馬先ニ持シテユケリ 神君ノ坐敷へ相從ヒシハ徳山五兵衛
齊藤刑部富田下野守神谷信濃守小塚權太夫村井勘十郎ノ六人也村井ハ小
刀ヲ持ツ 世子ハ大坂衛護ニ殘リ玉フユへ添へ使者トシテ大音主馬モ此
ニ來ルト也 神君ハ有間法印ト同舟ニテ橋本マテ淺黄ノ布上下ニテ御迎
ニ出玉ヒ 國祖乗舟アレハ 神君ハハニ舟ニ乗カヘ玉ヒ急キテ先ツ御飯
リ而テ其日饗應了リ 國祖飯駕ノ路淺野彈正父子ヲ初メ大小名皆步行ニ
テ從フ 國祖之ヲ見テ數乗用アルヘシト曰マヘトモ 國祖ノ威ニ畏レ乘
ル人ナシ 國祖直ニ村井豐後第ノ邊ニアリ 到リ大名方ヲ相伴ニナサレ温
飽ヲ喫セラレ此第前ヨリ舟ニテ歸坂ナリ 國祖此會而至難至危ニテ鴻門
ノ會ニ過タリ必定生テ歸リ難カルヘシト覺悟シ玉フハ太閤ノ遺囑ヲ守リ
秀頼君ニ代ラセラルノ深慮也因テ何トカアラハ 内府ヲ一刀ニ可極トノ
内心ニテ丈木ノ刀ヲ帶シテ行セラル蓋シ北會ニ 内府ノ 國祖ヲ難討ハ

威風ノ熾ナルニ恐ルトイヘトモ其實ハ天ノ 三月十一日 一作 大君我
ノ誠忠ノ厚ヲ冥助アリシコト尤揭焉タリ 八日
公邸へ 諸本此邸名ヲ闕ク按スルニ伏見ニテ嚮ニ太閤ヨリ賜ル 光臨ア
秀次君ノ遺館也一説ニ此邸今云中書島ニ在リシト云
リ 公病篤シトイヘトモ其厚情ヲ感謝シ豐席ヲ開キ八珍
ヲ羅子盃行獻酬其禮具ニ備ハル 三月八日 神君我邸へ光臨ノ時
郎也又是時 公 神君ニ乞テ曰我病革ヤカニシテ瀕死ノ期至レリ願シハ
赤心ヲ盡シテ秀頼君ヲ輔ケ玉フヘシト其言再三ニ及ヒ重テ 世子瑞龍公
ニ愛憐ヲ垂玉ハルヘキヲ囑マセラル 神君諾シ玉フ本朝武林傳曰慶長四
年三月十一日 神君被狂玉輿於 利家第 利家雀躍不少珍膳盡善美獻酬
終後召富田越後守山崎内匠同次郎兵衛三人覽刀術藝褒賞之且招彼流之門
弟櫻井六郎右衛門者學此術關原記大全ヲ按スルニ 神祖此 公邸へ來駕
ノ時利政君密ニ 神祖ヲ害スル心アツテ利刀ヲ懷ロニス然レトモ 瑞龍
公坐ニ在テ之ヲ睨ムニヨリ發セスシテ退クト云按スルニ此說諸記ニ見ヘ
ス謬說ナル 其夜 大君藤堂高虎ノ宅ニ宿シ玉フ 此夜石田ノ黨
コト明也 小西行長ノ宅
へ競ヒ來ル因テ藤堂ノ宅へ集ル通侯多シ此夜靜ナルニ及ンテ淺野長政
國祖ノ臣徳山五兵衛ヲ携テ高虎ノ宅ニ來リ 神君ニ見ヘ乞テ曰ク 君實

ニ 利家ヲ捨スノハ向キニ秀頼君輔翼ノコトナ 君ニ囑ムヲ許諾シ玉ヒ
 シ誓詞ヲ賜ハルヘシ然ラハ 利家明日地下ニ歸ストモ遺憾ナケント 神
 君疑議シテ決セス有馬則頼側
 ラコ在テ之ヲ沮ム 神君止ム 閏三月三日 國祖薨ス是ニ於テ大
 坂ノ諸大將石田三成ト發難ノ形アラハレ三成ヲ誅スヘシ
 トアレハ三成是ニ堪ヘス 大君ヲ囑ム 大君之ヲ容レ玉
 ヒ結城秀康ヲ以テ瀨田マテ之ヲ送ラシム三成是ニ依テ佐
 和山へ退クコトヲ得タリ冬十月増田長盛長束正家等ノ讒
 ニ因テ土方雄久ヲ大田へ常陸大野修理ヲ結城へ下淺野彈正
 ナ甲州へ整スヘキ命ヲ沮ミ蟄居セシム蓋右ノ三人淺野氏ノ息幸
テ武州ニ留ルナリ妹婿也土方氏ハ 國祖ノ從弟ナリ大 大君ヲ刺ントスルハ 大
 野氏ヲ加ヘタルハ五奉行ノ謀ナリ 陽ノ日大坂城ニシテ圍基 實ハ我 瑞龍公其姦主タリト 大君
 シ玉ヲ刺ント流聞ス

へ讒セシナリ

○横山長知到浪華而勸解訛言

冬十月浪華ニ於テ 加賀侯反シテ出師ノ巷說紛如タリ我國

へモ上國ノ討手向フノ流聞頻リ也因テ高山南坊長房南坊初

攝州高槻城主荒木攝津守村重ニ仕ツ天正六年村重謀叛爲信長公被滅此時ニ名右近

右近同州茨木城ニ在テ降リ自是仕 國祖賜二万石猶此餘傳記慶長十九年ニ

命シ金澤城下ノ繚垣ヲ修シ内塹ヲ疏鑿シテ要害ヲ設ケシム

頃者 瑞龍公越中富山邊巡見シ玉フ所へ一説巡見ヲ作故鷹細川忠興ヨリ密書ヲ
 以テ此ヲヒ大坂騷キノ次第ヲ告ク 公披緘有テ即日金澤へ歸城アリ一本富山
翌日金澤へ歸城トアリ 老臣ト之ヲ議シ即南坊ニ命シテ城下ノ繚垣ヲ修シ内塹ヲ設ケルナ
 リ相傳是士普請ニテ二十七日日ニシテ成ト云且此餘諸器械雪中ノ糞ノ支度
 マテ盡ク成テ防戦ノ備へ專ラナリシトアリ即チ今ノ内總構是也外構ノ整ハ慶長
也列コノ内塹水條ノ辨解ハ來因卷附錄城郭事蹟ニ記スルヲ以テコハニ略ス

大君怫然トシテ色ヲ作シ我北州ヲ討ント 是レ五奉行等伏見大坂

討ントスル手段ニヨル也然レトモ其主意大事ニシテ外聞チ恐ル、ニヨリ加
賀軍ニ事ヲ托シテ兵革ヲ催シ或ハ神君北征アラハ其後ヲ遮リ討ントノ計
策ト云 神君ハ此姦計ヲ曾テ知 丹羽長重ヲ大坂ノ西城へ 神君今年
リ玉ハヌユヘ怒ラセラルト也 九月ヨリ茲

玉^{ニ居} 召テ北征ノ先鋒タルヘシト良刀^吉 一鞘ヲ授與ス長重踊
躍シ生涯ノ面目立功ノ秋也トテ即大坂ヲ發シ晝夜兼行シテ

賀州小松城ニ入ル 長重此時密ニ夜ヲ以テ小松ニ至ルトイヘトモ我 公
ニ左祖ノ者有テ直チニ此コトヲ金澤へ告シ我 公大

ニ怒ラセラル是即チ 公ト長重ト怨隙ヲ啓ク起本也長 細川忠興其訛言
重ノ室ハ信長公ノ末女ニシテ長重ト 公トハ相婿也

ナルヲ 大君へ解釋シ又其發難ニ及ヒ海内戎馬ノ街トナラ
ンコトヲ病ミ種々ニ之ヲ調停シ且此故ヲ金澤ニ告ク 景周按
スルニ

上文ノ注ハ我 公富山巡見シ玉フ處へ細川忠興ヨリ密ニ飛札ヲ
以テ此ヲヒ大坂ニテ騒動ノ旨ヲ告ト云者此告ケノコトナルヘシ 是ニ依テ

浮議申解ノ使トシテ我太夫横山長知 此時号
大膳 ナ登坂セシム 此大
膳事

ナ略證ニハ五年ニ係ク然レトモ諸記今年ニ係ク未タ孰レカ是ナルヲ考ヘス
此時長知ニ有賀泰六直政ヲ副フ然ルニ此途中ハヤ新關出來シ越前舟橋ニテ
此使チ支ユルユヘ長知此旨ヲ大坂ノ浮山秀家へ飛脚
ヲ以テ通シ証文ヲ取ニセ關々ヲ通リテ登坂スト云 長知即 大君ニ敬
謁シ寡君忠實ニシテ他勝ナキ旨ヲ勸解ス 大君領會シ玉フ
此時 大君左右ヲ傳呼シテ長知ヲ召セシム長知膝行シテ前ニ訛説ヲ解謝
ス 大君理會シ玉フトイヘトモ猶約信ノ血文アルヘキ旨ノ命アリ長知反命
シラ曰ク寡君客歲他賜ナキノ旨秀頼君へ捧ケ置キシコトハ人皆知ルトコロ
ナリ然ルチ今前信ヲ疑ヒ玉フトキハ今日百誓文ヲ上マツルトモ何ノ徵トス
アルニ足ラン故ニ又誓文ヲ奉スルニ及ハスト吉テ事落着ス 寛永八年横山大膳康玄進
スルノコアリ之ト訛スヘカラス 我 公其使節ヲ失セサルコトヲ賞ス烈祖成績云
長知奉命而退應對甚謹言 因テ質ヲ要ム 此質ハ母公芳春院ヲ質トシ并ニ
有條理 神祖左右皆稱之 五臣ヨリモ各質センコトヲ約ス
江戸へ至ルコト 長知頓首命ヲ承テ罷ミ母君 高島氏ニテ即 二扈從
ハ明年ニ記ス 長知頓首命ヲ承テ罷ミ母君 高島氏ニテ即 二扈從
シ金澤ニ下ル 一木芳春君ハ村井長頼玉泉君ハ 是ニ於テ 兩公ノ和
成ル 景周按ルニ此質ヲ進ムル事烈祖成績關原記大全ニ今年ノ冬十一月ニ
係ク然レトモ徳川創業記家忠日記關原合戰志等ニハ皆明年庚子ニ係

ク故ニ景周
之ニ從フ

三州志韃藥餘考卷之十二終

三州志韃藥餘考卷之十三

加賀州

金澤

富田景周大賚編輯

○母堂芳春君質武州江戸

慶長五年庚子五月

一作去年九月非

前年ノ約信ヲ以テ母君ヲ質トシテ

金澤

一作伏見非

發駕アリ村井豐後守長賴之ニ從フ六月

一作正月非

六日

一作七日

東武ニ到ル此時證人ト號シテ前田對馬長種女

在江戸三年歸後嫁今枝

民部直恒

大田但馬長知女横山大膳長知二男土佐與一

後賜五千石爲大樹公旗本

山崎長門長徳

世本作閑齋非也閑齋慶長十六年以後之名也又長徳作長鏡非也其辨記慶長十九年

二男阿波長郷

ヲ副フ

家忠日記今年五月二十日芳春院前田對馬守横山山城守大田但馬守山崎長門守等子發伏見六月六日至江戸トス非也其上四臣非叙爵人

加守字誤也略譜去冬加州ニ下ルト書シ今年發伏見至江戸トス前後矛盾ス關原合戰志ニ自加賀至江戸トス此說得之景周按此時ヨリ列國ノ重臣ノ子弟女

ナ證人トシテ江戶へ出スコト起リ替々出スノ處寛文四年四月 東照宮五十年忌祭ノ後稻葉正則阿部忠秋等ヲ以テ以後ハ諸國ヨリ證人ヲ出スニ及サルノ命有テ止ム是マテ自金澤 重臣所出證人ハ別ニ記ス

○我軍欲抵大聖寺之道會丹羽氏水兵丹羽氏塘土謬以自家伏兵爲敵

六月下浣 神君上杉景勝ヲ征伐トシテ 今春三月有景勝反逆流聞 其實出直江山城與石田三成

成之 奧州會津へ 景勝自越後徒會 津在慶長三年 出師ノ兵畧ヲ定メ號令ヲ東北ノ

諸國ニ下シ玉フ 六月十六日 神君發大坂 此後石田在依和山城 魏無移謀大坂及四 七月二日 抵江戶 十五日 石田與大谷吉繼 同道上洛 十七日

石田書 神君過失十三條託秀頼君且列諸侯花押而露叛形欲滅 神君二十三日 神君東發二十四日聞此事於下野小山八月朔日石田黨攻陷伏見城二日向

爲上國退治 扈 此時我 公へモ照會有テ越後ノ堀秀治 左衛門督 村上

義明 周防 溝口秀勝 伯耆 ノ兵ヲ相併セテ奧州津川口ノ先鋒タ

七月七日 神君上杉景勝 領國加賀 領國北國 領國越前 領國能登 領國越中 領國越後 領國出雲 領國美濃 領國信濃 領國上野 領國關東 領國河内 領國丹波 領國美作 領國備前 領國備後 領國長門 領國周防守 領國備前 領國備後 領國長門 領國周防守 領國備前 領國備後 領國長門 領國周防守

東遷 利 政 高 日

ルヘシト也依テ秋七月 公諸將帥ニ令シテ兵ヲ調撥シ能登

越後へモ使牒アレハ能州ノ利政君ハ播磨守利好 安勝 子 ナ七尾

城ニ留守セシメ其身ハ金澤ニ來リテ胥議ス然ルニ石田三成

事ヲ秀頼君ニ託シ姦機ヲ謀ルヨリテ畿内西國多ク之レニ黨

シ本月十五日伏見城ヲ猛攻シ既陷ツルノ由聞へ南越ニモ大

谷刑部少輔吉繼 越前敦賀城主 逆徒ニ黨シ 越前丸岡城主青山修理亮北庄城主 青木紀伊守一矩今庄城主赤座備後

守主家皆 府中城ヲ攻ント 府中ハ堀尾帶刀吉晴ニ致仕封トシテ去年賜ハ

石田方也 彌八郎ト交刃シ之ヲ殺シ其身モ傷痕ヲ被 議スルヲ以テ堀尾宮内檄ヲ

飛シテ急援ヲ加州ニ乞フ然ルニ大聖寺城主山口玄蕃允宗永

傳記慶 長二年 小松城主丹羽加賀守長重 傳記天正十二年慶長二年 等モ逆徒ニ黨ス

植田按此度
一節不可解
欲向與州而
取道於小松
豈有此迂遠
之事况公之
在金城幸々
乎益恐當有
誤猶可追考
今姑依舊存
焉
左一作右下
同

ト聞ヘシカハ 公暨ヒ利政君帷幄ノ謀臣歷事ノ老将ヲ引見

シテ軍議方略參定アツテ小松ヘ使テ立此度與州津川ヘ向ハ

ンタメ道ヲ小松城下ニ假ル然レトモ足下ト私ノ怨ナケレハ

相争フ可カラスト長重之ニ應ス因テ交モ相質セントテ小松

ヨリハ江口三郎左衛門一萬石ニテ家老坂井與右衛門直勝一萬石ニテ家老也此二老ノ

知行ハ太閤ヨリ賜ルコト見藩翰譜大屋與兵衛五千石關原記大全前日創業記作大夫非也金澤ヨリハ篠原出

羽守一孝大田横山山崎岡島備中一吾傳記天正十三年ニ監察安藤長左

衛門傳記慶長十九年一本安藤作石川又作市川ヲ副ヘ石川郡中與郷田中邑此郷名村名今猶存ス

出向ヒ猶長重ノ弟左近長次ヲ取玉ハントアリケレハ事破レ

又成田書九里本山口記大氏同說也岡島譜ニ公ヨリハ猿千代君長重ヨリハ息女ヲ以テ交質ヲ約諾シ岡島一吉與村永福父子副ヘ遣サレ小松ヨリハ

江口副來リ寺井ニ於テ交質ニ定マル所其質女ハ江口ノ女ト風説ニヨリ此事破ル然レトモ互ニ私恨ナキ上ハ攻防ノ沙汰有マシトノコトナリト云又一説

ニ公不破齋宮ヲ使トシテ長重ニ與州ノ出軍ヲ責ムレハ長重是利長去冬

神君ノ密ニ我ニ内命ノコトヲ傳聞シ反問チナシ東征ノ事ニ託シ我ヲ欺キ出

シ中途ニシテ討取ントノ奇計ナラント思フ因テ姑ク遁辭ヲ設ケ我ハ君カ後

ニ出軍セント答フ公愈ニ疑ヒ愈ニ使テ馳テ長重ヲ先ツ出軍有ルヘシト促

ス然ル處ヘ神君ヨリ長重ヘ東征ノ命アリヨリテ長重ソノ支度ヲナ先ツ

小松ヨリ屠リテ上國ノ兇逆ヲ伐テ玉ハント高畠定吉石見守傳記天正十

二 奥村永福伊豫守青山譜ニハ佐渡吉次此時金城留守トアリヲ金城ノ留守トシ前田長種

ヲ越中富山篠島清了織部ヲ城尾婦負郡ノ留守トシ長連龍九郎左衛門

其子好連安藝奥村榮明河内太田山崎横山高山長房南坊傳在慶長四年及十九年

ヲ先隊トシテ七月二十六日ノ晡時年譜作廿八日ニ公暨ヒ利政君精

甲二万五千内八十能登兵ヲ帥非テ金府ヲ發シ玉ヘハ烈祖成績合利政兵通計一万八千餘人成田

新安手尚安
時一非暇四
大將一人也
周未聞之

景岡曰或問
予曰世有以
坂井隆辭爲
義者不知義
耶未知其爲
義也渠兄在
他侯而渠辭
公則可也渠
兄今在丹羽
氏而渠與之
則渠自爲
公之敵也何
義之有哉若
與丹羽氏和
不成則奈何
而了可謂和
成者坂井之
幸矣

國信傳詳越
中故墟考

書兵簿爲一萬也又一說我小臣坂井八右衛門坂井直勝弟也此乞骸曰愚兄直勝將于丹羽氏先鋒丹羽氏寡兵而公富帶甲則於士不乏願今乞骸合力愚兄公以其爲悖許之長重與公和成後八右衛門再來仕于我是今ノ要人ノ祖諸英將ノ鐵騎次第ニ前ム是日松任ニ次リ二三日逗留シ兵制職制等アリテ戰畧定ル而シテ小松ハ最爾タル城ナレトモ内塹外河堅固ノ地勢容易ニ陵城ス可カラヌ乃先ツ大聖寺ヲ墜城シ而レテ後小松ヲ拔ント此策獻之八月朔日松任ヲ發シ手取河ヲ涉リ此間小松ヨリ銃士ヲ出シ云說アリ下文道ノ左ナル三堂山能美郡自金澤六里ニ着シ此所ニ陣營ニ辨記ス此陣跡今猶存與和田山堡跡不可混和田山解既記亨祿ヲ構ヘ四年蓋三堂山雖小山瞰小松於眼下距淺井僅一里疆岡島一吉不破彦三光昌直光ノ陣代不破光永號大學此時光昌僅ニ五歲故光永爲與三大夫祖也ヲ守將トシ是ニ湯原國信ヲ副エテ國信号八承馬回但本貫絶炊

一書木場作
黃葉

ノ長太夫ノ祖一說此時長重出馬梯河河岸設柵樹旗爲嬰城揣度云然此說不詳其士五百又道ノ右ナル千代村ニ堡障ヲ築キ千代村在梯河上流能美渡邊自小松一里強云景周安永庚子凡自千代至小松之路經能美一針平面等而出梯邑又自能美渡則經白江上小松園小寺等諸邑而出小松町寺西秀勝号若狹不破丹波源六嫡子此時領六千石後蟄居能州絶炊也今ノ銀三郎家ハ丹波弟源六重綱ヨリ系ス九里本之ニ原田又右衛門ヲ加フ非也原田ハ天正十二年病死也ヲ守將トシテ其兵三百銃將ニハ藤田八郎兵衛傳在慶長十九年矢島權兵衛此子孫今不詳疑クハ天正十二年淺井清十郎前田利ヲ副フ且木場湖家忠日記作歸馬水兵ノ手當トシテ上坂又兵衛七千石喜藤太祖ニ烈祖成績作木葉百銃神尾圖書傳記慶長十九年孫九郎祖ニ六十銃大橋九郎兵衛又右衛門門祖ニ二十銃或作三ヲ附シ堀才之助ヲモ副エ堀傳記浪花役○九里本公三堂山松町ヲ焚キテ保城ストノ說アリ世本ニ長重梯マテ出馬シ河岸ニ設柵保城ノ支度セシトノ說アリ又長重本折ヲ自燒キシノ說アリ見聞集ニハ公森田武

兵衛ニ内命シ海賊ニ將トシテ安宅邊ニ放火セルヲ長重兵ヲ出シテ三ツヒ鶴洲ニテ禦シトノ説アリ按スルニ這梯口ニ設柵ハ下註梯口積薪ト云ト一事ヲ
 ラン○爰ニ頃者山口宗永小松ニ來リ長重ニ弊邑不堅願クハ我兵ヲ併セテ當城ニ保マン君許諾アラハ我質ヲ出シ城背ヲ守ラント云長重曰金澤軍遠卷ニ
 スルハは大聖寺越前ノ後援ヲ疑フ也君此ニ來リ保マハ敵先貴城ヲ圍ミ上國ノ援路ヲ塞クノミナラス此城ノ軍儲モ不足スヘシ君速カニ飯城セヨ事アラ
 ハ急援セントテ宗永ヲ返スト也關原合戰志ニハ宗永百五十兵ヲ從ヘ來リ一方ヲ死守セント云長重饜之短刀ヲ贈ル宗永ヨリモ長重並ソノ甥ノ五郎助ニ
 短刀ヲ贈ル饜了テ防地ヲ授ク然ルニ其地要害ト爲ヘキ所ニ非サレハ宗永怒テ去ルトアリ成田書ニハ山口父子小松ニ來リ一身ニテ大聖寺城抱ヘ難シ小
 松城中竹島ヘ入置クレト也然レトモ長重同心ナクシテ飯ルトアリ景周按スルニ多説アレトモ成田説確當ナラン又大聖寺陷城後大谷吉繼小松城ニ來リ
 長重ト對談ノコト世本ニ是ト相混ス不可謬見 總テ之ヲ小松ノ戊トス 烈祖成績曰利勝發金澤有兵一万八千蓋留三千
 備小松城景周按 我行軍先騎後從利鎗ヲ列子羽隊銃隊連雲ノ如
 此兵數可追考

ク山ニ沿ヒ佐佐木渡

按ルニ伊東渡ナラン一説爲乙師渡非也乙師ハ地脈不接又長家記ニハ荒木田河ヲ涉トス荒木田ハ

佐々木ノ駢邑也佐々木荒

今作吉竹本郷 蓮臺寺 今作三谷 自小松一里以上皆能美郡

木田俱ニ小松ヨリ一里疆

本江 蓮臺寺 今作三谷 自小松一里以上皆能美郡

白石神書ニ此頃小松城ノ終搦ハ大竹鼓ニテ搦モナク搦搦ノヤウ成リシニ金澤ノ兵押來ルト聞キ長重下知ノ門野丈夫ニナシ竹鼓ヲ伐拂ヒ其其惡ク搦ヘタリ 利長之ヲ見テ流石長秀ノ子ナリト感シ小松ヲ攻メスシテ大聖寺ヘ進ムトアリ
 成田直談ト云書ニ四百ナ有四十餘ニ作ル

ヲ經テ木場湖ノ東ヲ押過ル長重ハ今ヤ攻兵來ルカト界墻頭
 へ出テ府兵ヲ指揮スルノ所へ 或云長重登街屋棟望之 塘土歸リ金澤ノ行軍
 手取川三堂山ヨリ三谷ニ迄テ山野間斷ナク鐵鎗戟林銀ノ如ク金兜星ヲ耀シ長兵短兵介駟ノ頭尾相啣ミテ來レリト報ス
 坂井直勝之ヲ聞キ櫻木源太ニ火兵八十 一作八百 ナ副エ兵艦數艘
 ナ 烈祖成績爲 木場湖上ニ放ケ 九里本自小松五十銃一火七十銃一火湖上ヨリ放銃ストアリ 徑ヲニ金澤衆ノ行軍ニ當レトイヒ又古田五郎兵衛ニ精兵四百ヲ隸シ
 淺井口へ 自小松大抵二十七八町 出シテ上界ヲ守ラシメ且若シ敵今江 一名琴湖
 ヨリ來攻セハ其背ヲ斷ツヘシト士卒五六十ニ銃手ヲ加ヘ御幸塚 今江ノ上自小松一里強以上地名皆能美郡 ニ埋伏セシム斯クテ櫻木古田金澤ノ行

豊後其美ニ此
時死傷ノ者五
六十八トアリ

軍ヲ擾サント水陸二道ヨリ進ム然ルニ中軍既ニ過去レハ黒

白颯纏ノ切裂指タルニ銃將我輜重ヲ見テ火子五六十員粟津

邊按上粟津在能美郡下粟津在江沼郡此所謂粟津者不詳孰地ニ於テ銃嘴ヲ羅子鉛彈亂放飛霰ノ

如シ因テ輜重踴躍スルヲ輜重將富田下野守重政富田大炊慶長元年叙下野守

同六年改越後守即チ景周ノ先祖手兵ヲ指麾シテ皆下リ立セ舉兵敢死ノ一心ヲ

結ヒ奮撃シテ敵ヲ逐タテ景周家譜說同之又上坂又兵衛大橋九郎兵衛

ヨク放銃ヲ爲スニヨリ輜重其場ヲ緩ニ押行クコトヲ得タリ

見聞集九里本等粟津ヲ作粟生此事爲粟生邊然レトモ四戰略譜ニモ寺井邊ト云ハ異説ト云ヒ成田書ニモ公八月初メニ山際ヲ通り大聖寺ヘ到リ玉フ時

ノコトニテ松平久兵衛ナト命ヲ承テ返スト云此事ヲ聞テ山崎横山ハ先軍ヨリ引返シ高

山淺井左馬高義ハ高義一作孝由文祿元年岩淵暗嘩ノ時本藩ヲ退去ス其時六千石也其後復仕此時一万石也緩路ヲ

遮斷セント其方ヘ馳ス上坂ハ敵ノ騎將白颯纏ノ者ヲウケ大

橋ハ黒颯纏ノ者ヲウケ倒ス大橋膝架ニテ放銃セントスルニ指物ノ四半障リケレハ家人岡田葛右衛門之ヲ捲上

ルト云上坂ハウケ倒シケル敵首ヲ取ント槍ヲ提ケ出ントス大橋槍ヲキキ以テ謂ヤウニハ身銃將ヲレハ首ハ組ノ者ニ討タスヘシト上坂因テ猶豫スル所

ヘ葛右衛門槍ヲ持來レハ大橋之ヲ取テ走出ツ於是上坂出シ拔ル、チ怒リ馳出トイヘトモ六十餘ノ老人ユヘ後ル、ト云銃將松平久

兵衛康定世本爲副大田副足輕將家譜千五百石足輕三十員預ル物頭トアリ治部ノ祖ナリ杉江兵助丹後子今ノ木工左衛門祖

後藤又助今ノ又助祖水越縫殿助縫殿太郎祖佐藤久右衛門治兵衛祖池田彌五

右衛門傳不詳鹿毛内膳文内子也文内二千石金城天守焼失ノ時使ヲ勤メテ燒死ス内膳ハ千石ヲ賜ハル内膳子ノ七兵衛ノ時富

山ノ從臣トナル七人之ヲ視テ各兵ヲ將テ此所ニ馳來レトモ敵徒カノ

二將ノ僵屍ヲ引カケ退キ日モ昏黒ニ及ヒ星ヲ視ルニ至リ小

路沮澁ナレハ敵ヲ追ハス却テ敵ノ夜討ヲ慮カリ各此所ニ下

營シ篝火ヲ張テ曉ニ達ス 明日 公下野守暨上坂大橋ヲソノ陣 營へ召シ神妙ノ至ト感恩ノ言ヲ賜 然ル

ニ長重ハ嚮ニ南部無右衛門 按ルニ寄食ノ浪士也續清正記ニ天草攻城ノ時南部廣言ニ似ス徒歸ノコトニユ元來

輕躁ナル人物也長重用之モ亦輕躁ナリ 寺澤勘右衛門ヲシテ金澤衆ノ動靜ヲ覘セケ

ルニ高山南坊ノ七八騎ニ追立ラレ 參河記此時南部將銃卒二百而出然怯利長之大軍身自潛舟底使銃

卒山放鉛故 馳歸テ曰ク敵ノ後軍ハ木場ニ聚屯シ前隊ハ今江ヨ

リ押ヨスルト見ユト長重此時未タ界墻頭ニ在シカ二士ノ報

ニ驚キ木場湖ノ櫻木古田へ使テ馳急ニ引取ルヘント云ヤル

ニ二將ハ猶金澤ノ後軍ニ尾シ白刃ヲ接シ絳旗ヲ結ヒ奮撃セ

ント思ヘトモ長重ノ下知ナレハ兵ヲ舉ケテ退ク後軍ノ利政

君及ヒ高山ノ銃兵其機ニ乘シテ之ヲ歐ント進ム 公遙ニ望

ミ之ヲ制シテ綏ヲ斂メ松山へ赴キ玉ノ長重再ヒ斥候ヲ出シ

且敵ノ來攻ヲ待ツ處へ斥士歸リ敵ノ行軍ハ小松城ヲ背後ニ

ナシテ南スト報ス長重此言ヲ恠ニ南部等ヲ呼出シ敵衆今ニ

當城へ向ハス既ニ南行スルハ奈何ト詰問スレハ南部寺澤對

テ曰ク嚮ニ哨探セシ時大領一屋 領一作呂景周按古昔王制ノ隆ナル時置大領ノ地ヲラン相傳中古今ノ

中村ハ僅有一屋故大領一屋ト云自小松街尾十一町 ヨリ望ムニ今江橋御幸塚邊ニ屯兵多キ

ヲ以テ敵衆ト察シ之ヲ報ストイヘハ古田櫻木ハ其座ニ在リ

テ曰ク其屯兵ハ我等カ伏置タル兵子也此時引舉ノ使命ナク

ンハ我等今日粟津邊ニテ勝利ヲ得敵徒ヲ木場湖底ニ道沈シ

テ魚腹ノ有トセン者ヲ遺憾萬々ナリト怒氣面ニ溢レテソ見

景國曰長重
雖善用兵無
知人之鑒而
輕以疎放之
南部等爲斥
士事既拂矣
夫死生之
所係何爾勿
々然哉

エタリケル

景周按這南部寺澤斥候ノ一節正保四年六月十八日成田半

右衛門三政ヨリ三政初仕長重時号助九郎安彦左馬助是二代目左馬助也後其伯父某蜂須賀阿波守

家老成賀主計ト口論ス其加勢トシテ金澤ヲ退去スト云ヘノ書翰並ニ有澤ノ略譜近來牧忠

輔カ淺井躰記ニモ載セサレトモ北陸七國志管家見聞集諸

家太平記烈祖成績家忠日記武德大成記慶長軍記淺井記前

田創業記等皆コノ事ヲ擧ケタレハ景周一斑ノ見ヲ以テ臆

斷シテ删除スヘカラスヨリテ此ニ該記シテ後哲ノ鑒定ニ

讓ル

○陵大聖寺城山口父子殉城

八月二日一作朔日非晡時 公ハ松山ノ古墟ニ在江沼郡動橋ヲ上レハ左ノ山也此山ノ牛尾辻ト云

所ニ遺跡アリト云自大聖寺一里強トイヒ又二里トモ云按是舊賊營也永祿十年賊與朝倉氏和時廢此堡其後得田小二郎據之柴田拜郷攻取之亦廢之烈祖成績曰利勝屯松山大聖寺農商皆逃散利勝使人慰諭曰我取敵將不戮汝等宜各還本業邑民大悅僧徒祠官捧上宜來謁安堵如故景周此事ヲ稽フルニ下文大聖寺城陷ル後我公越前金津布營ノ時郷民來服ス中陣ヲ布玉ヘハ利政君ル事アリ疑クハ成績ノ言是ト混シタルナラン

ハ鴨野ニ在松山與大聖寺之間今有加茂邑此邊用水多田畑豁然布營シ諸部前後左右ニ櫛比

ス九里本ニ二日晡時山口右京物見トシテ大聖寺ノ此方ナル桑畑マテ足輕四五十ヲ從ヘ出三段ニ備ヘ自カラ進ンテ我陣ヲ近ク規フ我兵之ヲ擊ント進ムニ足輕段々ニ伏置放銃セシユヘ強進スルヲ能ハス其内ニ右京引取トアリ一説ニ此時一陣ノ山崎二陣ノ横山ヘ使テ馳セ敵兵不虞ニ城ヲ出ツ之ヲ尾擊シテ城ヲ乘取ント言送リテ敵ヲ追フト云爰ニ公九里九郎兵衛此末胤不詳一作村井久左衛門或云此使ハ自三堂山

ノ奸賊ニ黨ス其間ヘ公然タリ速ニ賜ヲ換ヘ過ケテ改メ不義

追接スルニ此九里ハ河北郡鳥越役ニ所見ノ少藏ノ弟ナリ利政君ニ仕ヘ銃將タリ大聖寺金ヶ丸ニテ討死ス此弟ハ波着寺ニ世ノ空照ニシテ

不中而今右
京對中是公
銘之不非天
力之所能及
也宋大祖有
言帝王之興
自有天命求
之亦不可得
拒之亦不可
止障哉言也

東邊基業ニハ
右京茂樹中七
八十間子ラヒ
ヨセニ九ヲ放
テルニ一丸ハ
公ノ類皆ナカ
スリ一丸ハ
公ノ側ナル兒
少將國島某ニ
中リ即死スト
アリ此説據當
ナラス

次郎兵衛此
時奮奮拔群
諸兵驚目其
狀詳耳底記

ニ巧ナレハ鉛道ヲ觀フテ放ナケルニ鉛子 公ノ左肘ヲ踰ル
 コト一再ニシテ中ラス因テ又正中ヲ觀フテ放ナケルニ線頭
 火滅エテ藥池ニ通セス右京大息シテ銃ヲ擲ツ
或云初メ山口氏以爲ラシ公自
 カラ攻城ニ向ハ、必此石堂山ニ上ルヘシトテ先石堂山上ニ藁偶人ヲ立チキ
 城中ノ士ヲシテ放銃ヲ演セシムルニ百放百中セリシカルニ此時右京及ヒ其
 他ノ良銃手ノ鉛子一ツモ 公ニ不中ヲ以テ城兵ソノ盛運ヲ感シ山口ノ類運
 ナ嘆スト云近コロ山崎範恒大聖寺ヨリ來テ本貫ヲ嗣襲シ我同僚トナル景周
 ヨリテ山崎氏ニ聞クニ石堂山ト鐘ケ丸ト相去コト二百間強ナリト然レハ大
 銃重藥ヲ用ルニ非レハ鉛子容易ニ徹セス徹ストモ重藥ノ術ニ巧ナラサレハ
 其人ヲ目道シテ中ツルコト能ハスサレハ右京此技ニ富 我衆ハ 一説自是
 ムトモ非所及也按スルニ過聽謬聞アルカ他日可重考 繫四日非愈
 々勢ヒテ振ヒ先ヲ争フテ城隍ニ偪ル城中ニハ僅ニ千二百上
 下ノ防兵ニテ之ヲ嚴禦シ殆ト沈船破甑ノ敢死ニ類シ鳴鏑ハ
 叫鴈ノ如ク銃聲ハ殷雷ニ似タリ此時江守半兵衛 要人 堞壁ヲ

踰ントシテ敵ノ爲メニ鎗ニテ突落サレ菊池大學 祖 不破大
 學二人ハ創痍ヲ被ルトイヘトモ敵首ヲ取ル爰ニ城將佐久間
 右衛門精兵ヲ提テ城門ヲ出テ敢戦ス我將士富田下野守今井
 左太夫 左太 氏家内藏助 八郎兵衛 山崎次郎兵衛 男成 淺野勘右衛門
淺野氏末胤今富山ニ存スルマテニテ其 餘末胤不存絶炊ノ故カモシルヘカラス 大石木工助 源兵衛 葛卷喜一郎昌
 俊 藏人 宮崎藏人重之 藏人 等是ト合刃奮闘ス淺井左馬ハ後レ
 來ルカ膝ニ鏃創ヲ被テ仆ルトイヘトモ奮起シテ第一槍ヲ合
 ス而シテ敵ノ投ツクル槍尖ニ脚骨ヲ貫カレ再ヒ僵仆シ復起
 ツコト能ハス傍人扶ケテ退ク 一書左馬此役ニ身十七癩ヲ被ル此時
 一萬石也末孫今ナシ絶炊ノ年月モ不
 評 次ニ葛卷進ニ敵首ヲ獲 敵將長刀ヲ振テ葛卷ト交撃スルニ敵ノ鐵鎗
 石垣ニ夾マルヲ以テ押コミテ首ヲ取ルトナ

此年ハ長島ノ父五左衛門ハ豊後守光教ノ弟也即今ノ遠端横須賀ノ藤崎守忠善ノ同祖ナリト云

又西尾隼人

西尾家記ニ隼人十六歳敵ノ甲冑ヲ捨テ西ヘナクシテ行者ニ會シ其首ヲ取ル然レトモスクイ首ニユヘ高田傳右衛門ヘ見

セ之ヲ捨テ首帳ニモ附サルヲ高田ヨリ淺井左馬ヘ始終ヲ告ケタレハ公ニ百石加恩ノ墨附ヲ賜ハルニ隼人辭シテ不受左馬強テ勸解シケレハ乃頂戴ス

津田外記重治

源右衛門初名也九里本作重次非也重次勘兵衛也 大河原助右衛門 助右衛佐

賀關太夫

一作隼之助今山崎作右衛門正重 山崎肥前吉健子寶珠坊ノ子也正重一作政有小右衛門祖

杉江兵助

町口ニテ一番首ヲ得テ公ニ獻シ馳出ルヲ公之ヲ留メ使命ア

命ヲ乞フ 公此小堡ニ良士ヲ殺スコト無益也ト徐口モ各獻馘ス田邊助ニノ玉ヒケレハ衆 公ノ士ヲ愛ムヲ喜ヒ益進ムト云

太夫重正

長太 郎祖 ハ鎗下ノ高名ヲナス 此槍下ハ土藏口ニテ也時ニ被二創 又大音主馬

厚用

傳記天正十八年帶刀祖也 正門外廂屋上ヘ最先ニ攀登ス之ニ踵テ藤掛

豊前

俗本加守字非 寺尾四郎兵衛 世本寺尾作生田非也此時猶稱寺尾モト佐久間盛政ノ臣也志津嶽役後天正

十二年仕 瑞龍公加秩至七百俵依此時戰功 西村右馬助 甚太 賜三百石六年辛丑改生田今富山生田藏人祖 夫祖 毛上ル藤

掛寺尾ハ矢ヲ注ギテ連發シ西村ハ放銃ス大音ハ門内ヘ飛下

敵首ヲ斬ル

主馬家臣一人ト門内ヘ飛下ルニ敵六人其下ニ在合ス家臣

四疾ヲ被リ刀ヲ奪ハル所ヘ我兵進ミテ大手門戰防クニ堪サリケレハ主馬ノ敵士中城ノ方ヘ引去ルヲ主馬短刀ヲ以テ之ヲ追ヒ首ヲ取テ本陣ニ來ル陷

城後 公主馬カ所ヘ到ラセ額疵ヲ見 山崎庄兵衛長國ハ 長門 子 城將蒔

田次郎兵衛

鐘ケ丸 守將ト合刃シテ之ヲ斬ル 山崎ハ蒔田ヲ斬ントシテ馬

ルヲ從臣西村次右衛門堀角左衛門之ヲ扶ケ共ニ進テ敵首ヲ斬ルト云此西村傳ハ元和元年ニ記ス堀ハ三郎兵衛弟也後 微妙公ヨリ四百石賜ハリ公臣ト

ナル角右衛門ノ子天シテ絶炊ス 長父子與村河内守榮明 見聞集作 横山 寛永六年長知

書上ル書ニ御手先ノ者仕寄中内金ケ丸ヲ乘取候共日本丸ニ移ル後諸手ノ者

用攻入候金ケ丸攻候コト私組中ノ外先ヘ進者無之トアリ又家譜ニハ與力并

自分兵千餘騎ヲ率サテ一 大田 但馬加守字非也 村井出雲長次 長頼子也

番ニ金ケ丸ヲ乘取トアリ 永十六年富山侯ノ從臣トナル今富山富田下總祖

也○按ルニ此時吉田八郎太夫祖ノ數馬石黒嘉彌之助祖ノ太郎左衛門石野讚岐父ノ和泉齊藤金十郎祖ノ市左衛門菊田三郎太夫祖ノ兵左衛門杉野善三郎祖ノ善三郎鷹栖立之助祖ノ刑部等各働キシコト家譜ニ見ユ然レトモ此輩ノ名舊録上ニ列出ナキハ皆上功ニ准スヘキ働キニ非サル故ナラン 以下功ヲ一時ニ争ヒ牆脚ニ蟻集シテ乘入ントス城兵モ破ラレシ

ト銃口ヲ羅子テ輪打ス富田藏人高定

富田左近監盛ノ二男信濃守信高ノ弟也初メ秀吉公ノ近

臣トナリテ譽アリ賜一萬石後秀次君ニ傳シテ諫臣トス秀次君生害ノ時高定殉死ニ臨テ果サス臆病不義ノ汚名播シテ西山ニ隠ルヲ我公自カラ枉駕携歸リ一萬石ヲ賜フ然ルニ此攻城ニ先陣ヲ乞ヒ手兵二百人ヲ率シ蔭地ニ城堞ニ薄リ乘隙ントス防兵堪ヘス一千二百餘人城ヲ擧テ出高定ヲ圍コト三匝之ヲ擒セント争フ高定苦擊重圍ヲ衝出己カ兵ヲ算ルニ五十人ニ過ス然レトモ再ヒ駈入山口父子ヲ目カケ本丸ノ橋邊ニ進ム時ニ銃子膝ニ中リ仆レントシ猶槍ヲ杖テ門頭ニ至リ成田喜三郎飯田又六松井宗助三士ト交槍シ又六ヲ搦倒シ松井成田ニ槍ツケヌ依テ二士本丸ヘ遁入レハ高定脱肯シ靜ニ自刎シテ死ス蓋此陷城專ラ高定先登ノ功ニ在ト云高定無子後室ヘ小秩ヲ賜ルト見エテ慶長十七年十二月九日 微妙公ヨリ花押ニテ景周祖ノ越後守ヲ始メ二十四人ヘ賜ル一紙ノ末ニ五十石富田藏人後家ヘトアリ此外今藩臣ニ此族ナシ景周養父藏人ト号セシユヘ世人景周ヲ其族カ云者アレトモ不然別苗ナリ

一先ニ超堞シテ鐘ヶ丸ニ乘入りテ殊死シ岡島市正

備中一吉ノ二男享年十

八富田岡島義盟有テ同シク銀梨打ノ冑裝ニテ同時ニ前ムト云一ニ十六歳ニ作ルハ非ナリ コレニ踵テ戰死ス奥村

因幡易英被創タレトモ岡島カ僵屍ヲ踏ミ堞ヲ踰エテ乘入ル

九里本因幡作主殿助世本作備後然家譜此名不詳碑文云易英先衆入金丸拒兵急接傷吾足遂進敵其敵凱旋之間我後軍遇敵而亂榮明嚴整部曲號發矢石敵兵披

此強攻ノ際ニ於テ淺井兵部 左馬弟也此時敵槍ニ胸ヲ貫カレテ死ス享年十七 山田勘六

子孫今ナシ 松雲公夜話録ヲ按ルニ此比 公命ニ背キ自カラ閉居シケルカ出テ鐘ヶ丸ノ一番乗ヲナスニ敵ノ爲メニ槍ニテ突墮サレ死ントスルヲ家臣旗本ヘ扶ケ來ル 公之ヲ見玉ヒ自カラ言テ前過ヲ免スレハ喜ンテ死スト云 横山五右衛門 大膳 不破忠左衛門

末胤只八ニ至テ天明八 永井兵右衛門 兵右衛門 荒木兵太郎 五左衛門 池田

彌五右衛門 一無五字 末胤不詳 青山金右衛門 八百次 郎祖 佐分次郎左衛門 大聖寺 藩臣儀

兵衛 祖 稻垣覺左衛門 新叟祖也與三 右衛門嫡子 奥村采女直次 源左衛門 祖五千石 奥村六平

軍役通解ニ此陣ニ足輕大將ノ山田八右衛門ト云者ノ一ヲ記シ其祿四千石トアリ若クハ此勘六ノ同姓カ

追考六平ハ寄食ノ士後ニ他國ヘ去ルトアリ

不如一力士也。是宗永獨知黃金之貴。而不知黃金之用也。故身伏刃而流醜。於万代可晒矣。究兵之嘲不帝衛公之鶴。

發獲拾玉集ニハ右京彌弘我首ヲ討テ高名セヨト指申シテ本崎長左衛門重清之ヲ討ツ重清ノ子ナ和左衛門ト云他國ニ行テソタリ奉公ナハス其子羽田權左衛門ハ今ノ尾張ニ仕ヘキ。延康ノ内ニ。七年ノ頃。マテアリ

強敵ヲ防カシメヨ
ト嘲ケルトナリ
敢死ノ將士ヲ率井テ強防スレトモ彫兵羸卒

固ヨリ虓虎奮張ノ軍ニ當ル可ヲサレハ竟ニ兜ヲ脱シテ葡萄

シテ降ヲ乞フ攻兵之ヲ耳ニモカケズ功ハ漏刻ニ在ト愈ヨ意

氣ヲ勵マシ鼓譟シテ之ヲ攻メ逆血川ヲナシ枕屍麻ヲ亂スカ

如ク遂ニ中城ヲ乘崩シ山崎長門ノ家士木崎長左衛門ト云者

右京ノ首ヲ執ル
木崎敵將ヲ捕伏セ馳入ヲ右京見テ自カラ名ノリ首ヲ刎テ授クト云ナリ代々相續ストアレトモ伊豆守ヘ吉田ヲ賜ルハ正徳ニ

我軍中ヘ馳入り奮撃シテ殊死トモアリ
年ヨリノコトナレハ其比マテハ山崎家傳ニ木崎後ニ參州吉田ヘ行キ松平伊豆守ノ家老ト家臣タルカ今伊豆守家老ニ木崎ミヘス一説ニ右京此山崎氏ノ將防戰シテ命

ヲ鋒鏑ニ隕ス者織田孫左衛門成田喜三郎飯田又六郎松井宗

助服部勘右衛門其子小一郎青木彌吉郎林五郎右衛門同彌十

郎吉井吉兵衛市邊清兵衛河村三郎右衛門石川理右衛門
家忠日記

右作
河村善九郎桐山久三郎河合八右衛門
家忠日記八下有郎字 今村喜左

衛門福森藤藏高屋平兵衛竹村傳右衛門内藤右京
山口右京ト同名可疑 藤

島五左衛門永井左次郎中山六藏中村宗左衛門爪生孫四郎水

走惣兵衛中村岩策中井源三郎梅垣小五郎竹島宗助同小太郎

藤井六之助大脇加右衛門西村作助同八右衛門山脇三右衛門

長井藤十郎梅原吉藏中村彦七林藤七同新五郎井岡才五郎片

岡万介福井彦左衛門富田半左衛門森新右衛門柳田兵右衛門

飯田藤助南太郎八華女六右衛門同又九郎吉田源太郎藤堂三

十郎園理介
圖一作岡 加藤傳五村源助瀬村與兵衛同與吉八代市之

助八木七右衛門塚田喜介北尾新右衛門今村十阿彌以下五百

家忠日記作
五百余人

許人

烈祖成績云、兩日之戰、城兵死者八百餘人、關原合戰志云、五百四十四人、見開集云、凡士三百餘人、雜兵共七百餘人、關原記大全云、關士八十餘人、至步

卒奴隸凡八百餘人、景周按、以上每書其數矛盾、城主宗永、自刃シテ城陷

又按、烈祖成績、此時我兵死傷者為九百餘人、見開集為中時城陷山崎譜ノ一說ニ、玄蕃開樓窓、下視城外、長德視之、自放銃擊

ル、之、玄蕃為之却去、公賞此功、增祿四千石、景周按、此說杜撰不足取、又按、宗永父

子ノ事、藩翰譜中不載、難波軍鑑ニ山口左馬助弘定ト云者アリ、玄蕃ノ二男右京

ノ弟ト大坂方ニテ元和元年五月六日、木村長門守重成ト共ニ討死也、關原記大

全ニハ弘定モ元和ノ役ニ井伊氏ノ軍士八田金十郎ニ向ヒ自ラ首ヲ授ク兄弟ノ心一也トアリ

因テ公四井主馬間牒ニ達スル者ニテニ命シテ火ヲ縱タセラレ

一說ニ山口家老織田源左衛門本丸ノ說非ナリトアリ、接ルニ此說之ヲ得タルカ、公首檢ハ城內對面所ニテ床机

ニカ、ラセラレテ首檢アリト九里本ニ見ヘ又下文、篠原加藤等二三丸ニアリ

彼是可併考、公城中ニ入テ効馘アリ、其數五百四十有四顆、此時右京

ハ首色變シ玄蕃瘦ル、是ニ於テ忠將義士ヲ犒ラヒ功勳ヲ賞シ玉フ

ユヘ首色不變ト云、是ニ於テ忠將義士ヲ犒ラヒ功勳ヲ賞シ玉フ

コト各差アリ、此時公城上ニシテ獻功ノ甲乙ヲ正シ、宗永所畜ノ金銀ヲ

諸將褒其功、分給城中金銀以賞戰士トアリ、又云利勝遣使告捷、關東又見開集ニ

此戰擾ニ恐レ山林ニ遁レ匿ル、人民ヲ呼飯シ如故安堵ノ命アレハ、皆酒肴ヲ

獻賀ストアリ、然トモ上注ニモ下注ニモ是ト似クル者アリ可考、即チ假ニ本丸ニ篠原出雲守二丸ニ

加藤宗兵衛、九里本、牧本其他ノ世本皆圖書ニ作ルハ、非也、按ニ加藤譜圖書此

ス圖書ノ父宗兵衛此役ニ旗奉行トナリシコト譜ニ見ユ、然レハ此守城ハ宗兵衛也、三千五百石即今ノ圖書ノ祖、有賀秦六直政、清

衛門ノ祖、諸本作甚六、非也、景周按、甚六ハ縫殿助子左京孫ニテ、自是遙カ後、年也

有賀譜ニ因トキハ、此役ニ出ルハ左京也、左京ハ有賀齋ノ二男ニテ、此役ニ即チ

大聖寺ニ於テ七百石賜ルトアリ、然レトモ守城ノコトハ譜ニ不見、按ルニ古案

記第三卷ニ瑞龍公ヨリ八月十五日有賀秦六ハ賜ル感書ノ文ニ去月十八日

於加賀國能美郡寺井口合戰之時、首一討捕之、忠節神妙トアリ、家譜ニハ秦六ノ

賀齋ニ先ツテ死ストアレトモ、此守城ハ秦六ニシテ、置テ守ラシム、年譜

尚存命也、公ノ感書ヲ証トスヘシ、清右衛門ノ祖、日攻、四日陷城トス、然レトモ系譜其他

諸記ニ三日陷城トス、故ニ本文為三日、是ヨリ先キ宗永越前青木紀伊

守一短ヘ大聖寺攻城ノ急ヲ告ク時ニ一短病篤シテ援ヲ辭シ

此戰擾ニ恐レ山林ニ遁レ匿ル、人民ヲ呼飯シ如故安堵ノ命アレハ、皆酒肴ヲ獻賀ストアリ、然トモ上注ニモ下注ニモ是ト似クル者アリ可考、即チ假ニ本丸ニ篠原出雲守二丸ニ加藤宗兵衛、九里本、牧本其他ノ世本皆圖書ニ作ルハ、非也、按ニ加藤譜圖書此ス圖書ノ父宗兵衛此役ニ旗奉行トナリシコト譜ニ見ユ、然レハ此守城ハ宗兵衛也、三千五百石即今ノ圖書ノ祖、有賀秦六直政、清衛門ノ祖、諸本作甚六、非也、景周按、甚六ハ縫殿助子左京孫ニテ、自是遙カ後、年也、有賀譜ニ因トキハ、此役ニ出ルハ左京也、左京ハ有賀齋ノ二男ニテ、此役ニ即チ大聖寺ニ於テ七百石賜ルトアリ、然レトモ守城ノコトハ譜ニ不見、按ルニ古案記第三卷ニ瑞龍公ヨリ八月十五日有賀秦六ハ賜ル感書ノ文ニ去月十八日於加賀國能美郡寺井口合戰之時、首一討捕之、忠節神妙トアリ、家譜ニハ秦六ノ賀齋ニ先ツテ死ストアレトモ、此守城ハ秦六ニシテ、置テ守ラシム、年譜尚存命也、公ノ感書ヲ証トスヘシ、清右衛門ノ祖、日攻、四日陷城トス、然レトモ系譜其他諸記ニ三日陷城トス、故ニ本文為三日、是ヨリ先キ宗永越前青木紀伊守一短ヘ大聖寺攻城ノ急ヲ告ク時ニ一短病篤シテ援ヲ辭シ

今一日防城アラハ府兵ヲ舉テ夜撃セント答ヘ乃シ其戰略ヲ定ムル所ヘ山口ノ敗卒逃來ルニヨリテ其事已ヌ

一説金津マテ出テ夫ヨリ引

返スト云 丹羽長重モ後距ノ爲メ敷地マテ出兵シ陷城ト聞テ引取

リ三日ノ晚兵五六百ヲ從ヘ金澤封疆ヘ掠メ入り海邑ヲ劫カ

シ本吉ニ抵リ放火シテ歸ル

按ルニ敷地ヨリ本吉マテ六里二十町同日晩ニ至ル左モ有ヘシ

○公抵南越俄班軍大聖寺

四日一説作五日 公暨ヒ利政君大聖寺ヲ發旌シ隊伍整然トシテ細

呂木加越ノ界ヲ踰ヘ先隊ハ五本村長崎邊マテ押ツメ長家記ニヨル本陣ハ

金津ノ上野ニ布玉ヘハ近郷ノ民悅服ス

近郷ノ農商 公ノ軍至ラハ燒夷縱掠セラレント恐

ル處 公ノ法令嚴正ナレハ農商悅服スト云見聞集ニ此時森田武兵衛ヲ召シ若狹越前瀨海ノ民家ヘ放火スヘシトノ命ニヨリテ森田三國津ニ赴キ一族ノ

森田三郎左衛門同彌五右衛門ト議スルニ三國ハ此二人ノ支配地ナレハ此二人其配下ノ民屋ニ放火スルヲ止メラルレハ重テ 公ノ上方ヘ發向ノ先手ニ屬セント願フニヨリ武兵衛其誓紙ヲ取本陣ニ販リ報スレハ 公其謀リコトノ宜ヲ賞スト也武兵衛ハ四百石ニテ百太郎祖也 國祖以來船手ノ奉行タリ

ト云 五日 公等俄カニ金津ヲ起テ大聖寺ニ歸リ玉フ

藤田安勝覺書ニ 微妙

公曰フ 肥前殿大聖寺城ヲ攻落シ上方ヘ攻メ登ラル、ハヅノ所臆病者有リテ大谷刑部ニタラサレ自筆ノ書狀ニテ上方ヘ人數指登セ玉ヘハ其跡ニ海手

ヨリ金澤ヘ人數ヲ回シ金澤城ヲ攻取ルハヅノ間早速人數引取り國モト用心肝要ト中來ユヘ 肥前殿モ之ヲ誠ト被思金澤ヘ人數引回シ玉フ由ヲ記ス景

周按此説可証也然ルニ世間ニ穩當ナラサル説多シ姑ク其概ヲ舉ク茲ニ俄ニ金津ヲ起テ歸リ玉フハ大谷中川宗半ノ京ヨリ北歸スルヲ敦賀ニテ之ヲ擒ヘ

上方ノ軍兵海路ヨリ金澤ヘ回ル旨ヲ強テ手書セシメ 公ヘ告ルユヘナリト輿論ノ歸アル所ニ因テ兵家者流モ喋々トシテ之ヲ口實トスレトモ此説非也

有澤永貞曰宗半ハ其節上京ノコト不聞 公ニ從ヒ出勢ノ内也吉繼モ亦不居敦賀有澤武貞曰宗半書ノ寫ニ横山山城守殿トアリ此節猶大膳ト云シカノミ

ナラス縱令敵ニ囚ハレ命ハ捨ルトモ不義ノ書不可書ハ武士ノ本意也若之ヲ書タラハ何ソ中川ノ子孫今賀府ニ榮ヲ得ヘケンヤ永貞又曰戸田武藏 公ト

親シ因テ書ヲ献ス其旨ニ曰伏見ハ落城ス 内府ノ上京未ク知レヌ閣下獨上リ玉フトモ其詮ナシ先歸陣アリテ重テ出軍可然ト故ニ兵ヲ返シ玉フト云又

法燒拂ノ聞ヘ
ニテ公ノ版
陣シ玉フトノ
トハ小松軍談
トテ小松ノ丹
羽カモトニテ
書キタルモノ
ニ出ツ

略譜ニ長重本吉放火ノ説金津ノ陣ヘ聞ユルユヘ
且七日大聖寺ノ諸兵

ヲ擧テ引拂ヒ上途ノ後空城トナルヲ以テ大谷吉繼奥山雅樂

助ヲ伴ヒ越前敦賀ヲ發シ同州府中ニ到リ堀尾帶刀吉晴ノ城

代堀尾宮内ト和シ城ヲ受テ北庄ニ抵リ青木一矩ト軍議シテ

大聖寺ニ來リ城ヲ繕ロヒ奥山ト木下宮内少輔ニ蜂須賀阿波

守至鎮同長門守家政ノ兵ヲ加ヘテ置ク
城主記武家勳功記等ノ説ハ類之烈祖成績ニハ之ニ

高木法齋ヲ加フ法齋
ノコハ下文ニ辨ス

○長連龍戰於淺井驪松平康定有鎗功

七日 成田書作七日 朝年譜作八日 我先軍ノ諸兵五六千許大聖寺ヲ發シ小松ノ

假成トシテ長父子山崎奥村 榮 大田富田 下 高山御幸塚ニ着陣

ス 長家記ニハ高塚村後背ヲ經テ御幸塚ニ至リ南原ニ備 公ハ七日夜大

聖寺ヲ發旌アリ 此時大聖寺ニ置ク所ノ篠原等ヲモ引擧ケテ從軍セシム

山等來守ル 且大聖寺ニテ被創ノ輩ハ先ヘ歸サセラル此時空城トナ

地ノ名ト相符ス景周曾テ之 今作津波倉此邑社ノ藏ニ右作ノ 本郷佐佐木千代ヲ經テ三堂ノ營ニ抵

リ玉フ横山富田 下野 村井等之ニ扈從ス長等ハ御幸塚ニ於テ

七日夜胥議シ明日此軍ヲ三堂ニ引取ルニ湖東ヲ過ルハ敵城

ト路程相距ルコト遠シテ敵ヲ怕レ避ルニ宵タレハ中夜ニ起

程シ今江大領ヲ經淺井ヘカ、リ 世本此道條ノ叙次ヲ失フ 引取ン

ト云フ時ニ松平康定之ヲ難スレトモ諸將其言ヲ用ヒス連龍

ヲ後殿ノ將ト定ム 舊説康定進テ敵城近ク行軍センハ危シト云ヘトモ長

也附入ニ城ヲノラント康定服セスシテ爭フヲ奥村高山之ヲナクム康定此コトニ激シ淺井繩手ニテ先進テ合槍スト云又說康定山崎ニ言フ明日ハ敵尾シテ來ラン其備有ヘシト山崎答フ尾シテ來ルハ最前ニ在ルヘシ何ソ明日ニアラソヤ康定曰我敵ノ目前ヲ過ルニ彼豈之ヲ坐シテ視ンヤト山崎曰子何ソ黄口ニシテ喋々スルヤト康定曰然ラハ明日ノ一番槍ハ我之ヲナサント言テ坐ヲ退クト云又說太田殿將ヲ望ムニ長ニ決セシカハ太田缺望シ之ヲシテ苦戰セシメントテ此道ヲ押通ラント言出スト云景周按諸說相反難印証今徵實記以立本文長家記ニ此時衆議アル所山崎進テ殿將ヲラント請フ連龍曰利政君今日後軍ヲレハ明日殿後ハ我手ニアリ他將ノ望ヘキニ非スト富田高山太田此議ヲ可也トシテ之ニ決ストアリ又今ノ松平和康久兵衛ニ家譜ヲ乞テ見ルニ諸將三堂山ヘノ道條淺井繩手然ルヘシト一決セシユヘ康定曰淺井ヲ通ラハ城兵出撃セン道ノ便モ惡ク不可然旨演ヘラントモ諸將承引ナク乃一番槍ノ覺悟ノ處敵果シテ出ツコリテ眞名坂橋山代橋ノ上ニテ合槍ストアリ此二說以テ斷ヲナスヘシ長重ハ我カ御幸塚ノ軍明日ウケ起シコトヲ察シ之ヲ阨ニ擊ントテ衆士ヲ集メテ戰

略ヲ議ス一說此時金澤衆ノ中ヨリ上坂主馬今江橋マテ斥候ニ來リ小松ノ伏兵ニ逢テ交刃シ互ニ兵ヲ斂テ歸ルトアリ老臣坂

井膝ヲ前メテ曰ク今夜今江湖ニ航シテ串村ヨリ上陸シ枚ヲ

景周曰胡盛
谷得雨而司
馬懿脫死御
幸塚得雨夜
擊止皆天也
縱令坂井擊
之豈有其利

銜ミテ不虞ニ御幸塚ヲ襲ハシ大利有ント江口曰ク夜討ノ策奇ナリトイヘトモ若過マタハ其善鬪軍ニ及フトイヒ商議決セザル處ヘ暴雨沛然トシテ降り來レハ長重惑フテ措ク所ヲ知ラス坂井又曰ク此雨ニ乘シテ擊タハ愈ヨ利有ント長重從ハスシテ事止ム御幸塚ノ諸將ハ八日年譜創業記及ヒ長家臣大領ノ碑上ニ九日トアリ然レトモ七日ハ御幸塚着陣ナレハ八日ハ的當也ナラン且成田九里本ニモ八日朝ト正シ載セタルハ今從之鷄鳴ヨリ打起ツ八日己時皆御幸見目塚ヲ引取ト云一番ハ山崎二番ハ高山三番ハ奥村四番ハ富田下五番ハ太田殿後ハ長父子也一說有横山無富田非也又長家記此而シテ乙師ノ渡今江橋西ニテ今江橋下ノ上流木場湖ノ口也ヲ越ヘ南淺井ヘカ、リテ引クモアリ淺井退分道ヨリ小松街尾マテ六町二十一間也九里本ニハ小松街尾ヨリ南淺井マテ二十

關原記大金
作山城橋曰
橫山山城邊
軍於遠橋邊
故爲橋名此
說非也

殘雲集云江口
ノ出タルハ十
四騎ニテ役々
大物見ノ如ク
出タルト也

二町餘

或ハ今江橋ヲ踰ヘ龍ケ馬場

今ノ往還ニテ今江村沼田ノ際

大領ヨリ山代

橋一作山城橋又謂之三枚橋松平譜作眞名板橋今存者長二間三尺幅四尺許之

小橋也此橋マテ大領ヨリ七町又九里本ニ長重カ備ヘシ穢多ケ巷ヨリ此橋

マテ十五町五十間トアリ可併考又南淺ニ向テ押スモアリ長重ハ佐々

井村ヨリ此橋マテ一町四十三間ト云

七兵衛ヲ斥士トシ今江頭へ出シ江口ヲ大斥候トシ士卒七八百

大領ノ此方へ出サシム佐々江口ニ告テ曰ク敵軍ハ今江橋ヲ

過キ大領ヨリ淺井驛へ景周接駁ハ說文云田兩陌間道也繩手ノ手ハ道

道也古歌ニモ陸奥ノヒタノ繩手ノ馬サクリ也モト田ヲ丈量スルトキ繩引シテ餘ル處ノ間

ナト詠セルアリ京ニモ四條繩手ノ号アリカ、ツテ引也速カニ奇兵

ヲ以テ擊ツヘシト江口此旨ヲ使テ飛セテ長重へ告ク此時長重

前ニ長重ハ此告ニヨリ精兵ヲ提ケ馬ヲ乗出サントスルニ永

原寶寶院松雲按ルニ善ク軍利ヲ言者ニテ此北游說諸國爲諸侯矜式者也

景周曾讀惺窩先生文集有載永原松雲子乞父畫像之詩先生

用淮陰事、水岡越後長重ノ承韜ヲ握テ曰ク敵ノ軍ノ既ニ押去

可推知、者若シ下口ヨリスルモノト合シ長蛇ノ陣勢ヲ以テ首尾相應

前後挾擊セハ殆ント死地ニ墮テ懊悔ストモ及ハシト之ヲ止

ム於是長重古田加兵衛佐々太右衛門雜賀兵部澤野次郎右衛

門澤野一一作深町九郎兵衛森野治左衛門一作坂井彌五左衛門團七

兵衛藩臣氏家彌三子也長重流半寺岡勘左衛門勘一作權原田考ニ此者

云松村孫三郎成田書ニハ江口物見ニ出ル時古田坂井澤野佐々森野團小

松ヨリ抜カケニ龍ケ馬場へ出テ早ク高名ストアリ又同書

ハ是ニ氣ヲ得テ殿軍へ擊テカ、リ長家記ニハ此時江口數百兵ニ將

ニ起リ殿軍ノ半ヲ遮擊シトシテ大領一屋邊ニ埋伏シ不意

前後ヲ斷ツトアリ可考、松村ハ大領へ單騎ニテ乗出シ前ナル渠

ニ起リ殿軍ノ半ヲ遮擊シ

改春百兵談ニ
記ニ四村ナ
召シ置カレ
信濃ノ主宿
其ノ上家老
ハ松村孫三
ニテナレハ
ナリ長重方
テハ八百石
リト云フ

景周曰六翰
云阻難於路
可樂亂行可
擊江口松村
善得用兵之
旨

景周曰六翰
之敗非諸將
之志憤而在
諸將之執拗
欲將誠可惡
矣項王自將
帶甲影十萬
猶用舍人之
言而有功矣
言而功不
度量廣狹不
戰國之士多
險悍之氣取
害己心而取
敗者不少矣
從諸將之虛
何至乎此言

家直河江口カ
後孫ノ竹坡ト
號セル者ノ次
韻ニ乃親江口
又若仕丹日侯
故以勇略顯名
慶長中從佐守
小松城出前山
氏相拒其後井
賊上之戰至今
談兵者稱爲口
實ト云前韻ヲ
トシテ其詩ニ
慶長天下別東
西江口聲威草
木思勇氣衝長
三尺劍壯心貫
日一條紅ト云
以下四句略之

左門計八四首
尾見底記今
略之

ナ越テ殿隊ノ卻アルヲ 此時連龍長柄ヲ一集ニ結束セシメ鳥銃ヲ馬ニ負ハセルト淺井記ニ見ユ景周按是レ前注ニ松

平康定ニ連龍不答 大領ト一屋ノ間ニ舟津三味ト云アリ松村此所ヨリ馳出ト云舟津三味ハ即チ今

ノ三味遂 今ノ平左衛門祖 長ノ臣小林平左衛門 進ンテ松村ト馬上ニテ槍

ヲ合セ二人共ニ馬ヨリ墮ツ小池新丞 長ノ臣 小林ヲ援ケ來レト

モ叶ハス遂ニ團ノ爲メニ首ヲトラル 今團カ家ニ七兵衛自筆ニテ其時長重ヘ書出ス有判ノ働

書一通ヲ藏ス夫ニハ小林ノ首ヲ團トリ證人菅野太左衛門等五人有之處ト首

ナハ松村孫三郎若黨ニ奪ハスルヨシ且松村ハ小林ニ槍付ザル由ヲ記セリ政

春古兵談ニハ傍輩トモ來リ合セ 松村モ槍疵ヲ被フムレモ團之ヲ扶

首モ脇刺モ團ヘ取テ返ストアリ

ケテ退ソク長ノ衆接戰ニ堪ヘサルニマタモヤ冥雨驟カニ來

リ銃藥霑ヒ線火モ滅エテ鉛子ヲ放ツコト能ハス且紆曲タル

一綫ノ逕滑カニシテ足ヲ受ズ左右ハ不測ノ深泥ナレハ股粟

戰フテ防クニ便ナラス小松ヨリハ追々生兵加ハリ江口ノ鋒

甚タ隆ンナリ長好連接合フテ奮戰ス時ニ敵ノ銃丸來リ鞍ノ

前輪ヲ打貫ク之カ爲メニ股ヲ傷ケラル因テ長ノ兵敗衄ス長

父子愈深泥ニ逼ル 此地今大領ノ廣野ヨリ大領村ノ深泥ニ移ル交ト云 然レトモ連龍撓マス

前後ヲ指揮シ或ハ戰ヒ或ハ罵ツテ爰ユソ還拒スヘキ場所ナ

レト大ニ呼ハリ疲兵ヲ激スレハ沖覺左衛門 長ノ臣今ノ次郎太夫祖也世本沖作隱岐非

也以下皆 長ノ臣 馬ヨリ下テ佐々ト交刃シテ死シ首ヲ取ラル次テ堀内

一周 半兵衛祖 ハ深町ト澤野ノ爲メニ相討ニセラレ長中務ハ 八郎左衛

門 古田ニ首ヲ取ラレ鹿島路六左衛門 今無子孫 ハ坂井ニ討タレ八

田三助 戸太夫祖 ハ西脇左門 九里本作勝左衛門 ニ討タレ鈴木權兵衛 猪三郎祖 ハ森